

よし　たけ

吉武遺跡群

XIV

飯盛・吉武圃場整備事業関係調査報告書 8

福岡市埋蔵文化財調査報告書第731集

下 卷

－西区金武古墳群吉武S群1・2号墳調査報告－

2002

福岡市教育委員会

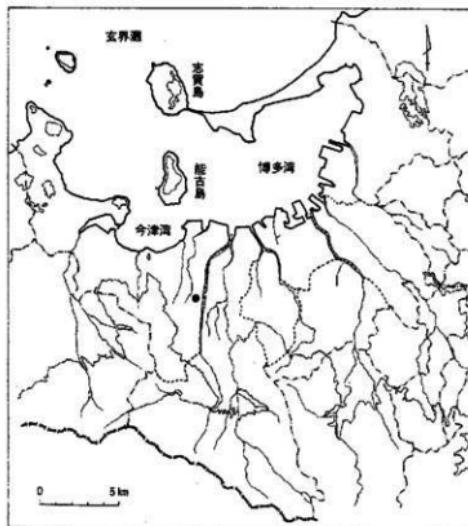
吉武遺跡群

XIV

飯盛・吉武圃場整備事業関係調査報告書 8

－西区吉武古墳群吉武 S 群 1・2 号墳調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第731集下巻



遺跡略号 YST 4
調査番号 8335

2002

福岡市教育委員会



1. 吉武 S 群 1・2号墳全景（北から）



2. 吉武 S 群 1号墳全景（西から）



1. 吉武 S 群 1 号墳全景（南から）



2. 吉武 S 群 2 号墳全景（南から）



03033



03006



03013



03030



03053



03054



03055



03056



03066

(03033・03006・03013・03030-S 1号墳、03053～03056・03066-S 2号墳)

序 文

古来より大陸交渉の門戸であった福岡市域には、特に朝鮮半島、中国大陆との各時代の文化交流を示す数多くの遺跡が残されています。

このうち市西部の早良平野に分布する吉武遺跡群は、主に弥生時代から平安時代にかけての多くの遺跡が分布する地域として知られています。

ところで、本遺跡群では、昭和56年度から飯盛・吉武地区圃場整備事業が施工され、これによって失われる埋蔵文化財について、事前に発掘調査による記録保存が必要となり、事業が完結する昭和60年度まで調査を継続しました。発掘調査の結果、各時代の豊富な遺構・遺物が検出されました。

それらは、紀元前二世紀に遡る弥生時代前期末から中期初頭期の特定集団墓地や大形掘立柱建物群、紀元前後の墳丘墓、古墳時代中期の帆立貝式前方後円墳・円墳群及び集落跡、奈良時代末から平安時代の官衙或いは寺院跡などです。

さて、これらの調査成果につきましては、これまで弥生時代を中心に7冊の報告書を刊行してまいりましたが、今年度は旧石器時代及び前方後円墳についての報告を行います。

つきましては本書が市民の方々の埋蔵文化財への理解と認識を高める手助けとなり、更に学術研究や生涯教育の分野において役立つものとなれば幸いです。最後になりましたが、発掘調査での飯盛・吉武土地改良組合の方々、調査作業員の皆様方及び市農林水産局の関係者、報告書作成に関わった整理作業員の方々をはじめ、本遺跡の国史跡への指定につきまして強力なご理解とご協力をいただいた地権者の方々に対し、心から感謝申し上げる次第です。

平成14年3月29日

福岡市教育委員会

教育長 生 田 征 生

例　　言

1. 本書は、飯盛・吉武地区上地改良事業（圃場整備）に伴い、発掘調査を実施した福岡市西区大字
飯盛・吉武地区に所在する『吉武遺跡群』の古墳時代中期の前方後円墳・方墳についての発掘調
査報告書である。
2. 発掘調査は、福岡市教育委員会埋蔵文化財課が昭和56～60年度にわたって実施した。
3. 発掘調査で検出した各遺構は、種類毎に略号を付し、土壙をSK-○・SH-○、溝状遺構をSD-○、
竪穴住居跡をSC-○、掘立柱建物をSB-○、小ピットをSP-○、豪棺墓をK-○、石棺墓をSS-
○、土壙墓をSX-○とした。
4. 本書は、調査された遺構・遺物のうち、旧石器・古墳時代を中心に報告するものである。
5. 本書に使用した遺構実測図の作成は、調査担当者のはかに別記の調査員が行った。また、遺物実
測は、調査担当者が行った。
6. 本書に掲載した遺物類の復元作業は、小森佐和子、土斐崎つや子、安野 良、副田則子が行った。
7. 本書に使用した図面類の整図及び製図は、調査担当者の他に安野 良、副田則子が行った。
8. 本書に使用した航空写真撮影は、(株)朝日航洋に委託し、他の遺構写真は 下村 智(現別府
大学助教授)、横山邦郷、力武卓治、加藤良彦が行った。
9. 本書で使用した方位は、全て磁北である。なお、真北は西偏6度21分である。
10. 本書の執筆は、第一～四章を横山が担当した。
11. 発掘調査で出土した遺物や図面・写真類などの記録類は、『収蔵要項』に基づいて整理を行い、
埋蔵文化財センターに収蔵・保管する予定である。
12. 表紙題字は、杉山悦子氏（元埋蔵文化財センター）にお願いした。記して感謝いたします。

本文目次

第一章 はじめに	
1. 調査に至る経過	1
2. 調査の組織	1
第二章 遺跡の立地と環境	3
第三章 発掘調査の記録	9
第一節 吉武 S 群 1 号墳（櫛渡古墳）の調査	11
1. 調査前の遺存状況	11
2. 墓丘の形状と規模	11
3. 埋葬施設	12
4. 外部施設 ① 葦石	12
② 墓輪列	12
③ 周溝	12
④ 陸橋状構造	13
5. 出土遺物 ① 土器類	13
② 墓輪類	20
第二節 吉武 S 群 2 号墳（方墳）の調査	42
1. 調査前の遺存状況	42
2. 墓丘の形状と規模	42
3. 埋葬施設	42
4. 外部施設 周溝	42
5. 出土遺物 ① 土器類	44
② 墓輪類	45
第四章 おわりに	51
① 円筒埴輪を出土した土壤について	52
② 吉武 S 群 1・2 号墳出土の円筒埴輪について	58

挿図目次

Fig. 1 吉武古墳群位置図 (1/50,000)	3
Fig. 2 飯盛山々麓周辺古墳群分布図	4
Fig. 3 早良平野の前方後円墳集成① (1/400)	5
Fig. 4 早良平野の前方後円墳集成② (1/400、1/800)	6
Fig. 5 吉武遺跡群調査区図	7
Fig. 6 金武古墳群吉武 S 群分布図 (1/5,000)	8

Fig. 7	金武古墳群吉武 S 群調査図 (1/5,000).....	9
Fig. 8	吉武 S 群 1 号墳々丘測量図 (調査前) (1/350).....	10
Fig. 9	吉武 S 群 1・2 号墳々丘測量図 (検出時) (1/200).....	(折り込み)
Fig.10	吉武 S 群 1 号墳々丘及び墳丘土層断面測量図 (1/300、 1/100).....	(折り込み)
Fig.11	吉武 S 群 1 号墳円筒埴輪出土状況図 (1/150).....	(折り込み)
Fig.12	吉武 S 群 1 号墳周溝土層断面実測図 (1/40).....	17
Fig.13	吉武 S 群 1 号墳周溝内陸橋状構造実測図.....	18
Fig.14	吉武 S 群 1 号墳々丘出土土器実測図 (1/3).....	19
Fig.15	吉武 S 群 1 号墳周溝内出土土器類実測図 (1/3).....	21
Fig.16	吉武 S 群 1 号墳出土円筒埴輪実測図 (1) (1/3).....	23
Fig.17	吉武 S 群 1 号墳出土円筒埴輪実測図 (2) (1/3).....	24
Fig.18	吉武 S 群 1 号墳出土円筒埴輪実測図 (3) (1/3).....	25
Fig.19	吉武 S 群 1 号墳出土円筒埴輪実測図 (4) (1/3).....	26
Fig.20	吉武 S 群 1 号墳出土円筒埴輪実測図 (5) (1/3).....	28
Fig.21	吉武 S 群 1 号墳出土円筒埴輪実測図 (6) (1/3).....	29
Fig.22	吉武 S 群 1 号墳出土円筒埴輪実測図 (7) (1/3).....	30
Fig.23	吉武 S 群 1 号墳出土円筒埴輪実測図 (8) (1/3).....	31
Fig.24	吉武 S 群 1 号墳出土円筒埴輪実測図 (9) (1/3).....	32
Fig.25	吉武 S 群 1 号墳出土円筒埴輪実測図 (10) (1/3).....	33
Fig.26	吉武 S 群 1 号墳出土円筒埴輪実測図 (11) (1/3).....	34
Fig.27	吉武 S 群 1 号墳出土円筒埴輪実測図 (12) (1/3).....	35
Fig.28	吉武 S 群 1 号墳出土円筒埴輪実測図 (13) (1/3).....	36
Fig.29	吉武 S 群 1 号墳出土円筒埴輪実測図 (14) (1/3).....	37
Fig.30	吉武 S 群 1 号墳出土円筒埴輪実測図 (15) (1/3).....	38
Fig.31	吉武 S 群 1 号墳出土円筒埴輪実測図 (16) (1/3).....	39
Fig.32	吉武 S 群 1 号墳出土円筒埴輪実測図 (17) (1/3).....	40
Fig.33	吉武 S 群 1 号墳出土形象埴輪実測図 (18) (1/3).....	41
Fig.34	吉武 S 群 2 号墳周溝内出土土器実測図 (1/3).....	42
Fig.35	吉武 S 群 2 号墳出土状況測量図 (1/100).....	43
Fig.36	吉武 S 群 2 号墳断面図 (1/100).....	44
Fig.37	吉武 S 群 2 号墳周溝内出土円筒埴輪実測図 (1) (1/3).....	45
Fig.38	吉武 S 群 2 号墳周溝内出土円筒埴輪実測図 (2) (1/3).....	46
Fig.39	吉武 S 群 2 号墳周溝内出土円筒埴輪実測図 (3) (1/3).....	47
Fig.40	吉武 S 群 2 号墳周溝内出土円筒埴輪実測図 (4) (1/3).....	49
Fig.41	吉武 S 群 1・2 号墳と円筒埴輪出土の SH04 土壌位置図.....	51
Fig.42	SH04 上壤出土状況実測図 (1/30).....	52
Fig.43	SH04 出土円筒埴輪と共伴土器類実測図 (1/3).....	53
Fig.44	吉武 S 群 1 号墳出土埴輪集成図 (1) (1/6).....	54
Fig.45	吉武 S 群 1 号墳出土埴輪集成図 (2) (1/6).....	56
Fig.46	吉武 S 群 1 号墳出土埴輪集成図 (3) (1/6).....	57

Fig.47	吉武 S 群 1 号墳出土埴輪集成図 (4) (1/6).....	58
Fig.48	吉武 S 群 2 号墳出土埴輪集成図 (1) (1/6).....	59
Fig.49	吉武 S 群 2 号墳出土埴輪集成図 (2) (1/6).....	60
Fig.50	S1・2号墳、SII04土壙出土遺物集成図.....	61
Fig.51	早良平野と周辺の前方後円墳分布図 (1/50,000).....	62
Fig.52	早良平野における吉武 S 群 1・2 号墳の編年的位置図.....	64

図 版 目 次

- PL. 1 1. 吉武 S 群 1 号墳全景 (調査前) (東から)
2. 吉武 S 群 1 号墳全景 (検出時) (東から)
- PL. 2 1. 吉武 S 群 1・2 号墳全景 (検出時) (南から)
2. 吉武 S 群 1・2 号墳全景 (検出時) (東から)
- PL. 3 1. 吉武 S 群 1 号墳全景 (東から)
2. 吉武 S 群 1 号墳墳丘検出状況 (南から)
- PL. 4 1. 吉武 S 群 1・2 号墳検出状況全景 (航空写真) (南西から)
2. 吉武 S 群 1 号墳検出状況全景 (西から)
- PL. 5 1. 吉武 S 群 1 号墳墳丘全景 (北東から)
2. 吉武 S 群 1 号墳前方部及び後円部葺石検出状況 (西から)
- PL. 6 1. 吉武 S 群 1 号墳後円部墳丘遺存状況 (南から)
2. 吉武 S 群 1 号墳前方部及び後円部葺石構築状況 (西から)
- PL. 7 1. 吉武 S 群 1 号墳前方部葺石遺存状況 (西から)
2. 吉武 S 群 1 号墳後円部葺石遺存状況 (北から)
- PL. 8 1. 吉武 S 群 1 号墳後円部東側北半部円筒埴輪列出土状況 (北東から)
2. 吉武 S 群 1 号墳後円部東側南半部円筒埴輪列川土状況 (北東から)
- PL. 9 1. 吉武 S 群 1 号墳後円部東側埴輪列及び葺石出土状況 (北東から)
2. 吉武 S 群 1 号墳後円部東側埴輪列及び葺石出土状況 (北東から)
- PL.10 1. 吉武 S 群 1 号墳後円部東側埴輪列及び葺石出土状況 (東から)
2. 吉武 S 群 1 号墳後円部東側埴輪列及び葺石出土状況 (東から)
- PL.11 1. 吉武 S 群 1 号墳後円部東側埴輪列及び葺石出土状況 (東から)
2. 吉武 S 群 1 号墳後円部東側埴輪列及び葺石出土状況 (東から)
- PL.12 1. 吉武 S 群 1 号墳後円部南側円筒埴輪列及び葺石出土状況 (北東から)
2. 吉武 S 群 1 号墳後円部南側円筒埴輪列近影 (東から)
- PL.13 1. 吉武 S 群 1 号墳前方部周溝付近遺物出土状況 (南から)
2. 吉武 S 群 1 号墳後円部周溝内に付設された陸櫓状施設検出状況 (北東から)
- PL.14 1. 吉武 S 群 1 号墳後円部周溝内に付設された陸櫓状施設検出状況近影 (西から)
2. 吉武 S 群 1 号墳後円部周溝内土師器出土状況近影 (南から)
- PL.15 1. 吉武 S 群 1 号墳後円部墳丘西侧土層断面 (北から)
2. 吉武 S 群 1 号墳後円部墳丘西侧土層断面 (北から)

- PL.16 1. 吉武 S 群 1 号墳後円部埴丘東側土層断面（北から）
 2. 吉武 S 群 1 号墳後円部埴丘東側土層断面（北から）
- PL.17 1. 吉武 S 群 1 号墳埴丘断面遺影（北から）
 2. 吉武 S 群 1 号墳後円部西側裾部埴丘断面（北から）
- PL.18 1. 吉武 S 群 2 号墳全景（南から）
 2. 吉武 S 群 2 号墳検出状況（東から）
- PL.19 1. 吉武 S 群 2 号墳検出状況（西から）
 2. 吉武 S 群 2 号墳葺石西側構築状況（西から）
- PL.20 1. 吉武 S 群 2 号墳南東隅部葺石構築状況（東から）
 2. 吉武 S 群 2 号墳南西隅部葺石構築状況（西から）
- PL.21 吉武 S 群 1 号墳出土円筒埴輪①
- PL.22 吉武 S 群 1 号墳出土円筒埴輪②
- PL.23 吉武 S 群 1 号墳出土円筒埴輪③
- PL.24 吉武 S 群 1 号墳出土円筒埴輪④
- PL.25 吉武 S 群 1・2 号墳出土円筒埴輪
- PL.26 吉武 S 群 2 号墳出土円筒埴輪
- PL.27 吉武 S 群 2 号墳出土円筒埴輪・同 1 号墳出土土器類
- PL.28 吉武 S 群 1 号墳出土形象埴輪
- PL.29 1. 2 号支線道路調査区全景（南から）
 2. 2 号支線道路調査区全景（北から）
- PL.30 1. SH04土壤出土状況（北から）
 2. SH04土壤出土状況（東から）

表 目 次

Tab 1 吉武遺跡群調査一覧

第一章 はじめに

1. 調査に至る経過

吉武遺跡群は、それまで昭和44年に行われた九州大学考古学研究室による分布調査やその後の市教育委員会の遺跡分布調査によって弥生～古墳時代の遺物が分布することが知られていたが、本格的調査は、昭和55年（1980）6月11日付けで、当時の農林水産省農業構造改善部農業土木課より教育委員会文化部文化課へ提出された「飯盛・吉武地区宮園場整備事業」の施工計画にともなう発掘調査が始めとなった。

当初の整備計画では、総対象面積は46.4haで、昭和55年度3.6ha、昭和56年度9.0haで、次年度以降33.8haを順次整備していくものであった。

この圃場整備にともなう発掘調査は、工事施工と調査が重複するため、各事業年度での調査規模を設計変更などで最低にしづらこむために、土地改良組合理事、文化課担当者、農業上木課担当者で定期的に必要な協議がもたれ、事業の円滑な推進がはかられた。

そして昭和56年度は8.3haのうち1.2haを調査、昭和57年度は7.9haのうち2.1haの調査を行ったが、調査着手できるのが秋以降からで、遺構密度の濃いことも拍車をかけて、調査が年度末の気候厳しい時期までずれこむのが通例となつた。

昭和58年度は、昭和58年9月12日から昭和59年3月20日にかけて遺跡群のほぼ中央部にあたる10.1haの事業対象地のうち2.5haの発掘調査を行つた。

調査では、弥生時代中期～後期の甕棺墓地、古墳時代中期の密度の濃い集落跡及び同時期の古墳群などが多く検出された。この中でも特に帆立貝式前方後円墳であった檍渡古墳（吉武S群1号墳）は、その墳丘の大半が弥生時代中期の墳丘墓の墳丘を利用した特異なもので、隣接して造営された方墳（同2号墳）とともに古墳時代中期の室見川左岸地域の勢力関係を知る上で非常に重要な古墳群であったが、度重なる協議の結果、現状の保存は困難であった。

2. 調査の組織

昭和58年度（第3次調査）

【調査委託】	農林水産省農業土木課、飯盛・吉武地区土地改良組合
【調査主体】	福岡市教育委員会 教育長 西津茂美
【調査総括】	文化課長 生田征生 埋蔵文化財第2係長 折尾 学
【調査庶務】	埋蔵文化財第1係 岡鷗洋一、古蘇国生
【調査担当】	発掘調査 下村 智（現別府大学助教授）・横山邦継 試掘調査 田中寿大
【調査・整理調査員】	田中克子、緒方俊輔（現高千穂町教育委員会）
【調査作業員】	村本健二、溝口武司、中山 章、牧 茂幸、川田 初、 橋 哲也、大賀敏明、青柳貴子、青柳弘了、青柳陽子、 池田由美、石橋洋子、井上カズ子、井上清子、井上千代子、 井上トミ子、井上ヒデ子、井上磨智子、井上ムツ子、 鬼尾喜代子、岸田 浩、清末シズエ、倉光アヤ子

Tab. 1 吉武遺跡群調査一覧(平成14年1月現在)

番号	調査番号	次 数 名	所 在 地	調査期間	調査面積(㎡)	相 当 者	報 告 書
1	8102	国場整備第1次	西区大学飯盛字本名地内	1981.1.31～ 1982.5.15	12,000	二宮忠司・小林義彦 田中寿夫	福岡市埋蔵文化財調査報告書 第437・514・580・600・650・675集
2	8234	国場整備第2次	西区大学飯盛地内	1982.9.1～ 1983.6.215	21,000	二宮忠司	437・514・580・600・650・675集
3	8235	田・新盛築第1次	西区大学飯盛字トノ並地内	1982.9.22～ 1983.3.212	5,200	山崎龍雄	127集
4	8336	国場整備第3次	西区人字古字板塚街118他地 内	1983.9.2～ 1984.9.24	25,000	横山邦輔 下村 智	143・461・514・580・600・650・ 731集
5	8415	田・新盛築第2次	西区大学飯盛地内	1984.9.13～ 1984.9.31	1,600	浜石哲也	194集
6	8416	国場整備第4次	西区大字吉武字高木194他地 内	1984.7.31～ 1985.3.20	26,000	横山邦輔・下村 智 常松幹雄	143・437・461・514・580・600・650集
7	8426	野方・金武塚第2次	西区大学吉武三丁目148他地 内	1985.3.25～ 1985.6.31	2,300	横山邦輔 下村 智	187集
8	8518	国場整備第5次	西区大学吉武字高木地内	1985.7.7～ 1985.7.24	470	横山邦輔	143・461・514・580・600・650集
9	8535	国場整備第6次	西区大学吉武字大石油内	1985.8.1～ 1986.3.31	28,000	力武卓治・下村 智 常松幹雄・江藤良彦	143・461・514・580・600・650・ 731集
10	8550	国場整備第7次	西区大学吉武字人右38他地内	1986.11.16～ 1987.3.27	5,000	力武卓治 常松幹雄	未刊
11	8662	野方・金武塚第5次	西区大学飯盛地内	1986.5.31～ 1986.5.30	23,000	二宮忠司 佐藤一郎	303集
12	8714	野方・金武塚第7次	西区大学飯盛字トノ並地内	1987.6.6～ 1987.6.29	2,810	二宮忠司 佐藤一郎	303集
13	8752	国場整備第8次	西区大学吉武地内	1988.6.30～ 1988.9.31	1,000	力武卓治 常松幹雄	未刊
14	8838	国場整備第9次	西区大学吉武字木北内	1988.7.25～ 1988.9.6	724	山崎龍雄	未刊

第二章 遺跡の立地と環境

吉武遺跡群は、福岡市西部域の早良平野に位置し、平野を北に貫き、今津湾にそそぐ室見川中流域左岸にあたる。この地域には、背振山から北に延びた一支脈上にある飯盛山（標高382m）の東側山麓を流れる日向川の宮力によって形成された広大な扇状地が見られ、後期旧石器時代以来の濃厚な遺跡の分布が知られている。このうち遺跡群のはば中央から南西区域には前方後円墳（帆立貝式）・方墳、円墳27基以上で構成される古墳群があり、『金武古墳群吉武S群』と呼ばれている。

この古墳群は、全て標高が30~25mほどの扇状地上に造営されており、南西側の円墳群は浅い谷縁辺に密集する特徴をもつ群集墳である。また、円墳群は玄室が奥壁にむかってやや開き気味となる石室墳で、墳丘とともに遺存は良くないが、各古墳ともに豊富な副葬遺物が出土している。

以下では、吉武S群の1・2号墳の調査報告を行うにあたり、今まで早良平野或いは旧早良郡で確認された前方後円墳の概要を紹介して本古墳の理解の一助をしたい。



Fig. 1 吉武古墳群位置図(1/50,000)
1. 吉武S古墳群 2. 羽郷戸南古墳群 3. 宮ノ前C古墳(円墳) 4. 羽郷古墳 5. キントキ1号墳
6. 羽郷古墳 7. 吉ノ黒崎墳(前方後方墳)

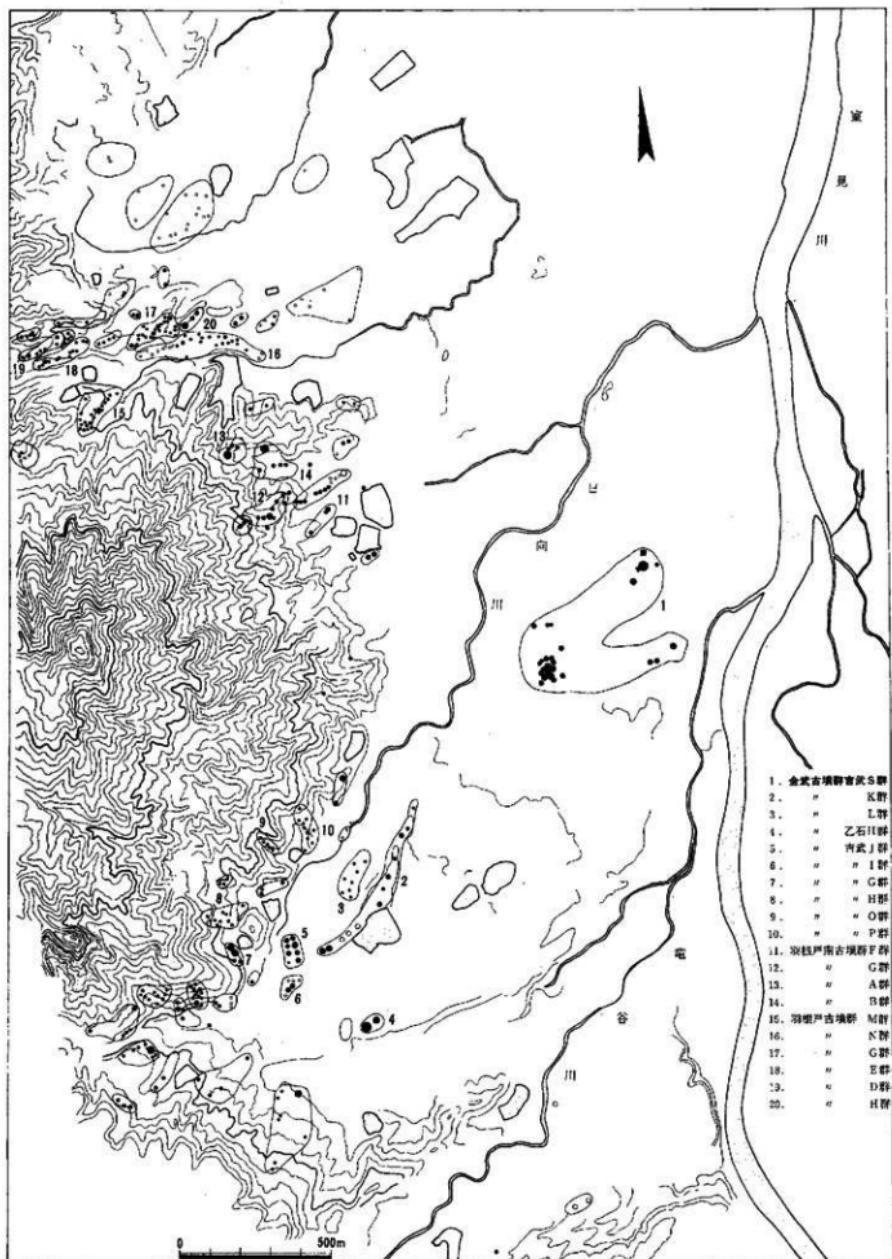


Fig. 2 飯盛山々麓周辺古墳群分布図

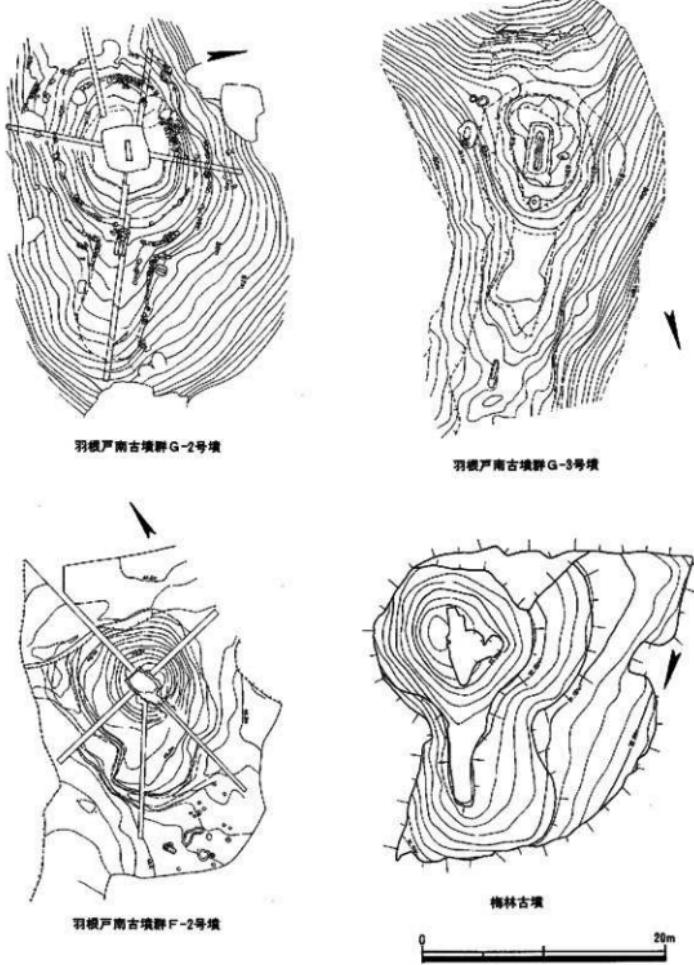
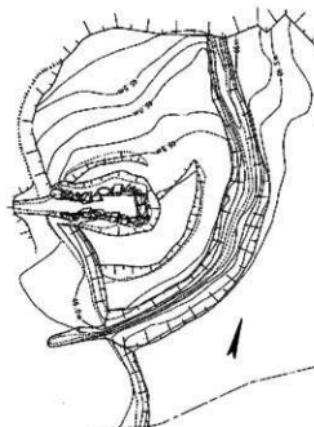
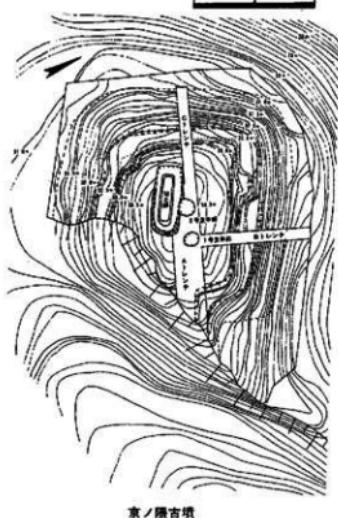
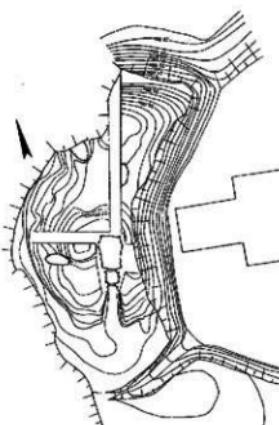
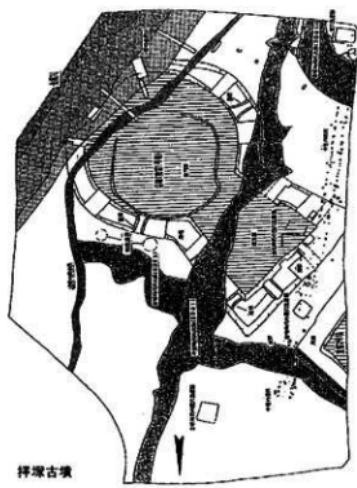


Fig. 3 早良平野の前方後円墳集成①(1/400)

羽根戸南古墳群 G 2号墳 古武 S 群の西側の飯盛山山麓の痩せ尾根上に位置し、全長26mで後円部・前方部ともに3段築成である。墳丘は、全面に葺石をともなったと考えられる。第1主体部は、箱式石棺を使用し、位至三公鏡、鉄製刀子などの副葬品が出土した。(Fig. 3)

文献 「羽根戸南古墳群」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第661集 福岡市教育委員会 2001年



0 20m

Fig. 4 早良平野の前方後円墳集成②(1/400, 1/800)

羽根戸南古墳群G3号墳 G3号墳は、G2号墳の北側に隣接して営まれている。全長19.6mで後円部・前方部ともに2段築成である。墳丘は、全面に葺石をともなうと考えられる。第1主体部は、割竹形木棺を使用し、破鏡の内行花文鏡、曲げられた鉄剣、鉄矛などの副葬品が出土した。(Fig. 3)

文献『羽根戸南古墳群』福岡市埋蔵文化財調査報告書第661集 福岡市教育委員会 2001年

羽根戸南古墳群F2号墳 F2号墳は、飯盛山丘陵裾部に営まれている。全長16.3mで、『帆立貝形』前方後円墳である。主体部は、単室両袖型の横穴式石室を使用している。鉄刀子や耳環・玉類等の装身具などが出土した。(Fig. 3)

文献『羽根戸南古墳群』福岡市埋蔵文化財調査報告書第661集 福岡市教育委員会 2001年

梅林古墳 早良平野の東側丘陵部に営まれている。墳丘は全長27mで、後円部径17m・前方部長13~14m・くびれ部幅7~8mを測る。また、後円部高2.3m、前方部高1.2mの規模である。前方部・後円部ともに2段築成である。

主体部は、玄室奥壁がやや開く単室両袖型の横穴式石室である。

石室副葬品及び墳丘からの出土品は、土器で須恵器15(蓋杯・有蓋高杯・無蓋高杯・甕・器台等・TK23・TK10)、土師器2(台付き碗)がある。

また、武器・工具では、鉄鎌3(長頭鎌)、鉄鑿1、鉄斧1、鉄刀子2、不明鉄製品などが見られる。

さらに馬具があり、鞍具5、紙留金具4以上、鞍金具2(覆輪前輪・覆輪後輪)、その他3である。

また、装身具では、碧玉製管玉1、瑪瑙製小玉3などが出土した。これらの出土品から造営~使用時期は5C前半から6C中葉と考えられる。(Fig. 3)

文献『梅林古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書第240集

福岡市教育委員会 1991年

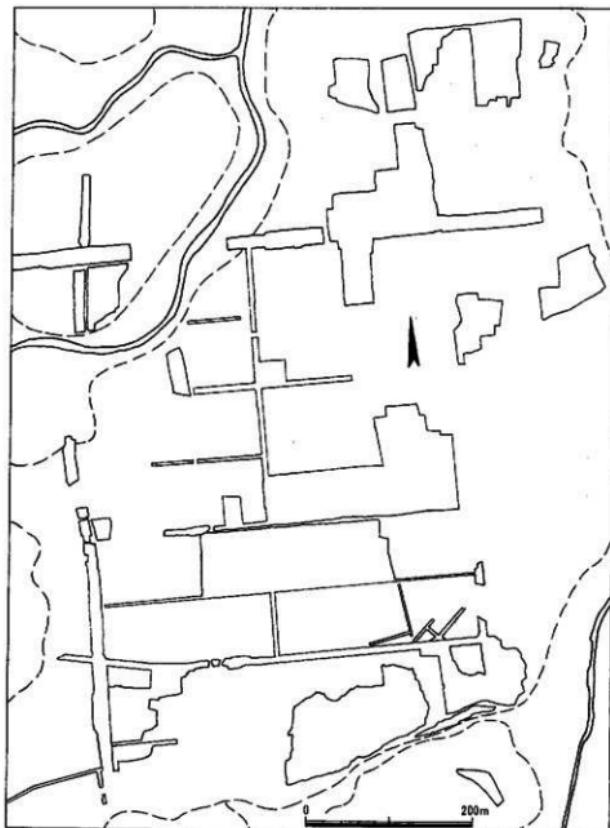


Fig. 5 吉武遺跡群調査区図

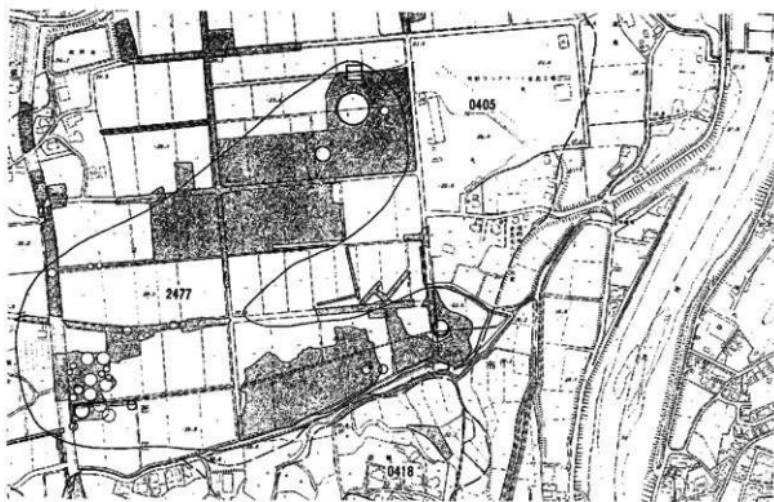


Fig. 6 金武古墳群吉武 S 群分布図

押塚古墳 室見川右岸の低丘陵上に立地する早良平野最大の前方後円墳である。全長75mで、後円部径45m、前方部幅31mを測り、墳丘は昭和24年の土取りで削平されている。周溝は鍵穴形を呈し、内部に陸橋が左右対称6ヶ所につく構造で、中からは祭祀土器を伴う遺構が3ヶ所出土しており、これらから追葬があったと認められる。主体部は初期横穴式石室と考えられている。共伴する遺物は上器類・鉄斧柄などの木器の他に円筒・形象埴輪がまとめて出土している。(Fig. 4)

文献『福岡市埋蔵文化財年報 Vol. 3 -1988年度』福岡市教育委員会 1990年

神松寺御陵古墳 横井川左岸の丘陵上に位置する。墳丘は破壊が著しいが、全長20mで、後円部径15m・同高さ2.25m、前方部長7m・同高さ2.25mを測る。主体部は、複室型の横穴式石室である。前室から馬具・須恵器、後室で勾玉・ガラス小玉などの装身具や鉄製刀子・金銅製飾金具などの副葬品が出土した。これらから6C中葉の築造と考えられている。(Fig. 4)

文献『神松寺遺跡-奈牛時代性土跡と前方後円墳の調査-』福岡市埋蔵文化財調査報告書第45集 福岡市教育委員会 1978年

京ノ隈古墳 横井川左岸の丘陵上に位置する。現存長23m、高さ2.3mをはかる前方後方墳である。復元全長40m前後、前方部幅19m、くびれ部幅10.5m、後方部高2.3mと考えられている。主体部は、割竹形木棺・石棺で、木棺には鉄製鋒先、直刀、鏡などの副葬があった。(Fig. 4)

文献『京ノ隈遺跡-福岡市西区田島所在の古墳と経塚の調査-』段谷地所開発株式会社 1978年

柏原 A 2号墳 全長30~40m、後円部径20~23m規模の前方後円墳か。主体部は単室型の横穴式石室である。副葬品では銀環等の装身具、直刀・飾り弓等の武器、くつわ・鏡等の馬具、U字形鋒先等の農具、須恵器・土器等の土器があり、これらから6C後半の所産と考えられている。

文献『柏原遺跡群 II-柏原古墳群の調査-』福岡市埋蔵文化財調査報告書第125集 福岡市教育委員会 1986年

以上、現在確認されている早良平野と周辺の前方後円墳。前方後方墳の概要について簡単に触れたが、今後この地域では前方後円古墳の発見数がさらに増加するものと考えられる。

第三章 発掘調査の記録

概要 金武地区圃場整備事業に伴う第3次調査は、1983年（昭和58）9月から1984年（昭和59）3月にかけ切土工事を伴う圃場部分、道路、水路を含め約25,000m²の発掘調査を実施した。

調査区は、南東から北東方向に傾斜する扇状地の東西方向を占める位置にあり、吉武S1号墳（帆立貝式前方後円墳－極渡古墳）・同2号墳（方墳）・同22・23号墳（円墳）の古墳4基とこの南側及び西側周辺で古墳時代中期の竪穴住居跡、掘立柱建物群及び旧河川（自然流路）等を調査した。

古墳群は、S1号墳を除いて、何れの古墳も水田化の際に墳丘や埋葬主体部を削平されており、周

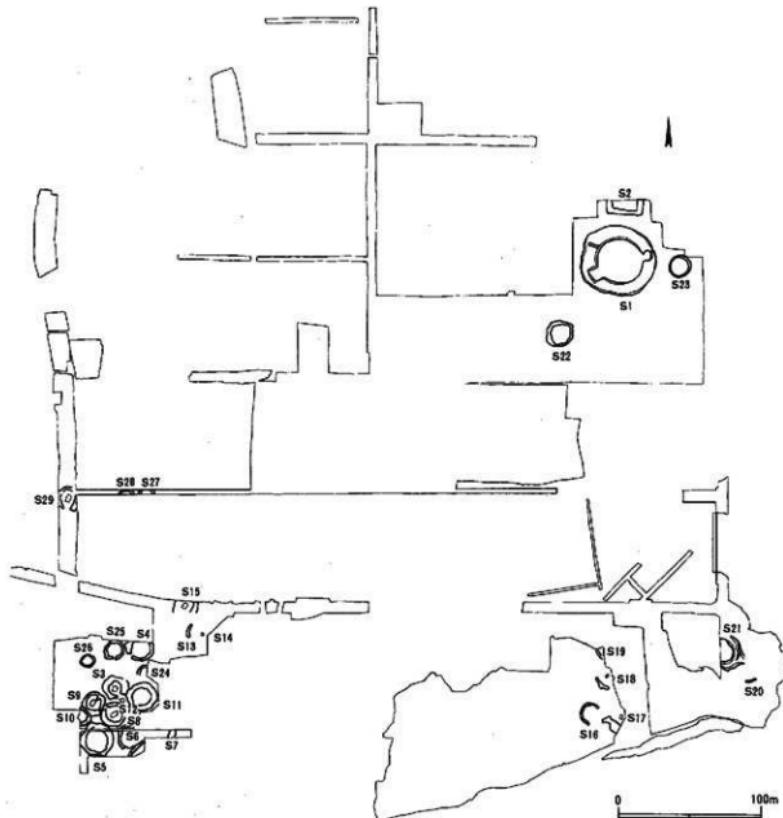


Fig. 7 金武古墳群吉武S群調査図

溝や葺石などの施設の一部のみを知ることができる。

また、S1号墳の墳丘下では弥生時代中期中葉に築造された「墳丘墓」が見つかり、S1号墳が既存のこの墳丘墓を利用して造営されたことが判明した。さらに、古墳南・西側周辺の生活遺構（竪穴住居跡・掘立柱建物・廃棄土壙）や旧河川では古墳時代中期を主とする初期須恵器や木製農具・漁具・建築材・馬具・祭祀具などが豊富に出土した。

以上、第3次調査について記したが、以下ではS1号墳（撻波古墳）、S2号墳（方墳）の調査報告を中心に行う。なお、両古墳出土の円筒埴輪の整理中に、調査区の西北側の第2号文線道路調査区で見つかったSH04土壙から円筒埴輪破片が出土していることが判り、伴川土師器もS1号墳周溝出土のものと共通する形態を有することから第四章にこれを収録した。

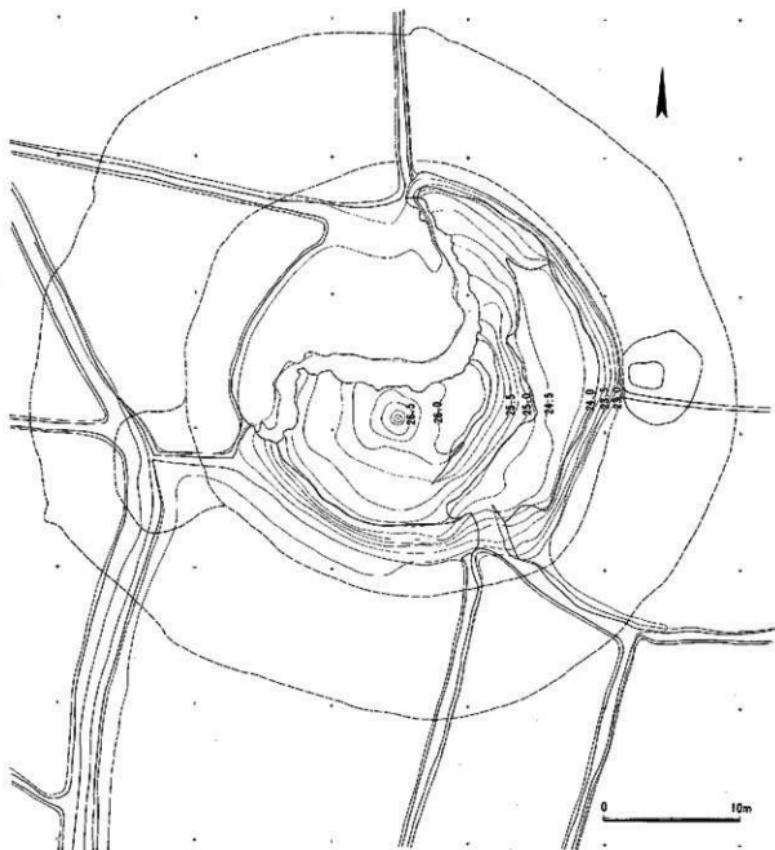


Fig. 8 吉武S群1号墳々丘測量図(調査前)(1/350)

第一節 吉武 S 群 1 号墳（樋渡古墳）の調査

1. 調査前の遺存状況 (Fig. 8, Pl. I)

S 1 号墳は、西区大字吉武字大石地内に所在する。これまで「樋渡古墳」と呼んでいた小字名の樋渡は北側の東西の里道を挟んだ大字敵盛分にはいる区域にかつてあった「樋渡池」に由来するようである。

今回、発掘調査に際しては、伐開作業を行った後に現況測量図の作成を行った。これによって古墳は後円部の墳丘のみが残っており、南北長 28m、東西長 29m、高さ約 3m 以上でほぼ円形をなしていることが判った。

また、後円部墳丘上には 100 基を越す近世墓が残されていた。墓地は既に改葬が行われていたが、同数の墓石基底部の石材がほぼ原位置をとどめて存在しており、さらに 2 × 2 間以上の建物（祠か）の礎石と考えられる石材が配置されていた。

この近世墓地は、その墓石の記年銘から 1700 年代はじめ頃に形成が始まったものと考えられるが、墳墓築成に伴う墳丘部に対する平坦面の造作や参道の取り付けなどによって後円部墳丘の東・南側は改変が著しく、墳丘裾部は周辺の水田からの削り込みが著しい。

また、後円部墳丘の北側は昭和 30 年代の土取り工事によって大きく削り取られ、全体のほぼ三分の一が失われていた。

2. 墳丘の形状と規模 (Fig. 9・10, Pl. 1 ~ 12)

S 1 号墳の墳丘は、前述のように後世の度重なる工作によって著しく原形を失っているが、東側の一部を除いた一段目の葺石の遺存からほぼその形状を知ることが出来る。

本墳の形状は、後円部が南北方向にややひしめた円形をなし、くびれ部が顕著でない短い前方部をもつ帆立貝式の前方後円墳である。その墳丘規模は、周溝を含めた総長が 51.5m、後円部径 31.5 ~ 31m、後円部残存高 3m、前方部長 7m・同幅 9.5m、くびれ部幅 8.5m を測る。

墳丘は、前述のように弥生時代中期中葉に築造された弥生墳丘墓のマウンドをそっくり利用し、この上部に版築による墳丘造営を行ったと考えられる。

ここで墳丘の長軸線の土層断面図 (Fig. 10) を見ると、墳丘両側にみえる黒く塗った薄層が墳丘墓当時の表土層（黒色バンド）である。これは墳丘に埋葬された甕棺墓の墓壙掘り方の位置からも確認することができる。そして、古墳の墳丘築造は、この黒色バンド層上に粗砂・小砾・黒色粘質土ブロックを含んだ暗褐色砂質土をのせ、この後に黄褐色粘土と黒色粘質土を交互に、1 ~ 1.5m ほど丁寧に版築状に積み上げているが、さらにこの上部では黄褐色粘質土と砂質土を比較的緩く、交互に約 20cm ずつの厚さに積み上げている。墳頂部は残存しないが、緩い積み上げが想定できよう。そして葺石の遺存状況から本墳の墳丘は後円部が二段築成、前方部は一段築成であると考えられる。(Pl. 15 ~ 17)

なお、墳丘南側斜面の黒色バンド上からは赤色顔料の詰まった上飾器甕が見つかっており、墳丘築造時の祭祀行為と考えられる。

また、古墳にともなう周溝は全体をめぐる不整な円形を呈する。後円部東側の周溝内には掘り残されて通路状となっている部分があり、周溝外側で幅 0.6m、内側で 6 × 5m の不整円形を呈する。因みにこの不整円形部分には弥生時代中期の成人甕棺墓が複数遺存しており、あるいは周溝掘削時に意識的に掘り残されたかも知れない。また、後円部北西側周溝内には古墳主軸に対して約 50 度の角度で付

設された幅2m、長さ8m以上の陸橋状施設が認められる。

また、後円部の東半部の一段目斜面には円筒埴輪列を確認することができるが、原位置を離れた円筒埴輪破片や形象埴輪破片は後円部から前方部に至る周溝内でも見つかっていることから後円部全周に埴輪列を配置した可能性もある。

3. 埋葬施設

本墳の埋葬施設は想定される墳頂部付近が近世墓地の造営によって著しく削平を受けたため、その痕跡すら見いだすことができなかった。また、埋葬に伴う副葬品も全く出土しなかった。

ところで、この近世墓地の墳墓は墓石石材として主に大小の花崗岩転疊を多く使用しているのであるが、墳墓の貼り石として使用している石材や想定される墳頂部付近に散乱する石材の中には玄武岩を割石にしたもののが相当量ある。また、これらの玄武岩割石の中には小口の表面に赤色顔料の残るものがあり、のことからすると石材は石室の構築材の一部であった可能性が高いと考えられることから、本墳の埋葬施設が割石小口積みの初期横穴式石室であった可能性が高いと想定されよう。

また、墳丘北西側の周溝内で見つかった陸橋状の遺構は、墳丘主軸に対して北西から50度の角度で付設されており、この角度の延長上に石室の主軸が構築されていた可能性もある。

4. 外部施設 (Fig.11・13、Pl. 5～14)

① 蓋石 (Fig. 9、Pl. 6～10)

蓋石は、前記のように近世墳墓の造営によって削平や崩落している部分が多く、後円部墳丘二段目では全周の約五分の一ほどにあたる南側斜面の一部に幅2mほどを残されている。また、墳丘裾部では南東側の部分を除いて、幅1～0.7mほどではほぼ全周をめぐっている。

蓋石に使用された石材は、殆どが花崗岩の転疊であり、根石には人頭大のものを、また斜面には拳大のものを用いて丁寧に積んでいる。

② 墓輪列 (Fig. 11、Pl. 11・12)

埴輪列は、原位置をとどめるものが後円部のほぼ東側半分を囲繞する形で見つかった。位置は墳丘裾部の蓋石天端から約2m墳丘側の斜面で、約1mの間隔をもって埋設されており、計32個が確認された。埴輪は全高の半分以下ののみを残すものが殆どであるが、明らかな円筒埴輪の他に朝顔形埴輪も混じた配列となっている。

また、墳丘外側の後円部から前方部にわたる周溝内からもまとまって同類の円筒埴輪や朝顔形埴輪それに少量ではあるが形象埴輪破片が出土しているが、全体の埋設状況については明らかにし得ないところである。

③ 周溝 (Fig. 9・12、Pl.13)

本古墳の周溝は、墳丘の周囲をほぼ円形に囲繞する形状となる。後円部東側で幅8.5m、南側で幅約9m、北側で幅10.5mと一定しない幅員となり、西側の前方部の位置では幅5mとなるなど整った円形をなさず、いびつな形状をなしている。周溝の深さは、約30～50cm程度が残存し、後円部周辺の底面では南側に浅く、東・北側でやや深い傾向となる。また、周溝断面は、外側で緩く立ち上がり、墳丘側では比較的急激に壁が立ち上がる特徴となっている。また、外周の壁面には弥生時代中期の甕棺墓が断ち切られて残っており、甕棺墓地を掘削したことが判る。

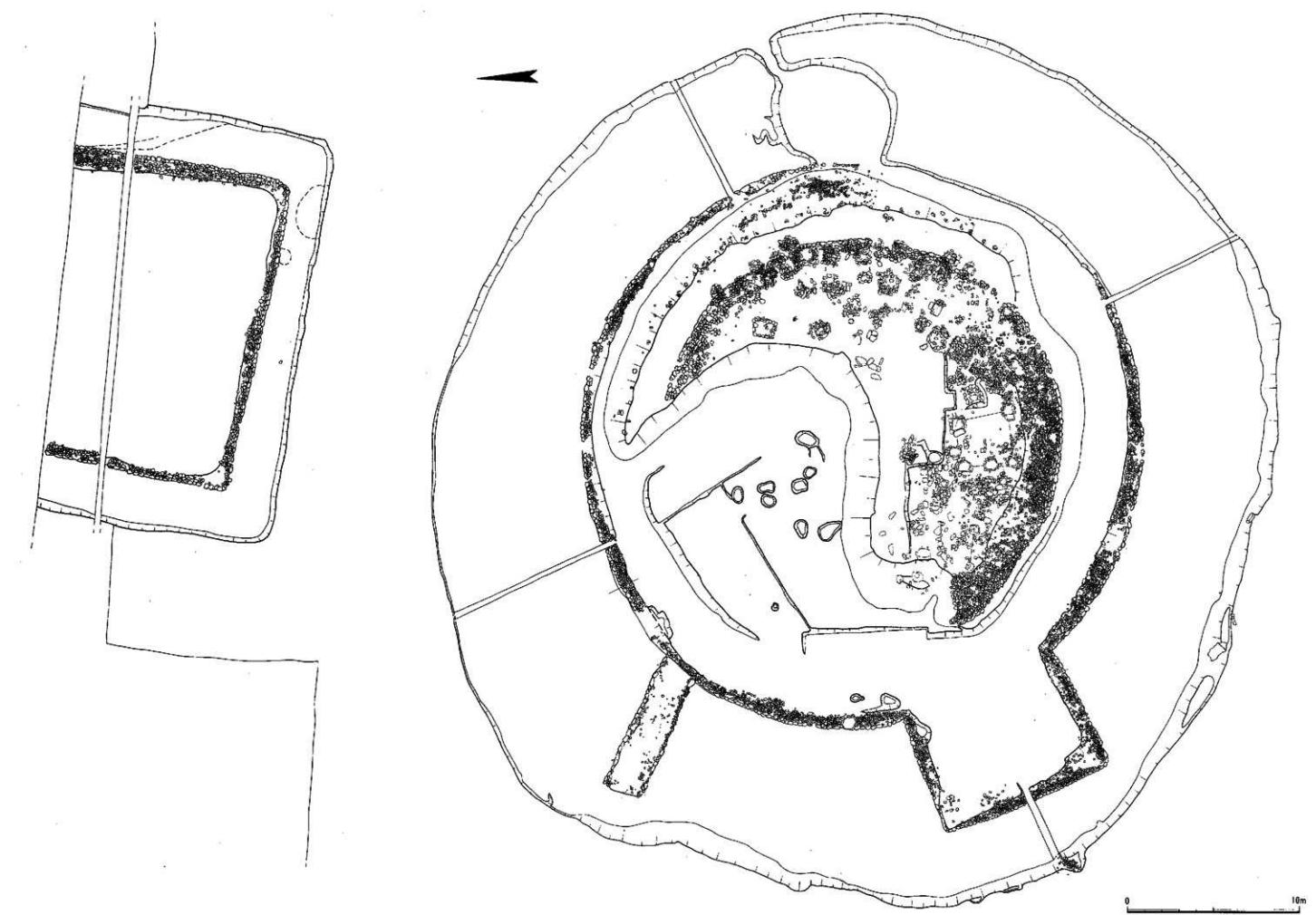


Fig. 9 吉武 S群 1・2号墳々丘測量図(検出時) (1/200)

土層断面 (Fig.12)

周溝内の土層は、どの地点でもほぼ水平に堆積した3～4層に区別することができる。そして周溝掘り方の墳丘側では底面附近に葺石の転落したと思われる拳大の円礫が多く堆積している。各地点での堆積状況を上層から見ると、東側セクションでは、1層(20～25cm)－暗灰褐色砂質土、2層(10～15cm)－灰黒褐色砂質土、3層(10～15cm)－暗灰～黒灰色粘質土、4層(10cm)－周溝外側底面に堆積した暗茶灰色粘質土、5層(15cm)－周溝墳丘側底面に堆積した程度の灰褐色砂質土(基盤土の淡灰褐色砂質土と黒色土が混在している)であり、基盤土は淡灰褐色砂質土～灰色シルトとなっている。

次に、南側セクションでは、1層(5～30cm)－暗黒褐色砂質土、2層(5～8cm)－黑色粘質土、3層(15cm)－周溝外側底面に堆積した暗黒褐色砂質土(やや風味が強い)、4層(10～20cm)－暗灰色粘質土であり、基盤土は黄褐色砂質土となっている。

さらに、北側セクションでは、周溝の外周の掘削が浅く、緩く立ち上がっているが、1層(4～3cm)－暗灰褐色砂質土、2層(20～25cm)－暗茶灰色粘質土(粘性は弱い)、3層(15～23cm)－暗茶灰色粘質土であり、基盤土は灰色シルトで北側は褐色砂層となっている。

周溝内では最下層の3～5層に埴輪片や土師器が出土し、この他にも1～2層が埋積する過程で、大量の甕棺破片を含む弥生時代中期土器破片とともに混入した6世紀後半代の須恵器や土師器破片が出土している。

④ 陸橋状遺構 (Fig.13、Pl.13・14)

後円部の南西側周溝内にあって、墳丘長軸線に対して約50度の方向に付設されている陸橋状遺構である。延長は8.2mで、周溝外周側までは続いていない。また幅は2mで、周溝底面から内部の平坦までは約15cmを測る規模である。

その構造は、墳丘側では葺石裾に接続しており、人頭大に近い花崗岩円礫を据えている。東側側辺では最大50×30cmほどの扁平礫をつないで一段に積んで外郭を築いており、西側側辺はや小振りではあるが花崗岩礫を複数並べるようにつないで外形を築いている。また、これに囲まれた内部には小礫が全体に敷いたように出土しているが、この他には平坦を整える工作は見られない。

この陸橋状遺構は、低い位置にはあるが、墳丘側と連絡できる位置にあることから葬送儀礼や墓前祭祀のための通路として使用されていた可能性があり、この延長上が失われた埋葬主体の主軸線であった可能性も想定できるのではないか。

5. 出土遺物 (Fig.14～33、Pl.21～25・27・28)

① 土器類 (Fig. 14・15、Pl. 27)

須恵器 (Fig.14) 須恵器は、副葬品としての原位置を保ったものではなく、全て周溝内埋土や墳丘部表土からの出土品である。以下個別に観察を加える。

杯 蓋

03074は、南側周溝内で出土した。全体に器壁が薄作りの蓋で、天井部を欠失する。天井部には2/3程度のヘラ削りをほどこす。ロクロ回転は時計回りである。天井部内面には細いアテ貝痕が残る。器色は内外面ともに淡い灰色を呈し、外面全体に灰かぶりが見られる。器壁はセピア色を呈する。復元口径は12.8cm、残存器高3cmを測る。胎土は密で、焼成も堅密である。

03096は、後円部の墳丘裾部表土で出土した杯蓋である。口縁部の端部を欠失しているが、天井部に

は時計回りのヘラ削りを施し、やや丸みを帯び、器高が低い特徴をもつ。また、体部と口縁部との境は上端がやや丸みをもった棘状突起をなし、下部は強いヨコナデで窪む。

また、内面も丁寧なヨコナデを施す。器色は、外面がやや暗い灰色で、内面は淡灰色を呈する。法量は、突起部径11.6cm、残存器高2.9cmを測る。胎土は密で、焼成も堅緻である。

03086は、後円部の北東側縫部の表土から出土した蓋である。口縁部分と天井部のつまみは剥落によって欠失している。また、天井部と体部の境は低い丸みをもった突起が1条めぐっている。

破片は二次的に火に遭ったと考えられ、器色は外面が暗赤褐色～灰黒色で、内面は赤みを帯びた灰色を呈する。また、器壁は暗赤色である。

器面調整は、外面がヨコナデを施した後に施文を行い、内面は左右方向の細かいナデ調整を施す。また、外面天井部では、つまみと突起との間に6本単位の櫛齒状工具で刺突した鋸歯文を施し、突起以下の体部には4本単位の櫛齒状工具を用いて同心の連続半円文が見られる。

03075は、後円部南側の周溝内で出土した蓋である。器高の低い器形で、細い口縁部はやや内側に反転している。また、天井部端は欠失している。器面の調整では、天井部のわずかに時計回りのヘラ削りが見られ、天井部内面は比較的あらいアテ具の輪状痕が残る。

器色は、外面が天井～体部のほぼ全面に灰をかぶっており、褐色味を帯びた灰色を呈し、内面は淡灰色を呈する。法量は、口径12.2cm、器高8.7cm、受部径14.2cmを測る。胎土は密で、天井部に多くの石英粗砂粒が露出している。また、焼成は堅緻である。

杯身

03095は、後円部南側の墳丘縫部の表土で出土した杯身である。小型の杯で、口縁部の立上がりは高く、ほぼ垂直に延びており、受部も小振りである。器面調整は、体部外面のほぼ全面に時計回りのヘラ削りを施し、内面は丁寧なヨコナデである。器色は、内外面ともに淡灰色を呈する。

法量では、口縁部径は不詳、器高3.9cmを測る。胎土は非常に密で、焼成は堅緻である。

03067は、後円部周溝内で出土した杯身である。底部の一部を欠失する。器形は、やや内傾する長い口縁部と蓋受け部の漬が不明瞭な特徴があり、体部～底部までも全体に丸みをもつ特徴がある。

口縁端部は、内面に浅い沈線をめぐらす。

器面調整は、内面が丁寧なヨコナデで、外面は体部の約半分の範囲を時計回りでヘラ削り、これより上部は丁寧なヨコナデとなっている。また、内底部にはアテ具痕と考えられる輪状痕が観察できる。器色は、内外面ともに淡灰色を呈し、内面には茶色の鉄分が付着している。法量は、口径13cm、器高4.9cmを測る。胎土は、密で、焼成は軟質である。

03076は、後円部東側周溝内で出土した杯身である。底部の一部を欠失する。口縁部は短く、やや内傾し、口径は小さい。また、内面部端部には緩く沈線状に窪んでいる。

器面調整は、外面が体部のほぼ下半部の範囲を逆時計回りでヘラ削り、内面は全体に丁寧なヨコナデを施す。内底部には一部に輪状アテ具痕が観察できる。また器色は、内外面ともに淡灰色を呈する。法量は、口径10.6cm、器高4.25cm以上を測る。胎土は密で、焼成も堅緻である。

03071は、後円部南側周溝内で出土した杯身である。口径に比較して器高が低く、底部が平坦であるために全体に浅い印象をうける。また、体部に比較して受部や口縁部は器壁が薄く、特に口縁部は短く、内傾化が著しい。

器面調整は、外面で体部の下半部に時計回りの幅広いヘラ削りを施し、受部～口縁部はヨコナデ、内面では丁寧なヨコナデを施し、内底にナデが残る。器色は内外面ともに淡灰色を呈する。

法量は、口径13cm、受部径16cm、器高4.3cmを測る。胎土は密で、石英粗砂を多く混入する。焼成は

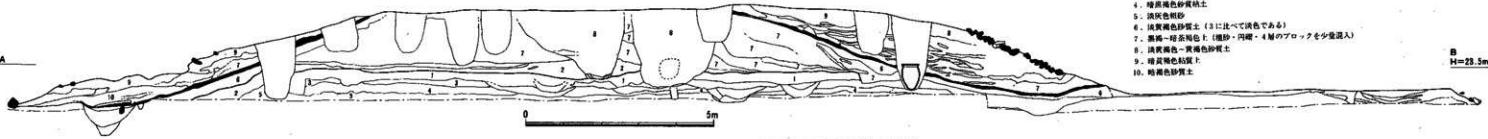
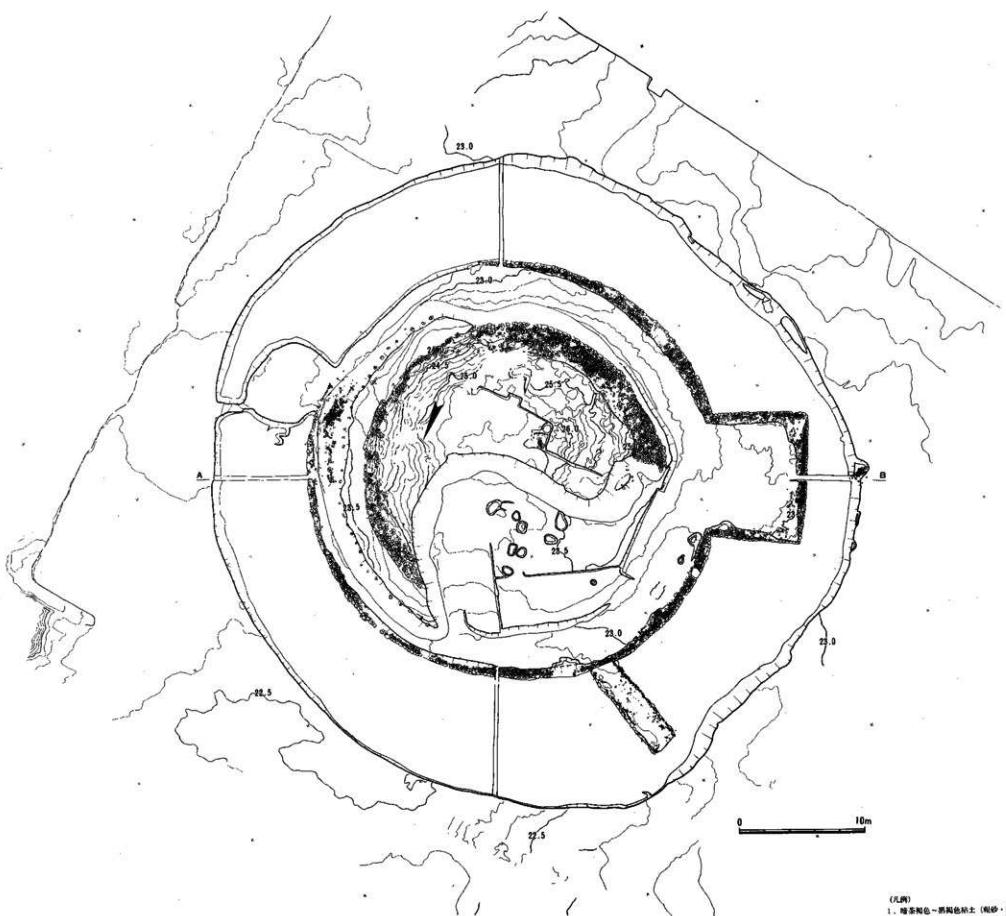


Fig.10 吉武S群1号墳々丘及び塚丘土層断面測量図(1/300, 1/100)

堅緻である。

高杯

03081は、後円部西側周溝内で出土した小型高杯の脚である。短い脚部は裾でよくふんぱり、端部は肥厚して断面が玉縁状をなす。また脚内面はしづり状となる。

また、器面調整は、内外面ともに丁寧なヨコナデを施す。器色は、内外面ともに淡灰色を呈する。法量は、脚部径8.4cm、残存器高3.8cmを測る。胎土は密で、焼成も堅緻である。

03094は、後円部東側の墳丘表土で出土した小型高杯の脚である。低い脚部は裾が良く開き、端部は斜めに鋭く尖る。脚内面の上部は、しづりとなる。

また、器面調整は、内外面ともに丁寧なヨコナデを施しているが、外面の脚付け根付近はカキ目状となっている。器色は、外面の大部分に灰をかぶっており、内面ともに黒灰色を呈する。法量は、脚部径が9.5cm、残存器高4.4cmを測る。胎土は密で、焼成も堅緻である。

03069は、後円部周溝内で出土した小型高杯の脚である。裾部に近い脚の破片である。端部より2cmほど上がった位置に低い丸みをおびた一条の突帯をめぐらせる。良く開いた脚は薄作りで、端部がJ字に調整されている。

また、器面調整は、内外面ともに丁寧なヨコナデを施している。器色は、外面が黒灰色で、内面が暗赤紫色を呈する。法量は、脚端部径10.8cm、残存器高2.7cmを測る。胎土は密で、焼成も堅緻である。

03079は、後円部西側の周溝内から出土した高杯々部である。器壁が薄く、水平に伸びた受部とつまみ上げて低く内傾した口縁立ち上がりを有する特徴をもっている。

器面調整は、体部の外面の一部にカキ目状の平行線がみられ、タタキ痕の可能性があるが、他はヨコナデか。また、内面は体部下半はへら削りで、以上は丁寧なヨコナデを施している。器色は体部が黒灰色、口縁部は淡灰色である。また、内面は淡灰色を呈する。法量は、口径11.6cm、受部径14.8cm、残存器高5cmを測る。胎土は密で、焼成はやや軟質である。

03077は、後円部西側の周溝で出土した高杯脚部である。短脚で長方形透かし孔をもつ脚である。透かし孔は6個と考えられる。良く裾部の開いた脚は、作りが丁寧で端部は嘴状に折れる。

器面調整は、内面がヨコナデとみられ、外面は灰かぶりのため不詳である。また、器色は外面脚端部が灰色の他は内外面ともに淡灰色である。法量は、脚端部径12cm、残存器高6.2cmを測る。胎土は密で、焼成も堅緻である。

甕

03068は、後円部の周溝内で出土した中型甕の口縁部破片である。口縁端部の下に断面が「コ」字形に近い突帯をめぐらす。また、この突帯下には起伏の小さい、緩い振幅のへら描き波状文を施している。器面調整は、内外面ともにヨコナデである。器色は、口縁部外面と内面が明灰色で、他の外面は黒色～黒灰色を呈する。胎土は非常に密で、焼成も堅緻である。

03084は、後円部西側の周溝内で出土した中型甕である。短く、外反する口縁部をもち、端部よりやや下がった位置に鈍い段状の突堤一条をめぐらす。

器面調整は、内外面ともにヨコナデで、外面の口縁端部下は一部がカキ目状となる。口縁部の内面上半と外面の下部には灰かぶりが見られる。器色は、内外面ともに灰黒色を呈する。法量は、口径23.2cm、残存器高7.7cmを測る。胎土はやや粗で、焼成は堅緻である。

鉢

03072は、後円部南側の周溝内で出土した鉢口縁部破片である。形態からは把手が付く可能性もある。緩く「く」字形に屈曲する口縁部の下に鈍い二条の三角突堤をめぐらす。突堤下には痕跡的に残る波

状文が見られる。器面は内外ともにやや緑色を帯びた暗褐色の自然釉がかかる。

また、器面調整は丁寧なヨコナデである。

越

03080は、後円部西側の周溝内で出土した甌の口縁部破片である。非常に薄い作りで、頭部端は良くしまる形態であろう。口縁部および頭部に横方向の非常に振幅の小さい波状文を施す。

器面調整は、内面に丁寧なヨコナデが認められる。器色は、内外面ともに淡灰色を呈する。口径は8.8cm、残存器高3cmを測る。胎土は密で、焼成も堅緻である。

土師器 (Fig.15, Pl.27) 七師器は、周溝内出土のものが多く、大量の弥生中期壺棺破片に混じるように小破片が出土している。前記のように本古墳は埋葬主体が失われているために造営時期を確定できる積極的資料に乏しいところであるが、出土土師器のなかで原位置をとどめる唯一と言っている資料は小型壺(03087)である。築造前の祭祀を行った後に埋納された資料で、他に図示した小型丸底壺、椀、高杯、甌などの周溝内出土遺物もこの小型甌と関連する時期の遺物と考えられる。

小型丸底壺

03092は、後円部の周溝内で出土した小型壺である。底部を欠失するが、全体の約1/3を残す。球状の胴部に短い、外方に開く口縁部がつく。器壁はサイズに比較して厚手である。

器面調整は、外面頭部で丁寧なヨコナデ、胴部中位に荒い横ハケメを施しており、これ以下は横方向へのヘラ削りである。また、内面は口縁端部から胴部までは丁寧なヨコナデで、頭部に指オサエが見られる。器色は、内外面ともに暗赤褐色を呈し、口縁端部外面に小型の黒斑が認められる。法量は、口径9cm、残存器高5cmを測る。胎土は密で、焼成も堅緻である。

03073は、後円部南側の周溝内で出土した小型壺である。底部が不安定な小型壺で、いびつな胴部から立ち上がって緩やかに外方に開く口縁部はやや肥厚する。胴部の器壁の厚さは安定せず、調整もあり良くない仕上がりである。

器面調整は、外面口縁にヨコナデで、頭部に指オサエを施し、胴部上半には荒い縦ハケメで、下半はヘラ状工具による不定方向のナデ調整を加える。また、内面は、口縁ヨコナデで、これ以下の胴部はヘラ状工具による不定方向のケズリが加えられており、器面の凹凸が著しく、平滑に整えられていない。器色は、外面口縁部が暗褐色、以下は淡褐色である。また、内面は全体に漆黒色を呈する。法量は、口径11.8cm、器高9.2cmを測る。胎土はやや粗で、焼成は軟質である。

椀

03091は、後円部の周溝内で出土した小型椀である。底部を欠失する小破片である。胴上半部から器厚を増し、口縁端部は細くそばまる。

器面調整は、外面口縁部でつよいヨコナデ、これ以下の胴部で横・斜め方向のハケメ調整を施している。また、内面は口縁端部にヨコナデを加え、胴部は斜め方向のヘラナデを施す。器色は、外面が淡赤褐色、内面淡褐色を呈する。法量は、口径12.2cm、残存器高4.6cmを測る。胎土は密で、焼成も堅緻である。

03085は、前方部の周溝内で出土した小型椀である。口縁部の一部を欠失する。丸底の底部から緩く開き口縁部にいたる。器厚は比較的に厚手である。

器面調整は、外面口縁部がヨコナデで、底部は横・斜め方向のヘラ削りを加えている。また、内面には下半部にヘラ状工具によるナデを施す。器色は、外面が赤褐色、内面淡赤褐色を呈し、口縁外面に一部小型の黒斑が認められる。法量は、口径13cm、器高6.2cmを測る。胎土はやや粗で、石英粗砂

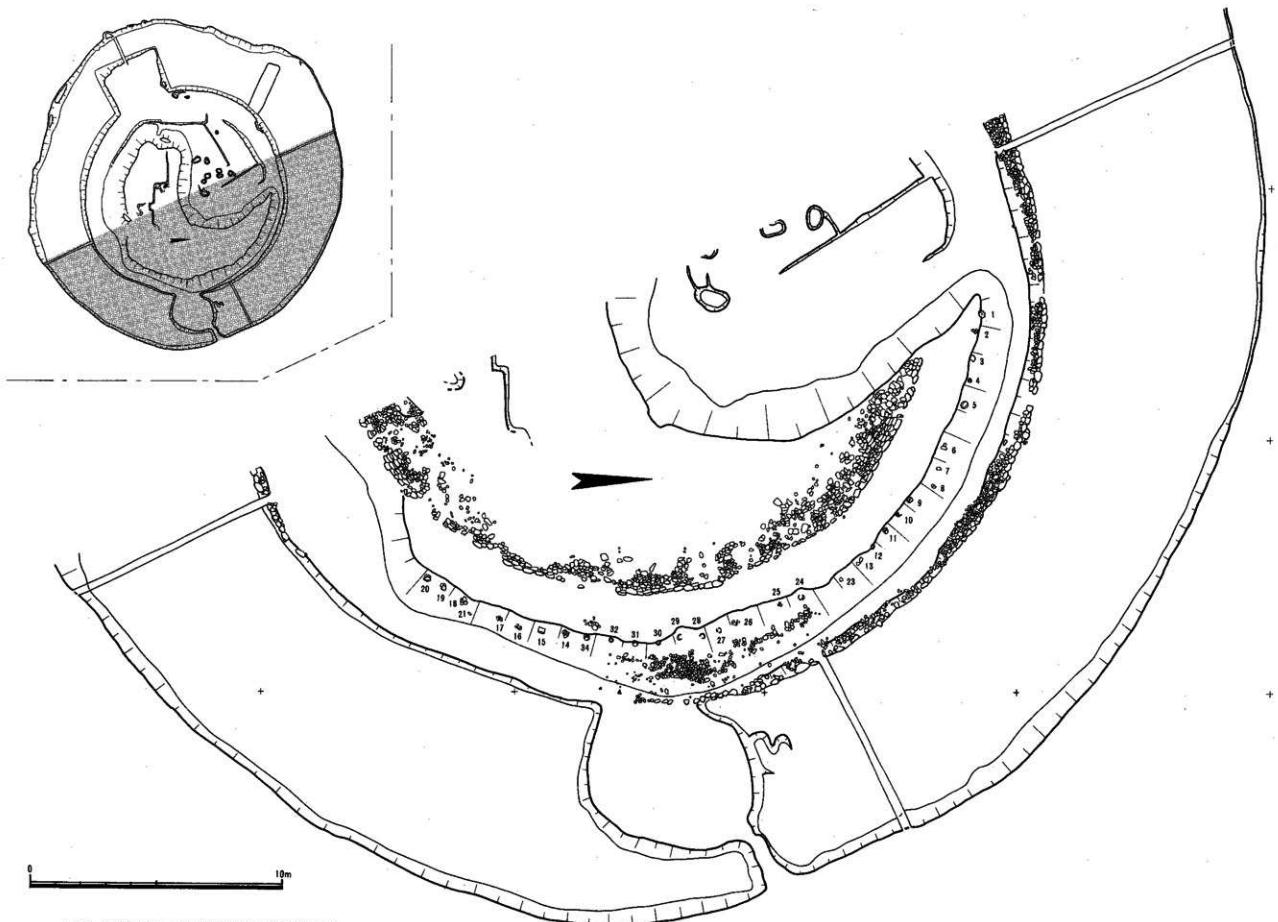


Fig.11 吉武 S 群 1 号墳円筒埴輪出土状況図(1/150)

を多く含む。焼成は堅緻である。

高 杯

03082は、前方部の西側周溝内で川土した高杯々部である。脚部以下を欠失する。器形は非常にいびつで、器厚も非常に厚手の粗雑なつくりである。口縁部はほぼ直線的に開くが、中央の屈曲部は明確な段を意識したつくりとなっている。

器面調整は、内外面ともに器面の荒れが著しく、外面口縁下に一部細い斜めハケが残るのみである。器色は外面口縁の一部が赤橙色のほかは淡黄褐色で、内面暗赤褐色を呈する。法量は、口径16.4cm、残存器高6.2cmを測る。胎土はやや粗で、石英粗砂を多く混入する。焼成は軟質である。

03083は、前方部の西側周溝内で出土した高杯々部である。脚の一部が残る。杯中位に緩い段を有し、口縁端部は小さく外反する。

器面調整は、内外面ともに器面の荒れが著しいが、外面上半部にヨコナデ、下半部にナデが見られる。また、内面は口縁部付近にヘラナデが見られ、これ以下も同様の調整であった可能性が高い。

器色は、外面が淡赤橙色、内面淡黄褐色を呈する。法量は、杯口縁部径16.5cm、残存器高6.9cm、脚付け根径3cmを測る。胎土は非常に密で、石英粗砂を少量混入しており、磨滅した内面の器表に露出している。また、焼成は堅緻である。

甕

03087は、後円部の南側墳丘で出土した小型甕である。この甕は、墳丘造営時には既に存在した弥生時代墳丘墓の表上である黒色バンド層中から出土したことから、造営時に行った祭祀行為に使用された土器と考えられ、本墳の造営時期を知るうえで非常に重要な遺物であると考えられる。

甕は破碎されており、胴部の殆どを欠失する。約1/3程度が残る。器形は、よくしまった頭部から内湾気味に外方に開く口縁部を特徴とする形態である。器壁は良く整えられ、ほぼ均一な器厚となっている。

器面調整は、外面の口縁から頭部にかけて細かいヨコナデを施し、内面は口縁部が細かい横ハケで、

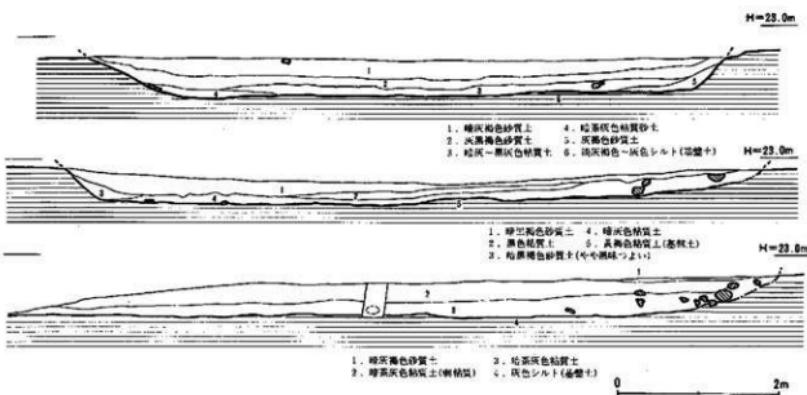


Fig.12 吉武 S 群 1号墳周溝土層断面実測図(1/60)

頸部以下は細かい横方向のヘラ削りを加える。

器色は、外面が褐～暗褐色で表面にはスス状の黒色物が付着している。また、内面は暗赤褐色を呈する。法量は、口径13.8cm、残存器高3.4cmを測る。胎土は密で、焼成も堅緻である。

03070は、後円部の周溝内で出土した中型壺である。球形の胴部に、短い口縁部をのせる。口縁部は緩く外反気味に直立する特徴をもつ。

また、器壁はよく調整されて、比較的均一な仕上がりとなっている。

器面調整は、外面口縁部がヨコナデで、胴部上半にはタテ・ヨコの短いハケメ調整が残り、これ以下は縦ハケメ調整後にヨコナデを施してハケメをなで消している。

また、内面口縁部はヨコナデで、頸部以下の胴部は横ヘラ削りで、底部付近では左上がりの比較的荒いヘラ削りを施しているが、不定方向で削りの単位を特定し難いものである。

器色は、外面が淡褐色～暗褐色で、底部付近には大黒斑がある。

また、内面は口縁～胴部中位までが暗赤褐色で、これ以下の底部まではやや赤味をおびた灰褐色となっている。

なお、胴部下半では二次的加熱によって表面が剥落している。

法量は、口径16.8cm、器高25.7cmを測る。胎土はやや粗で、石英粗砂を多量に混入している。また、焼成は堅緻である。



Fig.13 吉武S群1号墳周溝内陸橋状遺構実測図

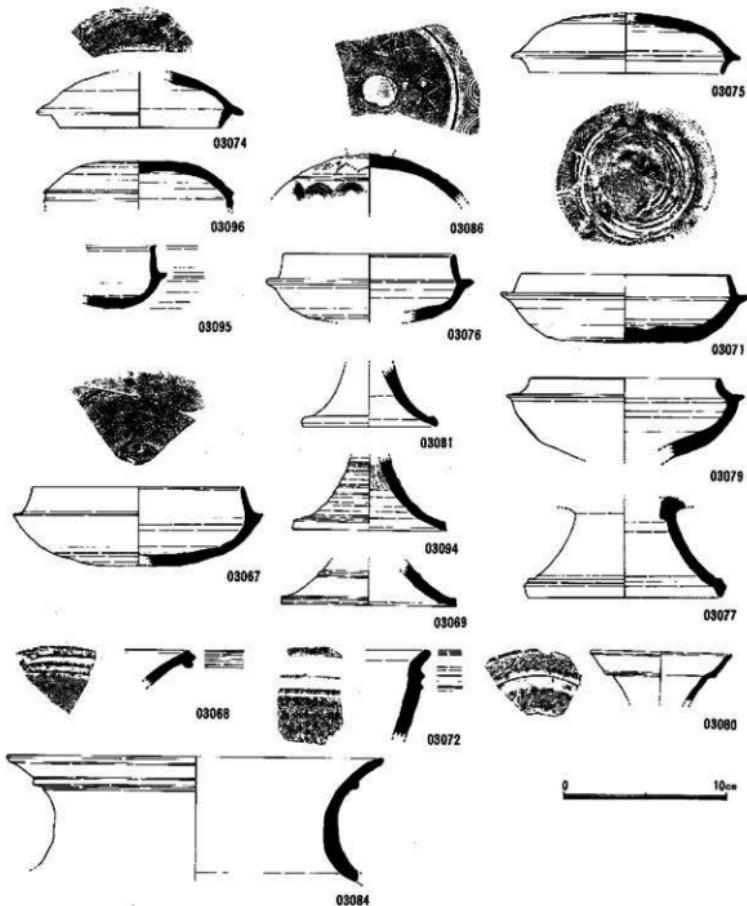


Fig.14 吉武S群1号墳々丘出土土器実測図(1/3)

瓶

03093は、後円部の崩れ内出土の瓶である。底部を欠失する。口縁が最大径で、底部にしたがって砲弾型にすぼまる特徴をもっており、全体的に薄作りの良品であり、底部に向かって器厚が薄くなる。

器面調整は、外面が縦・斜めの細かいハケメ調整後にヨコナデで磨り消している。また、内面は口縁部の一部に斜めハケが見られるが、これ以下の胸部は斜め方向のヘラ削り調整を施す。

器色は、内外面ともに淡赤褐色を呈する。法量は、口径19.8cm、残存器高13.7cmを測る。

また、胎土は非常に密で、焼成も堅緻である。

② 墳輪類 (Fig.16~33、Pl.21~25・28)

円筒埴輪 (Fig.16~33、Pl.21~25) 円筒埴輪は、後円部埴丘東半に原位置で残存していたものと前方部を含めた周溝内に転落して発見されたものがあるが、埴丘部のものは上部が転落して底部のみが原位置に遺存しているものも少なくなく、同一個体が重複して図化されている可能性も考えられる。しかし接合作業では少數のものが埴丘・周溝間でつながったものの他は接点がなく、以下では図化に耐えるもの可能な限り掲載した。なお、埴丘東半出土の埴輪の対照番号は Fig.11 を参照していただきたい。以下個別埴輪について説明を加えることとする。

03001は、埴丘の最も西側にあたる No.1 円筒埴輪である。胸部のタガ以下を失い、底部付近しか残さない。やや胴部が狭まる傾向にある。最下段となる底部は、高さ 5 ~ 5.5cm の粘土輪を使用し、この上部に幅 2 ~ 3 cm の粘土紐を積み上げている。

器面調整は、外面胴部に細かく、丁寧な縦・斜めのハケメを施し、この後に底部端の高さ 2 cm 程度までヨコナデを行っている。また、内面は底部付近では粘土接合痕が顕著に残っているが、上部にしたがって指オサエやナデ調整で器面が平滑に整えられている。器壁の厚さは約 1 cm 程度である。器色は外面が暗褐色で、一部に黒斑が見られる。また、内面は、淡褐～暗赤褐色を呈する。

また、底部には円棒状物体のスタンプが残る。法量は、復元底部径 18.6 cm、残存器高 11.7 cm を測る。胎土はやや粗で、石英粗砂を多量に混入する。焼成は堅緻である。

03002は、埴丘の No.2 円筒埴輪にある。底部より 16 cm あがった位置に、断面「M」字形の低いタガをめぐらし、タガより上部に径 5 cm の円形の透かし孔がからうじて残る。器形は、底部よりやや上がった位置からタガ方向に向かって開く傾向にある。最下段の底部は、高さ 4 ~ 4.5 cm の粘土輪を使用し、この上部に幅 2 ~ 3 cm の粘土紐を積み上げている。

器面調整は、外面がタガの上下に縦ハケを施し、この後にタガ幅の上下および底部下端にヨコナデを行っている。また、内面は接合部を指オサエや底部から上部に向けて指による強いナデが顕著である。器厚は 1 ~ 0.8 cm とやや不安定である。器色は、外面が暗赤褐色で、大半に大黒斑が見られる。内面は淡褐色である。法量は、底部径 18.9 cm、残存器高 20.3 cm を測る。胎土は密で、石英粗砂を多量に混入する。また、焼成は堅緻である。

03003は、埴丘の No.3 にある。全体の約 1/2 が残り、底部より 16 cm の位置に一段目タガをめぐらす。全体にやや器壁の厚いつくりである。底部は、高さ 3.5 ~ 4 cm の粘土輪を使用している。底部下端に接合痕が見える。

器面調整は、器面の磨滅が著しく、外面の一部に縦ハケメを残すとタガ幅に強いヨコナデが認められるのみである。また、内面は接合部調整のために指オサエや上方に向かっての指ナデが認められる。器色は、外面が淡赤褐色、内面暗赤褐色を呈する。法量は、底部径 19 cm、残存器高 18.2 cm を測る。胎土は密で、焼成も堅緻である。

03004は、埴丘 No.4 の円筒埴輪にある。残りが悪く、反転復元である。やや小型の製品であるのか底部より 14 cm 上がった位置に、やや細身の断面「M」字形のタガをめぐらす。底部は、高さ 2 ~ 2.5 cm の粘土輪を使用し、幅 2 ~ 5 cm の粘土紐を積み上げている。

器面調整は、内外ともに器面の荒れが著しく、タガ下方に細かい縦ハケメを残すと底部端にヨコナデを認める。内面は、僅かに指オサエ後の指ナデが接合部を中心に入れる。器色は、内外ともに暗褐色を呈し、外面のタガ下に黒斑が見える。法量は、底部径 18 cm、残存器高 18.5 cm、タガ径 20 cm を測る。胎土はやや粗で、石英粗砂を多く混入する。焼成はやや軟質である。

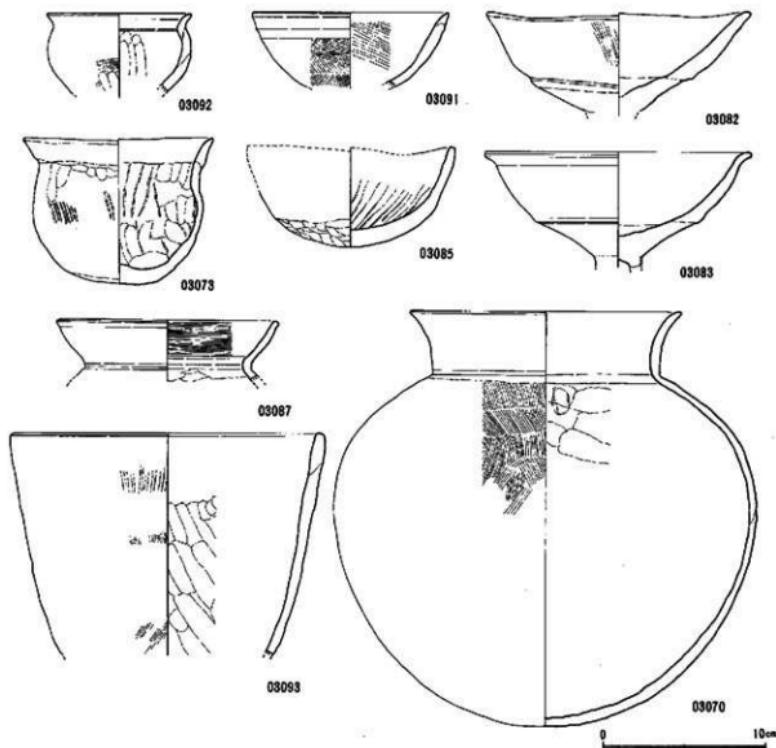


Fig.15 吉武 S 群 1号墳周溝内出土土器類実測図(1/3)

03005は、埴丘図 No. 5 の円筒埴輪にあたる。底部から16cm上がった位置に低く、断面「M」字形のタガをめぐらし、この上部に円形透かし孔の一部が残る。底部は、高さ3.5cm前後の粘土輪を使用し、この上に幅2~2.5cmの粘土紐を積み上げている。底部下端に接合痕が見える。

器面調整は、外面のタガ以上は磨滅が著しく、タガ以下で幅が2cm程度の原体を使用した細かい縦ハケメを全面に施し、底部下端を幅0.5cm程度でヨコナデ調整している。また、内面は底部付近の高さ6~7cmまでは指オサエ・ヨコナデで、これ以上は指によるナデあげを施す。器色は、外面黄褐色を呈し、タガ以下に黒斑が見られる。法量は、底部径17.5cm、残存器高22.3cm、タガ径19.9cmを測る。胎土はやや粗で、石英粗砂を多く混入する。また、焼成は堅緻である。

03006は、埴丘図 No. 6 の円筒埴輪にあたる。欠損が多いが、二段目タガまでを残し、タガ間に円形透かし孔を穿っている。全体に他と比較して細身の感じを受ける製品である。タガは、一段目が底部から16cm、二段目31~32cmの位置にめぐらし、透かし孔は一段目タガに近い位置に、5×5.8cm程度の

不整円形の孔を穿っている。底部は、高さ3cm程度の粘土輪を使用し、この上に2~2.5cmの粘土紐を積み上げている。

器面調整は、一段目タガの上下に幅が2.2cm程度の原体を使用した細かい縦ハケメを施し、この後にタガ裾の上下および底部下端にヨコナデを加えるが、他は磨滅のため不詳である。内面は底部付近に丁寧な指オサエで、これ以上は指による上部方向への強いナデ調整である。器色は、外側が褐~赤褐色で、全体におよぶタテ長の黒斑が認められる。また、内面は暗赤褐色である。法量は、底部径18cm、残存器高32.2cmを測る。胎土は密で、石英・長石・赤色粒子を混入する。また、焼成は堅緻である。

03007は、壇丘図No.7の円筒埴輪にある。底部より16cm上がった位置に低く、断面「M」字形タガをめぐらし、この上部に径4.5cm前後の円形透かし孔を穿っている。底部は、高さ3cm程度の粘土輪を使用し、この上に幅2.5cm程度の粘土紐を積み上げている。底部に接合部が顯著に見える。

器面調整は、外側がタガ上下に幅0.8cm程度の原体を使用した細かい縦ハケメを施し、この後にタガ裾の上下および底部下端にヨコナデを加えている。また、内面は接合部を中心指オサエ・ナデを施す。器色は、外側が暗褐色で、タガ以上に黒斑が見られる。また、内面は暗褐色を呈する。法量は、底部径19.2cm、残存器高22.5cm、タガ径21.9cmを測る。また、器厚は1~1.2cmを測る。胎土は密で、石英粗砂を多量に混入する。また、焼成も堅緻である。

03008は、壇丘図No.8の円筒埴輪にある。底部より15cm上がった位置に断面「M」字形のタガをめぐらし、この上部に円形透かし孔がかろうじて残る。透かし孔は反対側の対向する位置にも認められ一対となる。底部は、3cm前後の粘土輪を使用している。

器面調整は、外側がタガの上下に細かい縦ハケメを施し、この後にタガ裾の上下・底部下端にヨコナデを加えている。また、内面は接合部を中心指オサエ・ナデや一部にヘラ状のもので横に削る調整が見られる。器色は、外側が黄褐色で、タガの上下には丹塗りを行なう。また、内面は暗褐色を呈する。法量は、底部径17.2cm、残存器高22.8cm、タガ径21cmを測る。胎土は密で、石英粗砂を少量混入する。また、焼成も堅緻である。

03009は、壇丘図No.9の円筒埴輪にある。底部より15cm上がった位置に断面「M」字形のタガをめぐらし、この上部に円形の透かし孔が半分以下残存する。底部は、高さ3.5cm前後の粘土輪を使用し、この上に幅2~3cmの粘土紐を積み上げている。底部端に接合痕が明瞭である。

器面調整は、外側がタガの上部のもので小口幅1.3cm、下部で小口幅1.8cmの原体を使用した細かい縦ハケメを使用し、この後にタガ裾の上下および底部下端(幅3cm)にヨコナデを加えている。また、内面は下端部に指オサエが見られる他はヘラ状のもので斜めにナデ上げて接合面の調整を行なっている。器色は、暗赤褐~暗褐色で、タガ以上には丹塗りが施されている。また、内面は暗赤褐色を呈する。法量は、底部径20.2cm、残存器高24cm、タガ径23.1cmを測る。胎土はやや粗で、石英・長石・赤色粒子を多く混入する。また、焼成は軟質である。

03010は、壇丘図No.10の円筒埴輪にある。底部より16cmと31.5~32cm上がった位置に断面「M」字形のタガ2条をめぐらし、タガ間の一段目タガの近くに径5cm程度の不整な円形透かし孔を穿っている。底部は、高さ3.5cmの粘土輪を使用し、この上に2~3cmの粘土紐を積み上げており、底部端には接合面が明瞭に残る。

器面調整は、外側がタガ間および一段目タガ以下で細かい縦ハケメを施し、この後にタガ裾の上下および底部下端にヨコナデを加えている。また、内面は接合部の指オサエとともに一段目タガまではヘラ状工具による斜めのナデ、これ以上は縦方向のナデで調整を加えている。器色は、外側が淡黄褐

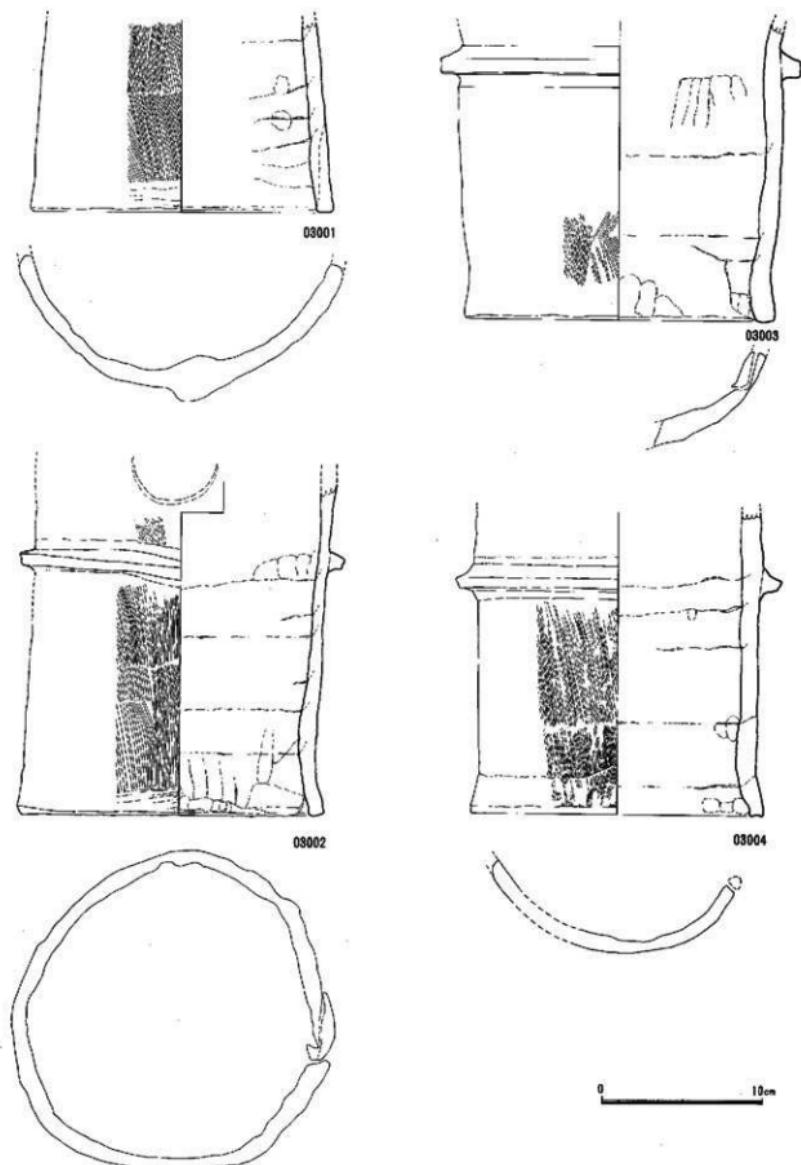


Fig.16 吉武S群1号墳出土円筒埴輪実測図(1)(1/3)

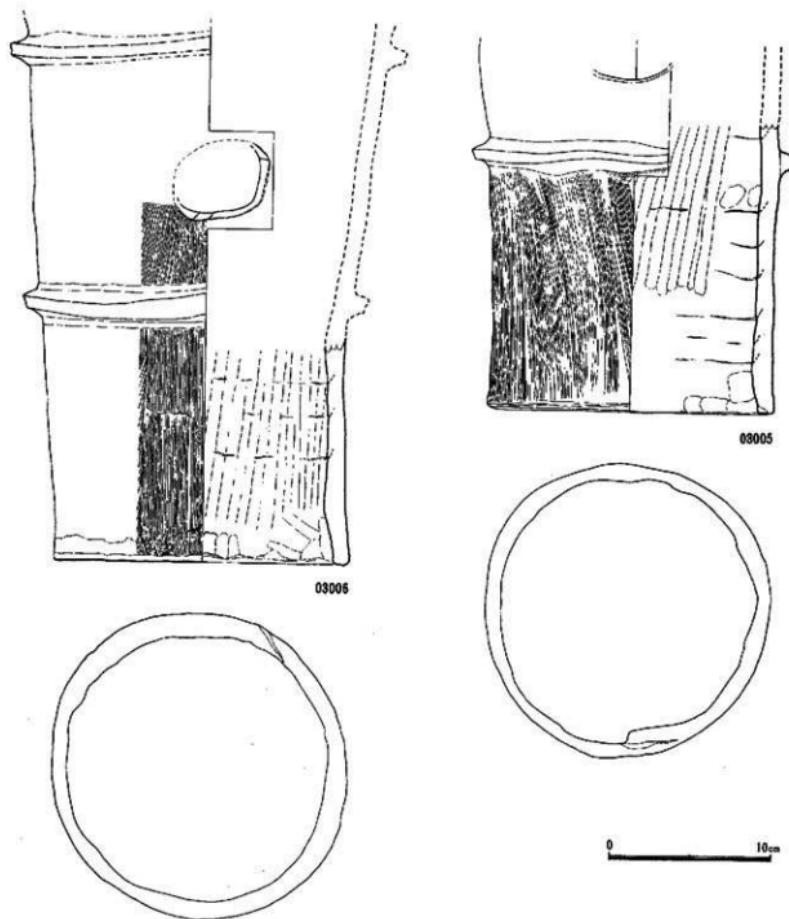


Fig.17 吉武S群1号墳出土円筒埴輪実測図(2)(1/3)

色～淡赤褐色で、一段目タガ以下に大黒斑が見られる。一段目タガ以上に丹塗りが施されている。また、内面は暗赤褐色を呈する。法量は、底部径19.7cm、残存器高32cm、タガ径21.5cmを測る。胎土はやや粗で、石英・長石・赤色粒子を混入する。また、焼成は堅緻である。

03011は、墳丘図No.11の円筒埴輪にあたる。底部から16cm上がった位置に水平に、断面「M」字形のタガをめぐらす。底部は、高さ3cm程度の粘土輪を使用し、2～3cm幅の粘土紐を積み上げている。

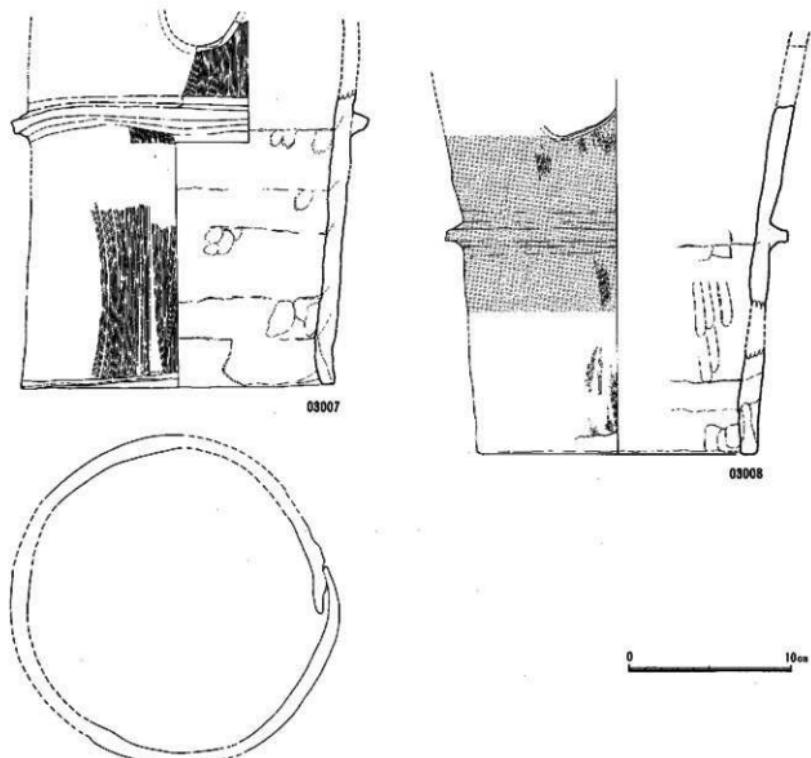


Fig.18 吉武S群1号墳出土円筒埴輪実測図(3)(1/3)

器面調整は、外面がタガ以下に細かい縦ハケメを施した後、タガ据の上下および底部端にヨコナデを加える。また、内面は底部付近に指オサエ後ヨコナデで、上部は斜め・縦方向のナデ上げとなってい。器色は、外面赤褐色で、タガの上下にかけて人面斑が見られる。また、内面は暗赤褐色を呈する。なお、タガ以上には丹塗りの痕跡がある。法量は、底部径19cm、残存器高22.3cm、タガ径21cmを測る。胎土は密で、石英・長石・赤色粒子を混入する。また、焼成も堅緻である。

03012は、墳丘図No.12の円筒埴輪にある。底部から15cm上がった位置に上端幅の不揃いな断面「M」字形のタガをめぐらし、この上部に円形透かし孔を穿っている。底部には、高さ3.5cmの粘土輪を使用し、この上部に幅2.5cm程度の粘土糰を積み上げている。

器面調整は、外面がタガ以下で細かい縦ハケメ調整後、タガ据の上下および底部端にヨコナデを加えている。また、内面は接合部の指オサエ後に斜め方向のヘラナデが全面に残る。器色は、外面が淡赤褐色で、タガの上下に黒斑が見られる。また、内面は暗赤褐色を呈する。法量は、底部径18cm、残

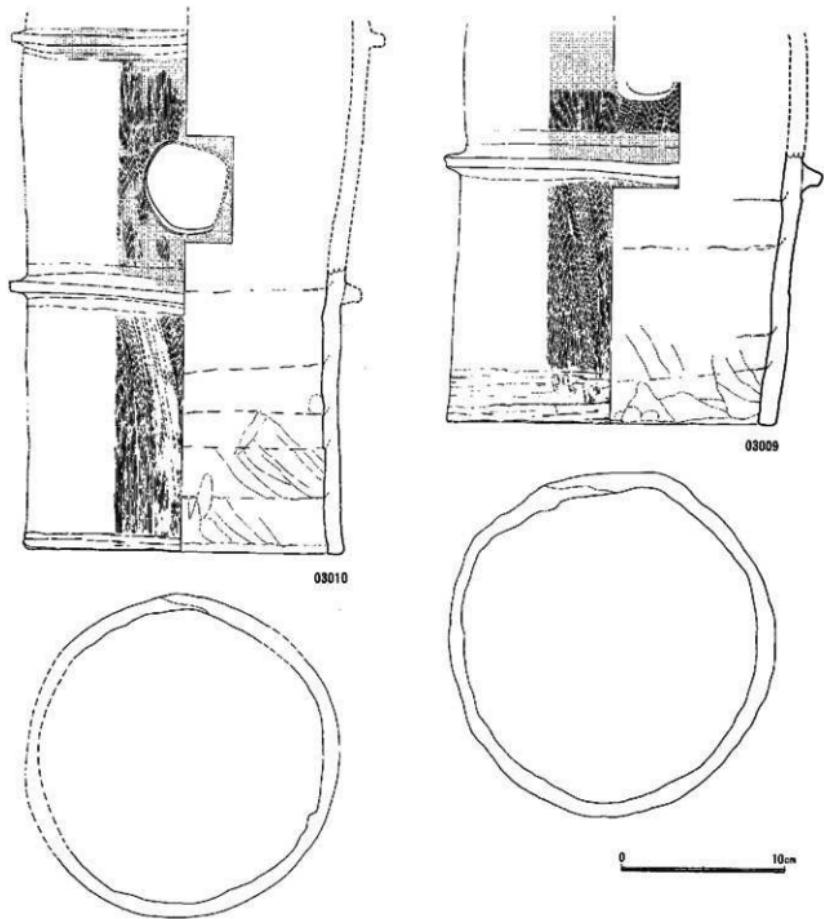


Fig.19 吉武S群1号墳出土円筒埴輪実測図(4)(1/3)

存器高16.5cm、タガ径21.5cmを測る。胎土は密で、石英・長石・赤色粒子を多く混入する。また、胎土も堅緻である。

03013は、墳丘図No.13の円筒埴輪にあたる。タガ二段を残し、一段目が底部から16cm、二段目が30.5~31cmを測る位置にめぐらす。両タガ間に内径4.5cm程の円形透かし孔を穿っている。タガの断面形は上部の二段目の方が高く、細い仕上がりとなっている。底部は、高さが2.5cm前後の粘土紐を使用し、以上は2~2.5cm幅の粘土紐を積み上げている。

器面調整は、外面が一段目タガ以下で幅1.1cm程度の原体を使用した細かい縦ハケメを施し、両タガ

の上下および底部下端はヨコナデ調整を加える。また、内面は底部付近は指オサエで、上部は指による上部への強いナデである。器色は、外表面が全面丹塗で、赤褐色を呈する。また、法量は、底部径18.5cm、残存器高31.2cm、タガ径22.5cmを測る。胎土は密で、石英・長石・赤色粒子を含む。また、焼成も堅緻である。

03014は、埴丘図 No.14の円筒埴輪にあたる。底部から14cmの位置にタガをめぐらし、この上部の前後に円形透かし孔を一对穿っている。器面調整は、外表面がタガの上下に幅1.8cmの原体使用の細かい縦ハケメを施し、タガ幅上下・底部端にヨコナデを加える。内面は接合部を指オサエ・ナデで調整する。器色は、外表面淡黄褐色で、タガ下に小黒斑がある。内面は暗赤褐色を呈する。法量は、底部径18.5cm、残存器高20cm、タガ径21cmを測る。胎土は密で、石英・長石粗砂を多く含む。また、焼成も堅緻である。

03015は、埴丘図 No.15の円筒埴輪にあたる。底部から約16cmの位置にタガをめぐらし、この上部に内径5.5cmの円形透かし孔を穿つ。器面調整は、外表面がタガの上に幅1.8cmの原体使用の細かい縦ハケメで、この後タガ幅・底部にヨコナデ、内面は指オサエ後にヘラ状T工具によるナデ上げである。器色は、外表面暗褐色で、タガ上下に亘って大黒斑がみられ、全面に丹塗りを施す。内面は暗赤褐色を呈する。

法量は、底部径18.8cm、残存器高23.6cm、タガ径21.9cmを測る。胎土はやや粗で、石英粗砂を多く混入する。また、焼成は堅緻である。

03016は、埴丘図 No.16の円筒埴輪にあたる。底部から14cmにタガをめぐらし、この上部に前後一对の円形透かし孔を穿つ。器面の磨滅が著しく、調整は外表面が縦ハケ後ヨコナデか。器色は、外表面が暗黄褐色で黒斑がみられ、内面は暗赤褐色を呈する。法量は、底部径17cm、タガ径22.6cmを測る。胎土はやや粗で、焼成もやや軟質である。

03017は、埴丘図 No.17の円筒埴輪にあたる。底部から16cmにタガをめぐらす。底部は、高さ4cm程度の粘土輪を使用し、この上に幅2~2.5cmの粘土紐を積み上げる。器面調整は、外表面のタガ下に細かい縦ハケメを施し、この後に底部端をヨコナデする。内面は接合部に指オサエ後に丁寧なナデ上げ調整を加える。器色は、外表面赤褐色で、タガ以上は丹塗である。また、内面は暗赤褐色である。底部径18.5cmを測る。胎土密で、石英・長石・赤色粒子を含む。焼成は堅緻である。

03018は、埴丘図 No.18の円筒埴輪にあたる。底部から16cmにタガをめぐらす。底部は、高さ4cm弱の粘土輪を使用し、上部に幅2cm程度の粘土を積み上げる。器面調整は、外表面がタガ下に細かい縦ハケメ調整後、底部端にヨコナデを施す。内面は底部付近に指オサエが残り、上部はナデ上げ調整である。器色は、内外面ともに暗赤褐色を呈し、タガ以上は丹塗である。底部径18.4cmを測る。胎土はやや粗で、石英・長石・赤色粒子を含む。焼成は、堅緻である。

03019は、埴丘図 No.19の円筒埴輪にあたる。底部から16cmにタガをめぐらす。底部は、高さ3cm強の粘土輪を使用し、上部に幅2~3cm程度の粘土を積み上げる。器面調整は、外表面がタガ下に小口幅1.5cmの原体による細かい縦ハケメ調整後、底部端・タガ幅上下にヨコナデを施す。内面は丁寧なナデ上げ調整である。器色は、外表面赤褐色を呈し、タガ以上は丹塗である。底部径18.4cm、タガ径21.4cmを測る。胎土は密で、焼成も堅緻である。

03020は、埴丘図 No.20の円筒埴輪にあたる。底部から16cmにタガをめぐらす。底部は、高さ2.5cmの粘土輪を使用し、上部に幅2cm程度の粘土を積み上げる。器面調整は、外表面がタガ下に細かい縦ハケメ調整後、底部端・タガ幅上下にヨコナデを施す。内面は丁寧なナデ上げ調整である。器色は、外表面赤褐色を呈し、全面に大黒斑がある。内面は暗赤褐色を呈する。底部径18.6cm、タガ径19.7cmを測る。胎土はやや粗で、石英・長石・赤色粒子を含む。焼成は堅緻である。

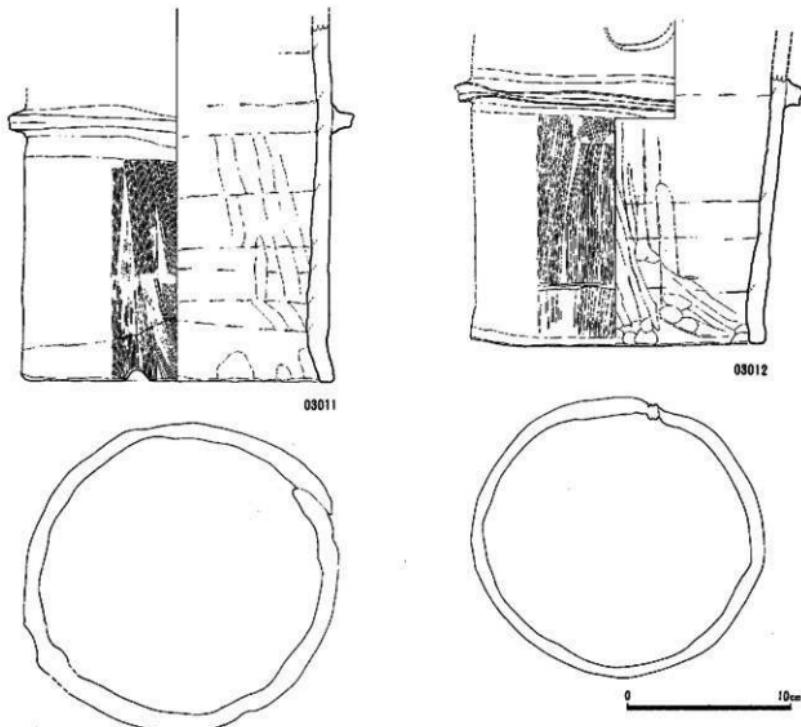


Fig.20 吉武 S 群 1 号 墳出土円筒埴輪実測図(5)(1/3)

03021は、墳丘図 No.21の円筒埴輪にある。底部から16cmにタガをめぐらす。底部は、高さ3.5cmの粘土輪を使用し、上部に幅3cm程度の粘土を積み上げる。器面調整は、外面がタガ上下に小口幅1.5cmの原体使用の細かい継ハケメ調整後、底部端・タガ据上下にヨコナデを施す。内面は、ナデ上げ調整である。器色は、外面が赤褐色を呈し、内面は暗赤褐色を呈する。底部径18.6cm、タガ径20.7cmを測る。胎土は密で、焼成も堅緻である。

03022は、墳丘図 No.23の円筒埴輪にある。底部は、高さ3cm程度の粘土輪を使用し、上部に幅2～2.5cm程度の粘土を積み上げる。器面調整は、磨滅が著しく、外山に細かい継ハケメ調整後、底部端にヨコナデを施す。内面は底部に丁寧な指オサエで、以上はナデ上げ調整である。器色は、外面暗赤褐色を呈し、一部に不整形の黒斑がある。底部径19cmを測る。胎土は密で、石英・長石・赤色粒子を多く混入する。焼成は堅緻である。

03023は、墳丘図 No.24の円筒埴輪にある。底部から16cmにタガをめぐらす。底部は、高さ2.5cm程度の粘土輪を使用し、上部に幅2.5～3cm程度の粘土を積み上げる。器面調整は、外面が小口幅1.6cm程度の原体を使用した細かい継ハケメ調整後、底部端・タガ据の上下にヨコナデを施す。内面は底部

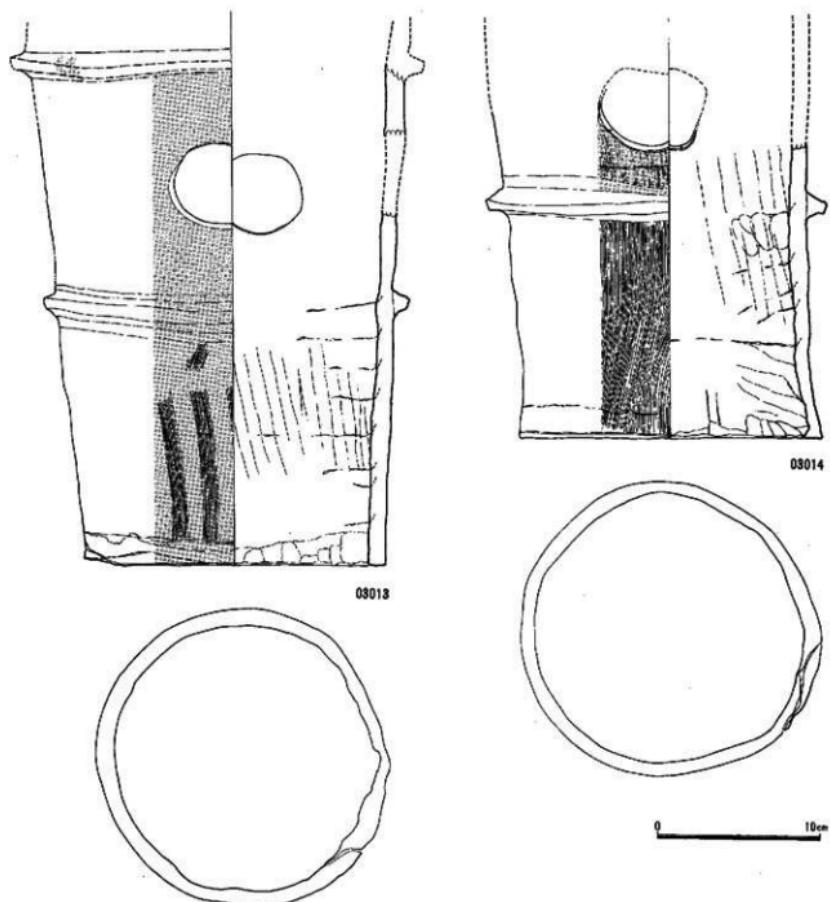


Fig.21 吉武S群1号墳出土円筒埴輪実測図(6)(1/3)

に丁寧な指オサエで、以上はナデ上げ調整である。器色は、外面赤褐色～黄褐色を呈し、タガ下の大部分は黒斑である。底部径19.5cm、タガ径21.5cmを測る。胎土は密で、石英・長石・赤色粒子を多く混入する。焼成は堅緻である。

03024は、埴丘図No.25の円筒埴輪にあたる。底部から16cmにタガをめぐらし、この上部に円形透かし孔を穿つ。器面調整は、外面でタガの上下に細かい縦ハケメ調整後、底部端・タガ底の上下にヨコナデを施す。内面は底部に丁寧な指オサエで、以上は指によるナデ上げ調整である。器色は、外面暗褐色～黒褐色を呈し、全体に縦長の黒斑がある。底部径18.8cm、タガ径21.5cmを測る。胎土は密で、石

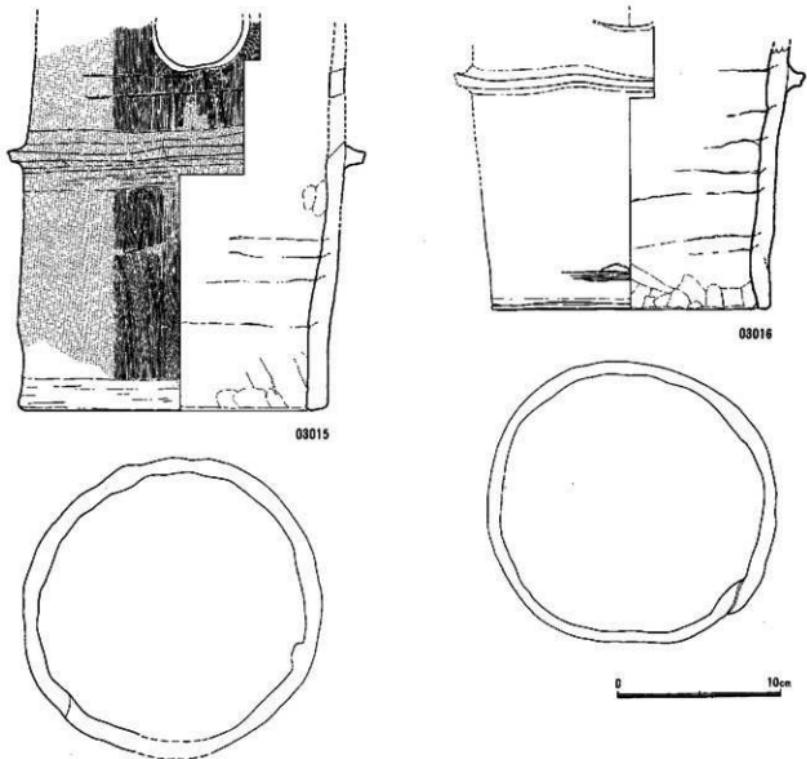


Fig.22 吉武S群1号墳出土円筒埴輪実測図(7)(1/3)

英・長石・赤色粒子を混入する。焼成はやや軟質である。

03025は、墳丘岡No.26の円筒埴輪にあたる。底部から16cmにタガをめぐらす。底部は、高さ4cm程度の粘土輪を使用し、上部に幅2~2.5cm程度の粘土を積み上げる。器面調整は、外面がタガ下に細かい縦ハケメ調整後、底部端・タガ幅上下にヨコナデを施す。内面は、底部に丁寧な指オサエがみられ、これ以上はナデ上げ調整である。器色は、外面が黒褐色で、全面に黒斑がみられる。内面は黒色を呈する。底部径19.8cm、タガ径22.6cmを測る。胎土はやや粗で、焼成はやや軟質である。

03026は、墳丘岡No.27の円筒埴輪にあたる。底部から15cmにタガをめぐらす。底部は、高さ2.5cm程度の粘土輪を使用し、上部に幅2.5cm強の粘土を積み上げる。器面調整は、外面がタガ下に細かい縦ハケメ調整後、底部端・タガ幅上下にヨコナデを施す。内面は、底部に丁寧な指オサエがみられ、これ以上はヘラナデ上げ調整である。器色は、内外面ともに暗褐色を呈する。底部径19.4cm、タガ径22.2cmを測る。胎土は密で、石英・長石・赤色粒子を多量に含む。焼成は堅緻である。

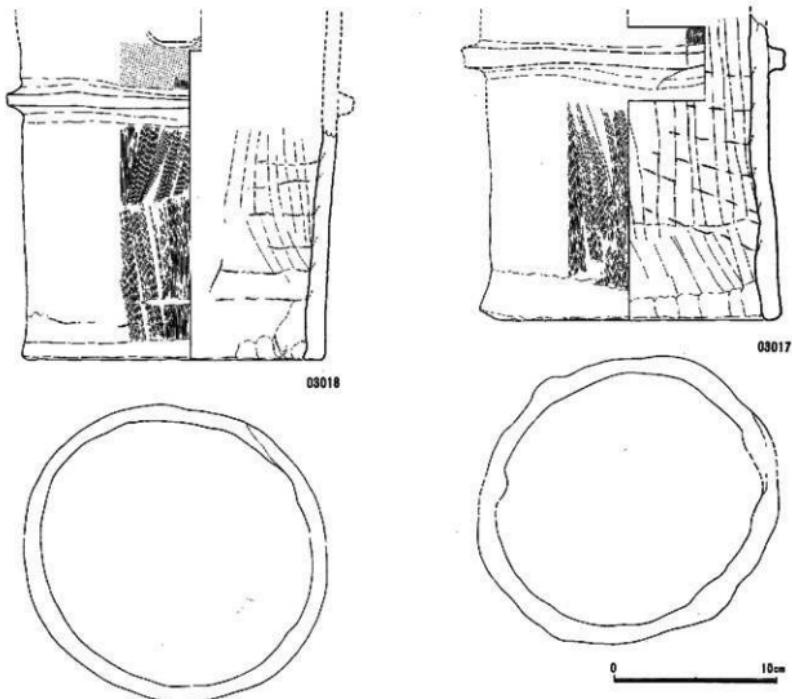


Fig.23 吉武S群1号墳出土円筒埴輪実測図(8)(1/3)

03027は、埴丘図No.28の円筒埴輪にあたる。底部から15cmにタガをめぐらし、この上部に円形透かし孔を穿つ。底部は、高さ3cm程度の粘土輪を使用し、上部に幅2~3cm程度の粘土を積み上げる。器面調整は、外面部がタガ下に細かい縦ハケメ調整後、底部端・タガ網上下にヨコナデ、タガ以上ナデを施す。内面は、底部に指オサエがみられ、以上はナデ上げ調整である。器色は、外面部が暗褐色・赤褐色を呈し、縦方向に幅4cmの黒斑がある。また、内面は暗褐色を呈する。底部径18.5cm、タガ径21.6cmを測る。胎土はやや粗で、石英・長石細砂を多量に含む。焼成は堅緻である。

03028は、埴丘図No.29の円筒埴輪にあたる。底部から16cmにタガをめぐらす。底部は、高さ4cm程度の粘土輪を使用し、上部に幅2~2.5cm程度の粘土を積み上げる。器面調整は、外面部がタガの上下に小口幅1.9cmの原体を使用した細かい縦ハケメ調整後、底部端・タガ網上下にヨコナデ、タガ以上ナデを施す。内面は、底部に指オサエがみられ、以上はヘラによるナデ上げ調整である。器色は、外面部が暗赤褐色を呈し、全体の約1/3が黒斑である。また、内面は暗赤褐色を呈する。底部径18.2cm、タガ径17.8cmを測る。胎土は密で、石英・長石細砂を多量に含む。焼成は堅緻である。

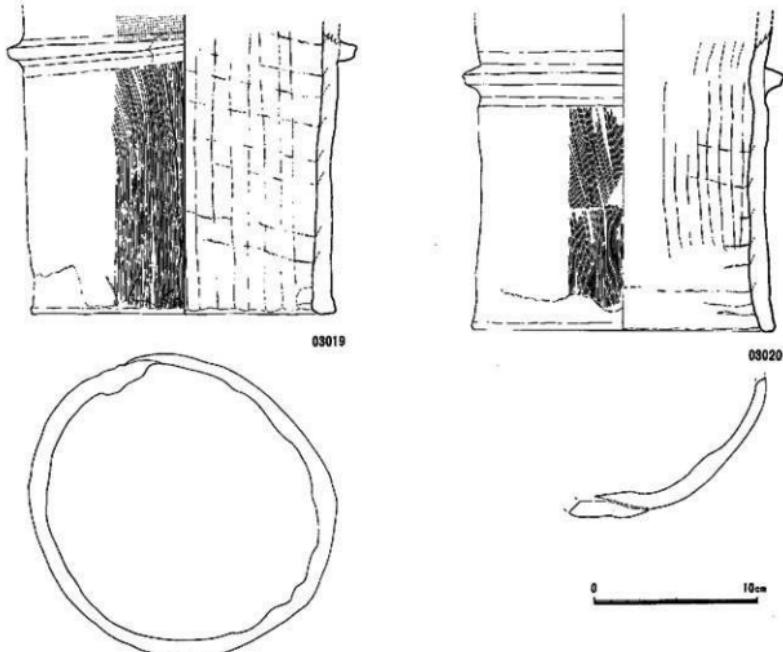


Fig.24 吉武S群1号墳出土円筒埴輪実測図(9)(1/3)

03029は、埴丘図No.30の円筒埴輪にある。底部から16cmの位置にタガをめぐらす。底部は、高さ2.5cm弱程度の粘土輪を使用し、上部に幅2cm程度の粘土を積み上げる。全体に器面の荒れが著しく、調整は、外面がタガ以下に細かい縦ハケメ調整後、底部端・タガ据上下にヨコナデを施す。内面は、底部とこれ以上の接合面に指オサエがみられ、この後にヨコナデ調整である。器色は、外面が暗赤褐色を呈し、タガ下に大黒斑がある。底部径18.5cm、タガ径17.3cmを測る。胎土はやや粗で、石英粗砂を多量に含む。焼成は堅緻である。

03030は、埴丘図No.31の朝顔形埴輪にある。頸部とこれから9cm程下がった胴部にタガをめぐらし、胸部タガ下にはタテの長方形透かし孔を穿つ。胴部は幅2.5~3cm程度の粘土を積み上げている。器面調整は、外面の胴部タガ以下に小口幅1.3cm程度の原体を使用した細かい縦ハケメ、これ以上に細かい横ハケメ、さらに頸部タガ以上に細かい縦ハケメを施した後、タガ据の上下にヨコナデを加える。内面は、胴部が全体に斜め・頸部付近が縦方向、口縁部が横方向のヘラナデ調整である。器色は、内外面ともに暗赤褐色を呈し、外面の全面が丹塗である。タガ上に黒斑がある。頸部径15cm、胸部のタガ径20.5cmを測る。胎土は密で、石英・長石細砂・赤色粒子を多量に含む。焼成は堅緻である。

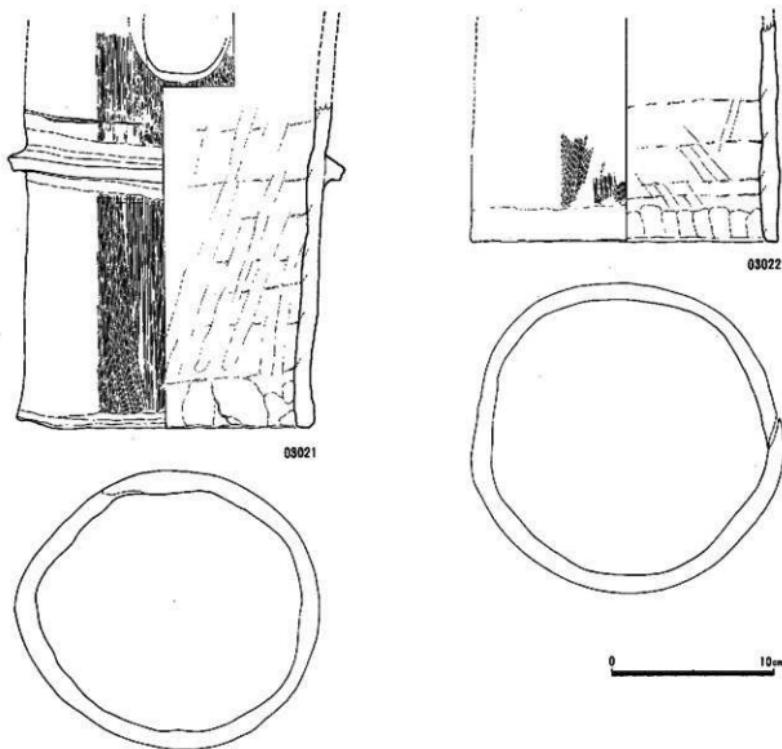


Fig.25 吉武S群1号墳出土円筒埴輪実測図(10)(1/3)

03031は、埴丘図No.32の円筒埴輪にある。底部から16cmの位置にタガをめぐらし、この上部に円形透かし孔を穿つ。底部は、高さ3cm程度の粘土輪を使用し、上部に幅2.5~3cm程度の粘土を積み上げる。全体に器面の荒れが著しく、調整は、外面がタガ以下に細かい縦ハケメ調整後、底部端・タガ据上下にヨコナデ、タガ以上にヘラナデを施す。内面は、底部とこれ以上の接合面に指オサエがみられ、この後に斜めのナデ調整である。器色は、外面が赤褐色を呈し、タガ下に黒斑がある。また、内面は暗赤褐色を呈する。底部径19.5cm、タガ径22.2cmを測る。胎土は密で、石英粗砂を多量に含む。焼成は堅緻である。

03032は、埴丘図No.34の円筒埴輪にある。底部から16cmの位置にタガをめぐらす。底部は、高さ2.5cm程度の粘土輪を使用し、上部に幅2.5cm程度の粘土を積み上げる。底部端に接合部が明確に見える。器面調整は、外面がタガ以下に細かい縦ハケメ調整後、底部端・タガ据上下にヨコナデを施す。内面は、接合面を中心に指オサエがみられる。器色は、外面が暗赤褐~赤褐色を呈し、タガ以上は丹塗りである。また、内面は暗赤褐色を呈する。底部径19.4cm、タガ径20.7cmを測る。胎土は密で、石英粗砂を多量に混入する。焼成は堅緻である。

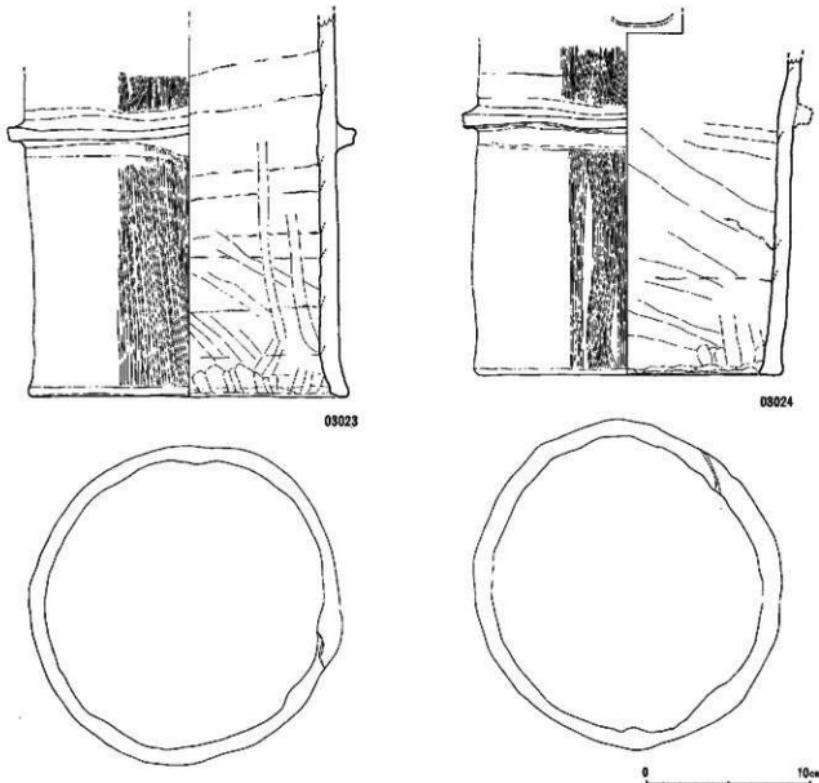


Fig.26 吉武S群1号墳出土円筒埴輪実測図(11)(1/3)

03033は、前方部周溝で出土した円筒埴輪である。口縁部とこの端部から約15cm下がった位置にタガをめぐらす。タガより8cm程下部には径が4.5~5.5cmの円形透かし孔を穿つ。器面調整は、内外ともに磨滅が著しいが、外面のタガの上下に細かい斜め・継ハケ調整後、口縁部端・タガ据上にもヨコナデを施す。内面は、下部で斜めの指ナデ、上部にしたがってヘラ状工具による斜めのナデがみられる。器色は、外面が暗褐色を呈し、鉄分が強く付着している。また、内面は暗赤褐色を呈する。口縁部20.4cm、タガ径23.7cmを測る。胎土は密で、石英・長石・赤色粒子を多量に混入する。焼成は堅緻である。

03034は、後円部の周溝南側で出土した朝顔形埴輪である。口縁部と胸部の大半を失っている。頭部に断面「M」字形の低いタガとこれから8cm程下がった胴部にやや大型の低いタガをめぐらすや肩部の張ったつくりとなっている。器面調整は、外面が胴部タガ以下に細かい継ハケメを僅かに残しているものの、これ以上はナデ調整によって平滑に整えられており、この後にタガ据の上下にヨコナデを加えている。内面は、胸部が指オサエ後に指ナデ上げで、肩部は指オサエが著しい。また、頭部に

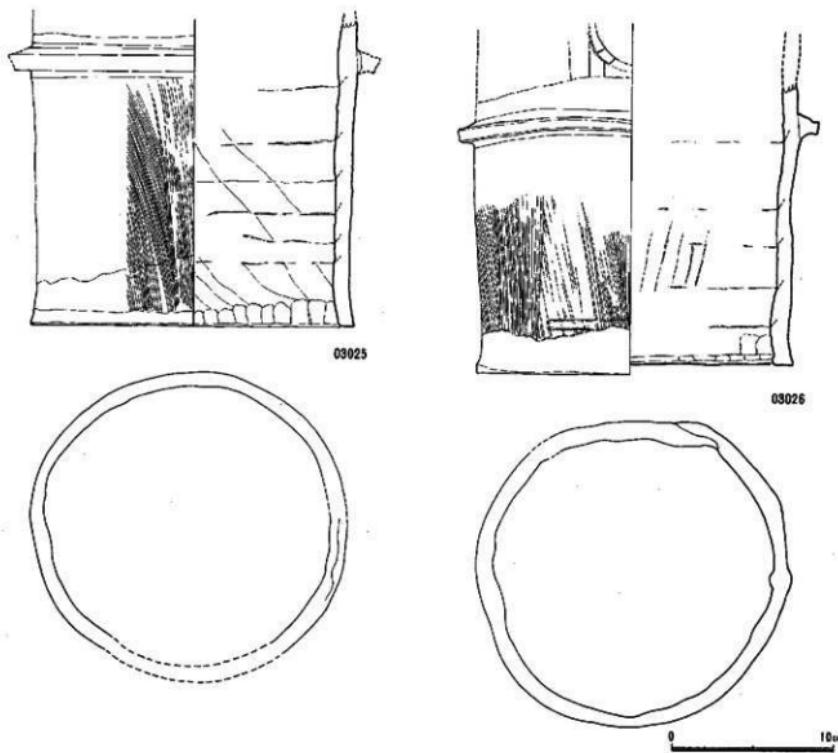
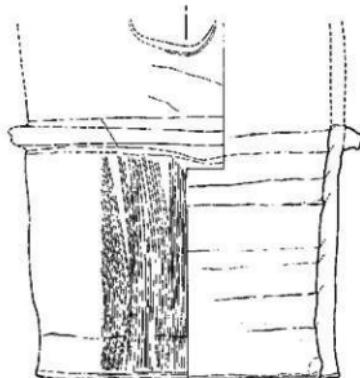


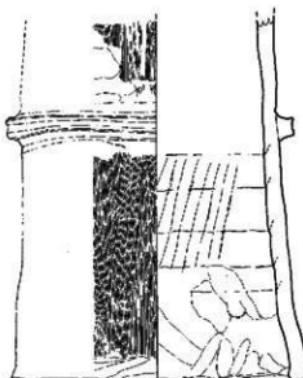
Fig.27 吉武S群1号墳出土円筒埴輪実測図(12)(1/3)

は集中的な指オサエがみられる。器色は、内外面ともに赤褐色を呈し、外面の全面および内面の肩部までが丹塗である。タガ上から下部にかけて黒斑がある。頭部径15.8cm、胴部のタガ径27.3cmを測る。胎土は密で、石英・長石細砂を多量に含む。焼成は堅緻である。

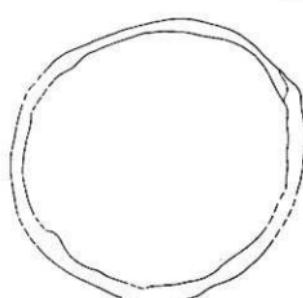
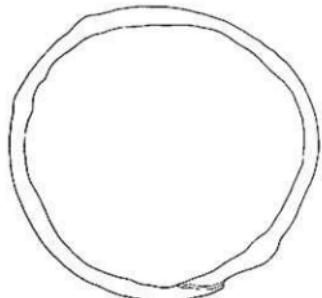
03035は、後円部の北側周溝から出土した円筒埴輪である。底部から16cmの位置にタガをめぐらし、タガから9cm上部に径5.5cmを測る円形透かし孔を穿っている。底部は、高さ4cm程度の粘土輪を使用し、上部に幅2.5cm程度の粘土を積み上げている。器面調整は、外面がタガ以下に細かい縦ハケメで調整後、底部端・タガ裾上下に強いヨコナデを施している。内面は、底部に丁寧な指オサエを施し、以上は接合部を指オサエした後、指によるナデ上げ調整である。器色は、外面が暗褐色～黒褐色を呈し、タガの上下に亘って縦長の黒斑が認められる。内面は暗褐色を呈する。また、タガと底部端の間には外方からの二次透かし孔痕が認められる。孔は径が1.5×2.3cmを測るが、埴丘中に埋納する円筒埴輪に穿孔を加える意味はどのようなものであろうか。法量は、底部径19.6cm、タガ径20.5cmを測る。胎土は密で、石英・長石・赤色粒子を大量に混入する。また、焼成は堅緻である。



03027



03028



0 10cm

Fig. 28 吉武 S 群 1 号墳出土円筒埴輪実測図(13)(1/3)

03043は、後円部の墳丘から出土した円筒埴輪である。底部から14cmの上部に断面が「M」字形を呈するタガをめぐらし、タガから8cm程上部に内径が5cmを越える円形透かし孔を穿っている。底部は、高さ3.3cm程度の粘土輪を使用し、上部に幅2~2.5cm程度の粘土を積み上げている。また、底部下端には粘土輪の接合部を明確に見ることができる。

器面調整は、外面がタガ以下に細かい継ハケメで調整後、底部端・タガ裾上下に強いヨコナデを施しており、底部端付近には粘土積み上げの痕跡が未調整のまま器面に残る。内面は、底部に丁寧な指オサエを施し、以上は接合部に指による丁寧なナデ上げ調整を施している。器色は、外面が赤褐色を呈し、タガの上下に亘って大川斑が認められる。タガ以上は丹塗りである。内面は暗赤褐色を呈する。法量は、底部径19.3cm、タガ径21.8cm(復元値)を測る。胎土は密で、石英・長石・赤色粒子を大量に混入する。また、焼成は堅緻である。

03044は、後円部の墳丘東南部から出土した円筒埴輪である。底部から14cmの上部に断面が「M」字形を呈する低いタガをめぐらす。底部は、高さ3.3cm程度の粘土輪を使用し、上部に幅2~2.5cm程度の粘土を積み上げている。また、底部下端には粘土輪の接合部を明確に見ることができる。

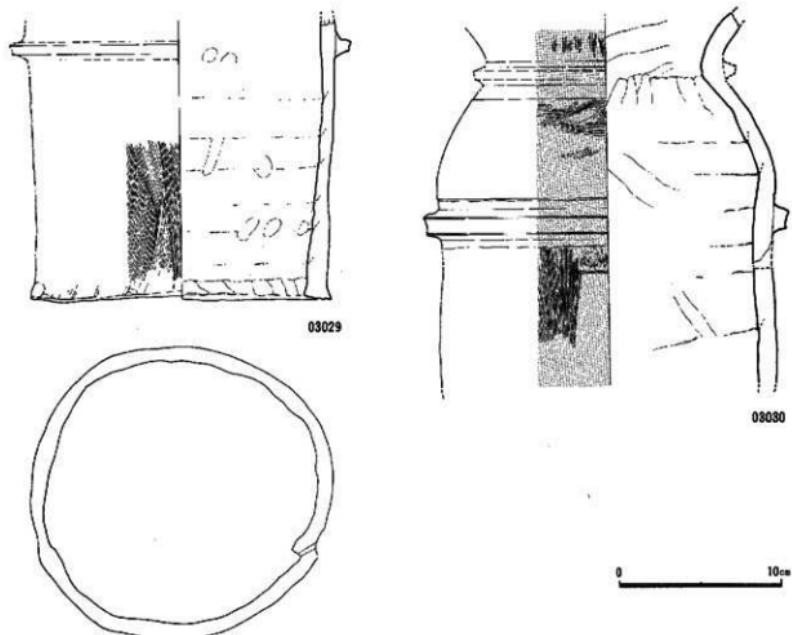


Fig.29 吉武S群1号墳出土円筒埴輪実測図(14)(1/3)

器面調整は、外面がタガ以下に細かい縦ハケメで調整後、底部端・タガ据上下に強いヨコナデを施しており、底部端付近には粘土積み上げの痕跡が未調整のまま器面に残っている。内面は、底部に丁寧な指オサエを施し、以上は接合部に指による丁寧なナデ上げ調整を施している。器色は、外面が暗褐色～黒褐色を呈し、タガの上下に亘ってやや薄いが黒斑が認められる。内面は暗赤褐色を呈する。法量は、底部径18.9cm、タガ径23.7cmを測る。胎土は密で、焼成も堅緻である。

03045は、後円部の墳丘から出土した円筒埴輪口縁部破片である。のびやかに外方に開く口縁部は器厚が0.8～1cmと通常の生活土器と遜色ないほどの薄さである。

器面調整は、外面が細かい縦ハケメで調整後、口縁部全体にヨコナデを加え、ハケメも殆ど消えかかっている。内面は、丁寧なヨコナデで器面を整えている。器色は、外面が淡黄褐色を呈し、全面が丹塗りである。内面は淡赤褐色を呈する。法量は、口縁径38.4cm、残存高12.5cmを測る。胎土は非常に密で、また、焼成も堅緻である。

形象埴輪 (Fig.33, Pl.28)

03038は、後円部の北側周溝内で出土した埴輪である。形状は下端部がやや外側に踏ん張る板状の製

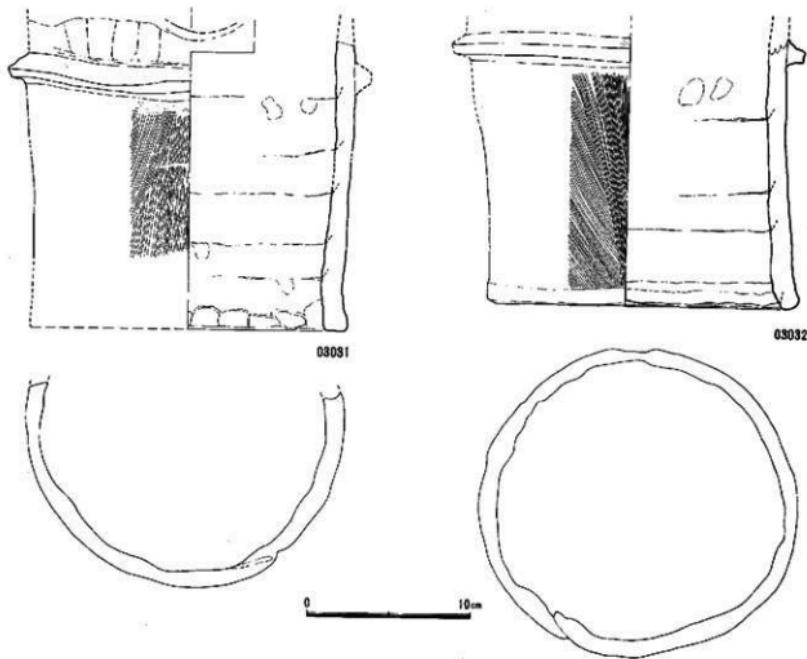


Fig.30 吉武S群1号墳出土円筒埴輪実測図(15)(1/3)

品で、上端部はややカーブを描いている。また、下端部は直取りを行っている。外面には縦方向2本単位、横方向1本の沈線文で格子文様が描かれており、縦線後に横線が引かれる。格子の内寸法は 3×4 cm程度を測る。これらの沈線はいずれも線の平行関係やほぼ当分に区画される線使いから直線的な線引き具を使用している。器色は、淡黄褐色を呈し、全面に丹塗りを施す。また、内面は剥落が著しいが、残存部には丁寧なヨコナデが残る。胎土は密で、石英・長石・赤色粒子を混入する。焼成はやや軟質である。楯形埴輪か。

03064は、後円部の埴丘東北部で出土した埴輪片である。器面の荒れが著しいが、器面調整は横方向のナデ調整と思われる。片面に二本単位の縦沈線を描いた後に、横方向の沈線を交叉させている。手法は北側周溝で出土した03038と同様のものである。描かれた格子の内寸法は、 3×4 cm強の縦長となる。この文様も直線的な線引き具を使用したことは明らかである。器色は、内外面とともに淡黄褐色を呈する。胎土は密で、石英粗砂・赤色粒子を多く混入している。また、焼成はやや軟質である。楯形埴輪か。

03065は、前方部の周溝内から出土した埴輪片である。前の2点と同様に縦横の沈線による格子目がみられる。この埴輪片もやはり 3×4 cm程度の格子単位に面を区切る手法を有する。器色は、内外面ともに淡褐色を呈する。胎土は密で、石英・長石・赤色粒子を多量に混入している。焼成は堅緻である。楯形埴輪か。

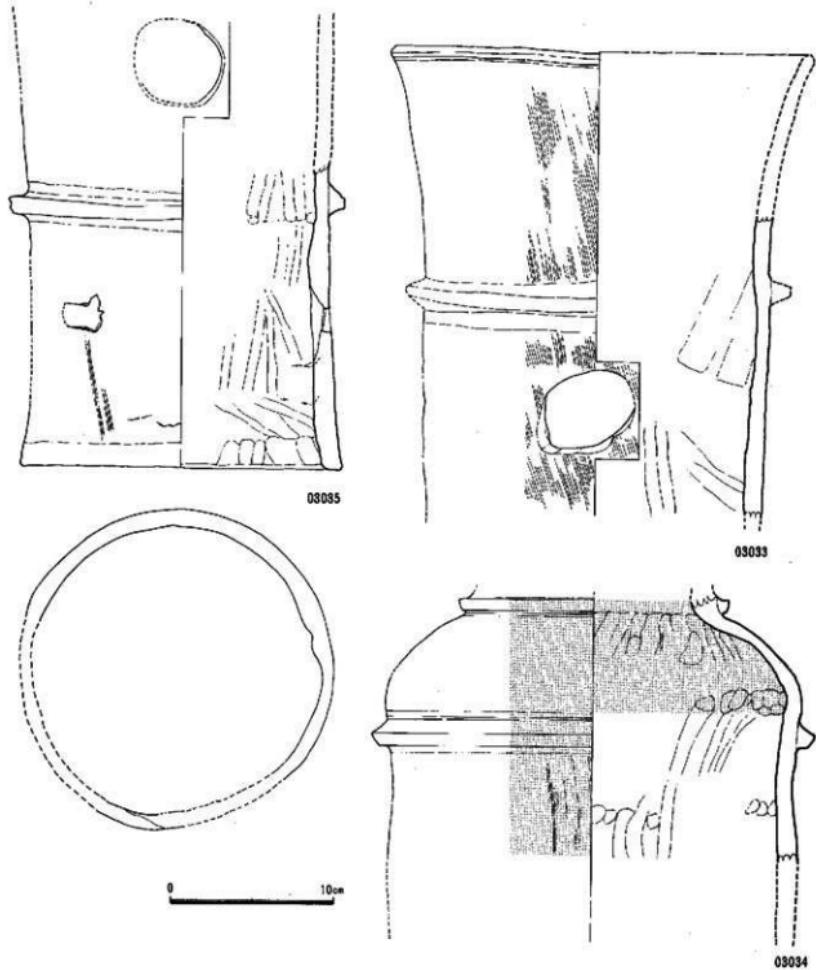


Fig.31 吉武S群1号墳出土円筒埴輪実測図(16)(1/3)

03066は、後円部の北側周溝内で出土した埴輪片である。壊滅のため内外面ともに器面の調整は不詳である。埴輪片は脚状に聞く形状をなし、端部は細くまとめる。表面にはその鋸部に沈線文一条をめぐらし、その下部の端部との間を頂部間が1~2cmを測るU形沈線で埋めている。また、この沈線より2cm程上部には、幅が1cmを測る平行沈線内に頂部間が1~1.5cm間隔の山形沈線文をめぐらしており、いわゆる三角文の印象を強くうける。これらの文様は革縫じの手法を表したものと考えられる。器色は、外側が淡黄褐色、内面が黄褐色を呈する。胎土はやや粗で、石英・長石・赤色粒子を多く混

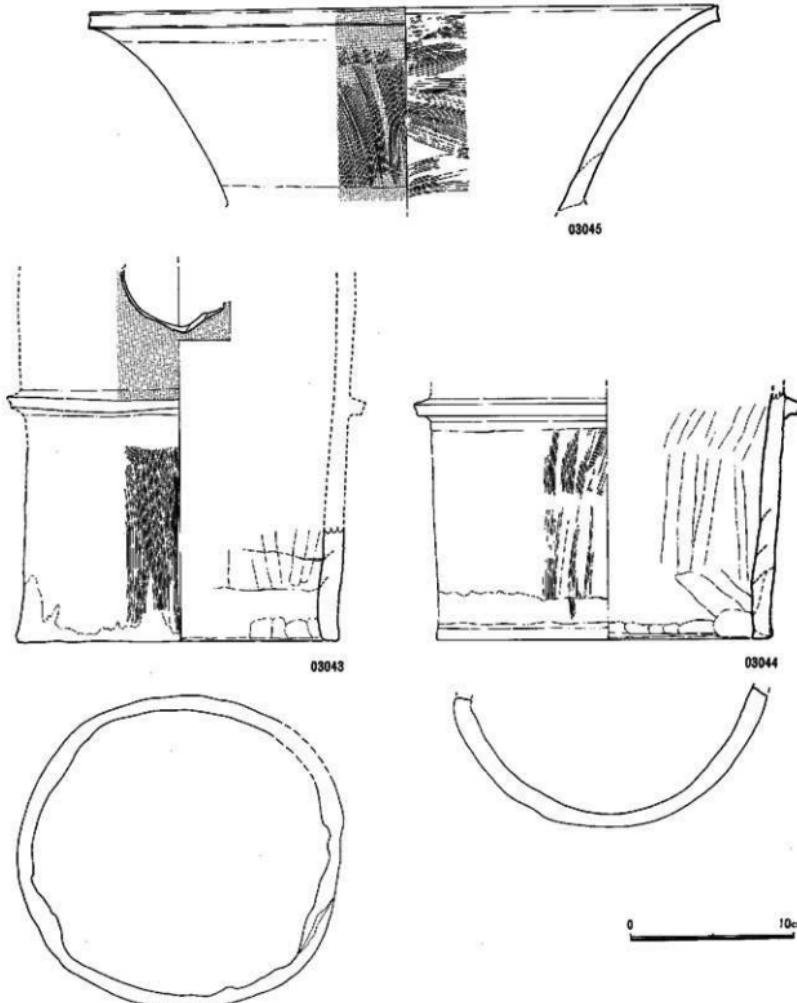


Fig.32 吉武S群1号墳出土円筒埴輪実測図(17)(1/3)

入する。また、焼成は堅織である。短甲形埴輪か。

03039は、後円部の北側周溝内で出土した埴輪片である。破片中央はタガ状に盛り上がっていたものが剥がれ落ちている。そしてその後の器面の磨滅は著しく、僅かに下部に有軸羽文を認めるのみである。有軸部は2.8cm幅と考えられ、3本沈線のうちの中央線に矢羽状の羽状文を1cmの間隔で刻ん

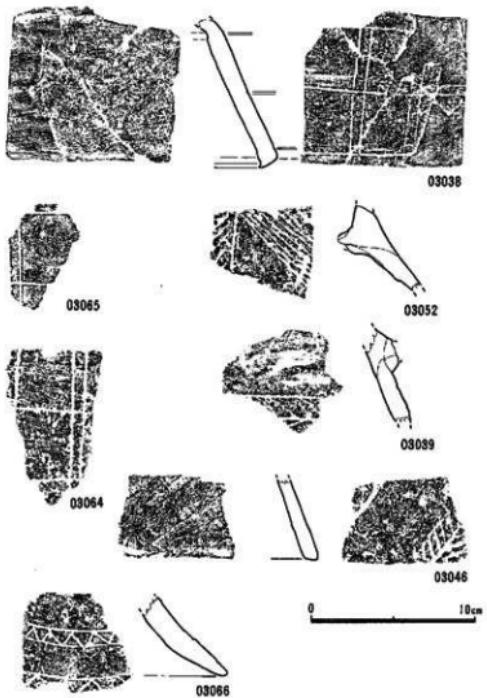


Fig.33 吉武 S 群 1 号墳出土形象埴輪実測図(18)(1/3)

面には突出部があり、他と連絡して立体的な形状となるものと考えられる。外面は、斜め方向の 7 本単位の平行沈線文と継方向の沈線に斜めに交叉して描かれた 5 本以上の沈線文様が隣り合って描かれている。また、内面突出部の上端には横ハケメ調整が認められる。器色は、外面が暗褐色、内面が暗褐色を呈する。また、器壁は赤褐色を呈し、よく焼けている。胎土はやや粗で、石英・長石・赤色粒子を多く混入する。また、焼成は堅緻である。

以上、埴丘部の埴輪列および周溝出土の埴輪について個別に説明を行ってきたが、基本的に埋置時の原位置をとどめている埴輪は後円部東半部の円筒・朝顔形埴輪の埴輪列のものが大半を占め、しかもこれらの殆どが上部を失っているために、他に埴丘内や周溝内などで出土した形象埴輪との配列関係を明らかに出来ないのは残念である。しかし、少量ではあるが形象埴輪片は主に埴丘の北～北東側を中心に出土している点で、この古墳の奥津城としてみられる視点が主に古墳の北～北西方向側にあったのではないかと考へられる。

でいる。器色は、外面の下部が暗褐色、同上部が灰黒色を呈する。また、内面は淡褐色を呈する。胎土は密で、石英・長石・赤色粒子を大量に混入する。また、焼成はやや軟質である。短甲あるいはユキ形埴輪か。

03046は、後円部の埴丘東側で出土した埴輪片である。下端面はへら切りと思われる平坦な断面形をなし、器面の磨滅が著しい。外面の上下にはそれぞれの軸線方向が一致しない有軸羽状文が 2ヶ所に描かれている。下部のものは下端部に近く、破断のために全体を残さない。また、上端付近のものは 3 本の平行沈線のうちの中央線に沿ってほぼ 5 mm 間隔に矢羽状の羽状文を描いている。羽状文は 3 本の沈線文を描いた後に描かれる。

また、内面はへら状工具による横・斜めのナデ調整が鮮やかに残る。器色は、内外面ともに淡黄褐色を呈し、外面は全面丹塗りを施す。胎土は密で、焼成は堅緻である。

03052は、後円部の南側埴丘内で出土した埴輪片である。内

面には突出部があり、他と連絡して立体的な形状となるものと考えられる。外面は、斜め方向の 7 本

第二節 吉武 S 群 2 号墳（方墳）の調査

1. 調査前の遺存状況 (Fig.35、Pl.1)

S2号墳（方墳）は、S1号墳（樋渡古墳）の北側に隣接して造営されており、両古墳の周溝外縁間ではわずかに10mを測る距離にすぎない。しかしながら今回の調査以前には、一帯は水田化されており、地上で識別できるマウンドや周溝状のくぼみなどは全く観察することはできなかった。

2. 墳丘の形状と規模 (Fig.35、Pl.2・18~20)

S2号墳は、前記のように水田化のために墳丘は全く失われており、墳丘裾部をめぐる葺石とこれを包囲する周溝を残すのみである。

墳丘は、南北の墳丘軸線が磁北よりやや東側に偏する位置にあり、墳丘の南辺・西辺に比較して東辺はやすぼまりいびつとなるが、墳形は方形と考えられる。その墳丘規模は、葺石の残る南辺で全長17m、東辺で12m以上・西辺10m以上を測る規模である。なお、墳高は、不詳であるが、周溝底から葺石天端までが約50cmを残す。

3. 埋葬施設

埋葬施設は、水田化されていたために完全に削平され、隣接するS1号墳（樋渡古墳）と同様に全くその痕跡を確認することはできなかった。このことは昭和30年代にS1号墳（樋渡古墳）の土取りが行われた墳にはすでにS2号墳は墳丘を全く残さない現在の状態になっていたものと考えられる。

4. 外部施設 (Fig.35・36、Pl.18~20)

周溝 周溝は、北辺を全く失っているが、南辺、東辺・西辺の一部を残す。その規模は、延長が南辺で23.8m、東辺で15m以上、西辺で13.5m以上を測る。また、周溝の幅員は、南東隅付近の幅2.5mがもっとも狭く、南西部コーナー付近で3m、西辺中央で3.5m、また、東辺中央で4mとなり、墳丘のひずみに沿った形状となっている。なお、周溝の現存する深さはほぼ50cm程度であるが、溝底の高さは南辺付近がもっと高く、東・西辺では北側に向かってやや低くなる傾向にある。

周溝では、西辺の北側寄り溝底では特に肩部に直弧文を描いた朝顔形埴輪などの円筒埴輪が少量ではあるが、ほぼ完形に近いものが出土している。

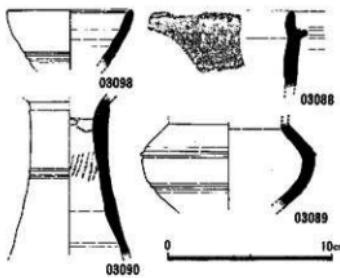


Fig.34 吉武 S 群 2 号墳周溝内出土土器実測図(1/3)

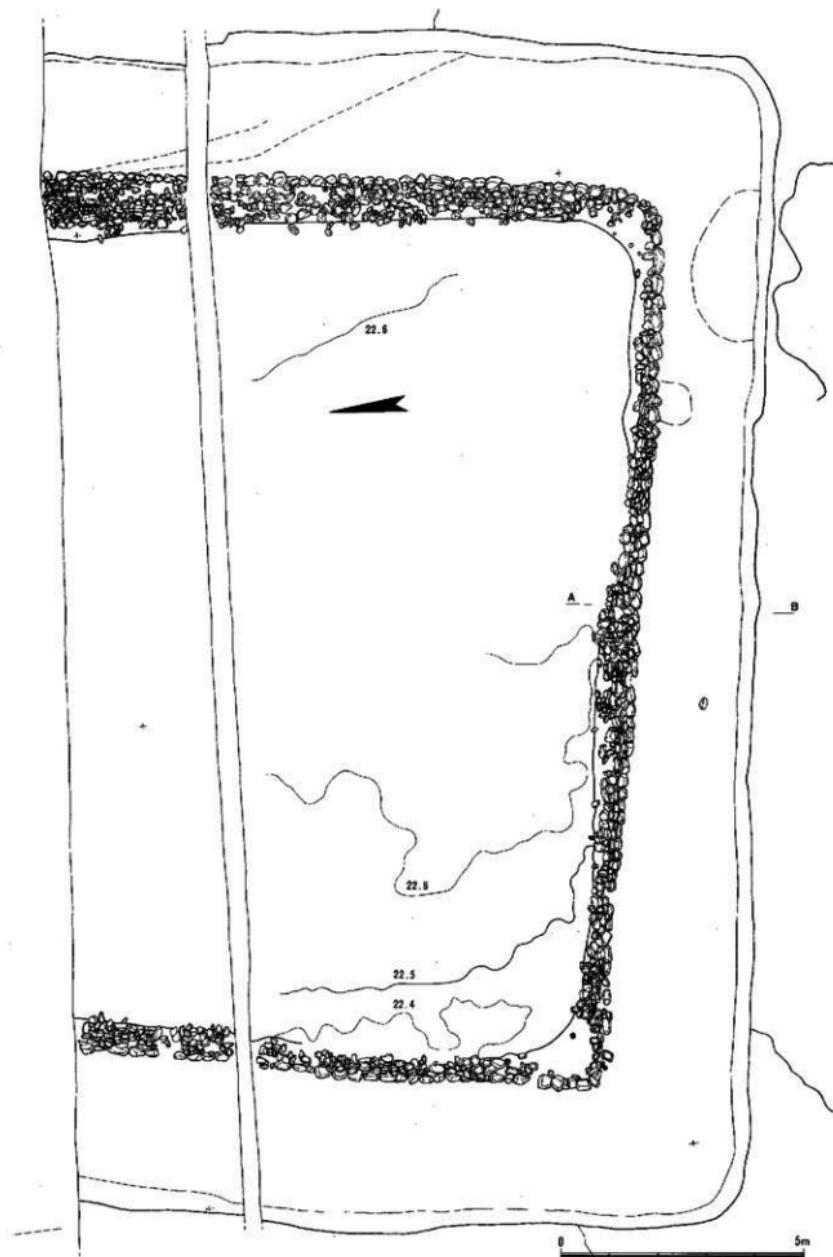


Fig.35 吉武 S 群 2 号墳出土状況測量図(1/100)

葺 石 蔷石は、東南や南西のコーナー付近でかなりの部分が失われているが、基底部の根石は長径が30cm程度の転石を使用し、この上部に径が10~20cmの転石を積み上げる。これらの石材は殆どが花崗岩疊を使用している。

5. 出土遺物 (Fig.34・37~40、Pl.25~27)

① 土器類 (Fig.34)

須 恵 器 (Fig.34) 須恵器は全て周溝内の埋上から出土したもので、他の埴輪類と異なり周溝が埋積する過程で堆積した遺物に相当する。

横 瓶

03098は、南側周溝内で出土した横瓶口縁部である。口縁は内湾気味に外方に開く。内外面ともに灰かぶりで、灰白色を呈する。器面調整は、内外面ともにヨコナデである。口径7.5cm、残存器高3.6cmを測る。胎土は密で、焼成も堅緻である。

高 杯

03090は、南側周溝底から出土した小型の高杯脚部である。外面は白く灰かぶりとなり、内外面ともに淡灰色を呈する。杯部および脚端を失う。脚付け根の内面には杯との接合痕が残る。また、筒部の中央に一条の浅い沈線文をめぐらす。器面調整は、内面裾部近くにヨコナデ、筒部の中位に斜めのヘラナデ調整がみられる。脚付け根径4.9cm、残存器高9.5cmを測る。胎土は密で、焼成も堅緻である。

有 蓋 壺

03088は、周溝内出土の有蓋壺口縁部の小破片である。全体の約1/6を残す。小破片のため口縁部の傾きには不安があるが、小さい受部と直立する短い立上がりに特徴がある。外面は灰かぶりで自然釉となっており、内外面ともに淡灰色を呈する。外面の受部下には振幅の小さい、幅広い波状文をめぐらす。器面調整は、内面で口縁部立上がり部でヨコナデ、これ以下では横方向のヘラナデを加える。胎土は密で、焼成とも堅緻である。

甕

03089は、西側の周溝内で出土した小型の甕である。口縁部と底部を失う。胴部の上半は灰かぶりとなっている。また、全体に器面の荒れが著しい。胴部の中位に低く、細い突帯を1条、下半に押線状の突帯をめぐらし、この間に長さ1cm程の原体圧痕文をめぐらす。器色は、外面の胴部下半が黒色、内面は上半部が青灰色を呈し、下半は灰かぶりで暗黄緑色となる。胴部最大径11cmを測る。胎土はやや粗で、焼成は堅緻である。

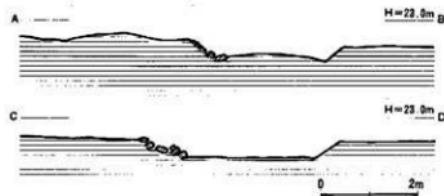


Fig.36 吉武S群2号墳断面図(1/100)

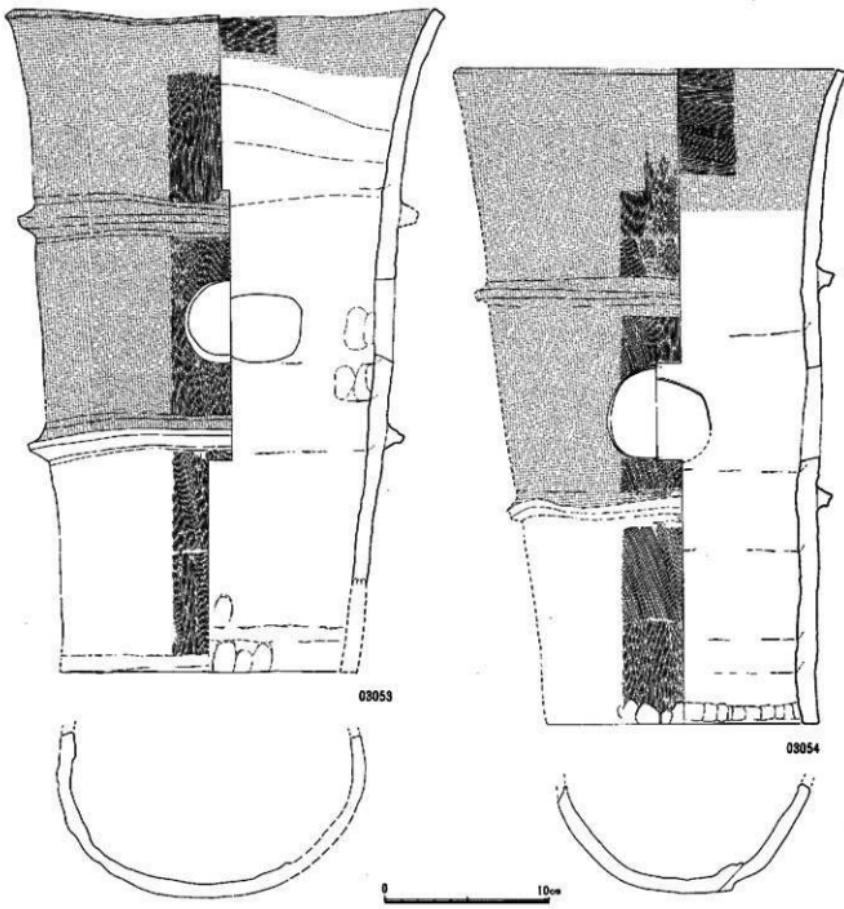


Fig.37 吉武S群2号墳周溝内出土円筒埴輪実測図(1)(1/3)

② 墓輪類 (Fig.37~40, Pl.25~27)

円筒埴輪 S2号墳の円筒埴輪は、すべて周溝内からの出土品であるが周溝東側からの出土品が比較的多い。以下、個別に説明を加える。

03053は、周溝内出土の円筒埴輪である。底部端の一部を失うが、殆ど器体の全体を知りうる。器体は、底部からそれぞれ15cm、23cmの位置に、やや形状の異なる2条のタガをめぐらし、二本目のタガ以上で緩やかに外方に開く。2本のタガ間に内径が4.5cmを測る円形透かし孔を前後に一対穿つ

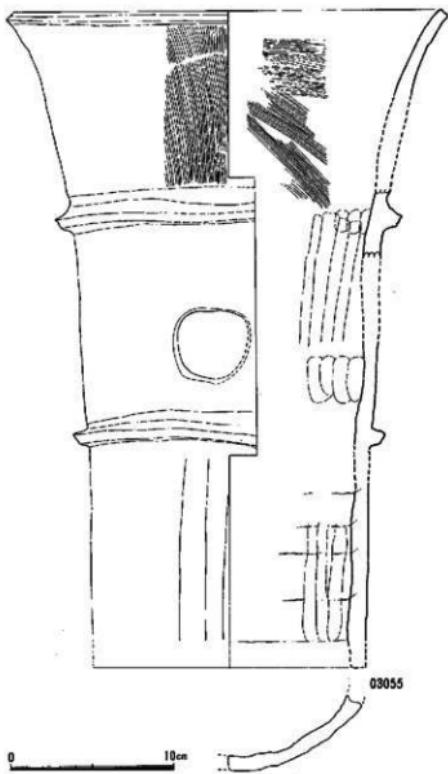


Fig.38 吉武S群2号墳周溝内出土円筒埴輪実測図(2)(1/3)
後に一対穿っている。器面調整は、外表面が両タガの上下に細かい縦ハケメを施した後、口縁部・タガ裾にヨコナデを加え、底部端は指オサエが残る。また、内面は底部に丁寧な指オサエを施し、他は接合部を中心で指オサエ、不定方向のナデによる調整を施す。また、器色は、外表面が暗褐色～灰褐色を呈し、口縁部下、一段目タガ以下に黒斑が残る。また、内面は暗褐色～淡褐色を呈する。そして外表面の一段目タガ以上と内面の口縁部に全面丹塗を施している。法量は、器高40.1～40.2cm、口径23.3cm、底部径16.6cmを測る。胎土は密で、焼成も堅緻である。

03055は、周溝の東側で出土した円筒埴輪である。底部からそれぞれ14cm、23cmの位置に二条のタガをめぐらす。器形は、二段目のタガ以上から外方に開く口縁部を有し、タガ間は直線的な器壁とならない。両タガ間には内径が4cm程度の円形透かし孔を前後に一対穿つものと考えられる。器面調整は、上部タガ以上に細い縦ハケメを残し、下段タガ以下では幅1.7cm以上の工具を使用した縦方向のヘラナデがみられる。また、内面は口縁部付近で横・斜めの細かいハケメを残し、これ以下では接合面を中心とした指オサエ、ヘラ状工具によるナデ、指ナデが顕著に観察できる。

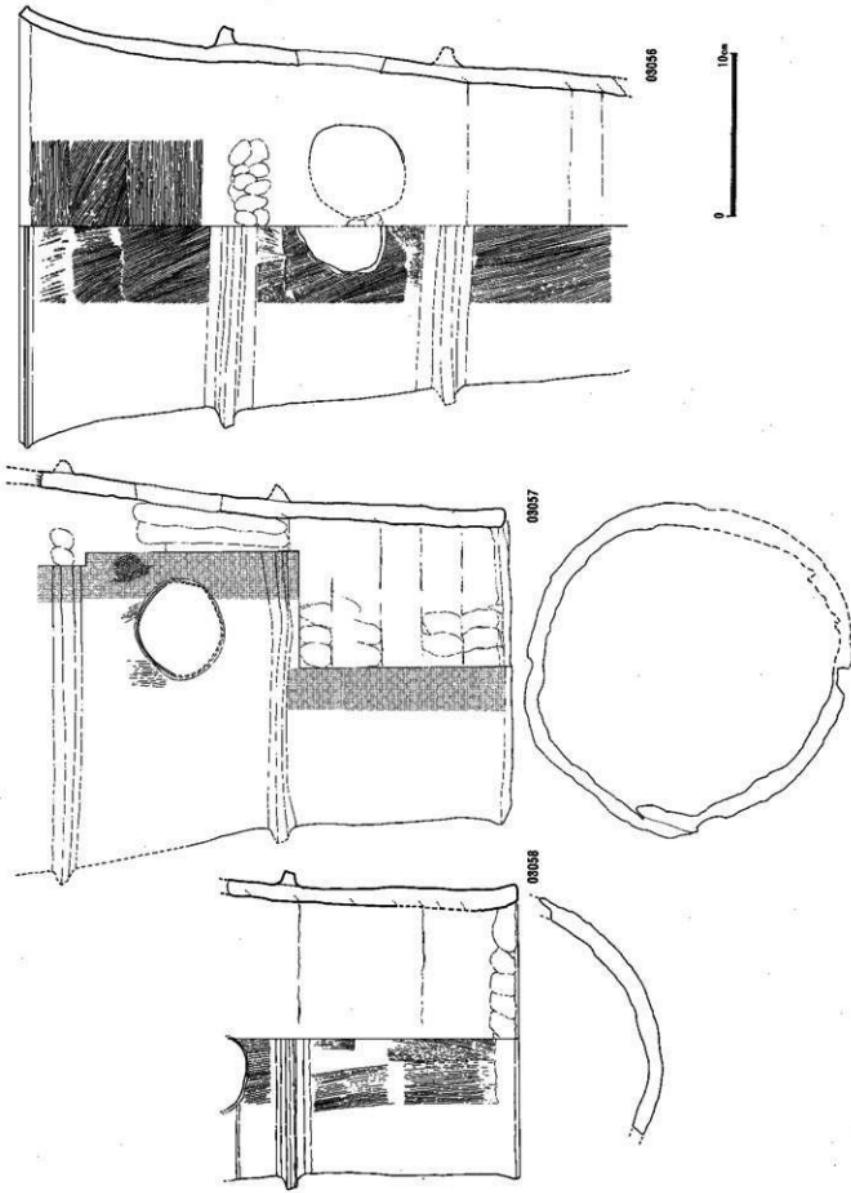
ている。裏面のものは正面に比較して横方向に長く、上下の刃が約4cmを測る楕円形となる。器面調整は、外面で両タガの上下に細かい縦ハケメを施し、この後に口縁部・タガ裾の上下および底部端にヨコナデを加えている。また、内面は口縁部に細かい横ハケメ調整がみられる他、これ以下では横方向の幅広いヘラナデが見える。また、接合部では指オサエ後にナデ・ヨコナデが各部位に施されている。器色は、淡赤褐色～暗褐色で、一段目タガ以上は全面丹塗となっており、口縁部から一段目タガまでは黒斑となる。また、内面は暗褐色を呈する。

法量は、口径27cm、器高40.7cm、底部径18.3cmを測る。胎土は密で、焼成も堅緻である。

03054は、周溝の東側から出土した円筒埴輪である。底部からそれぞれ14cm・23cmの位置に低い、下向きのタガ2条をめぐらすが、口縁部の開きはあまり顕著ではない。両タガ間に径

5.5～6cmの円形透かし孔を前

Fig.39 吉武S群2号坑周溝内出土円筒埴輪測図(3)(1/3)



器色は、外面が褐～淡褐色で、下段のタガ以下に黒斑が残っている。また、下段のタガ以上は全面とも丹塗である。内面は、暗褐色を呈する。法量は、口径26.2cm、器高40.2cm、底部径16.9cmを測る。胎土は密で、石英粗砂を多量に混入する。また、焼成は堅緻である。

03056は、周溝の東側で出土した円筒埴輪である。全体に器壁が薄く、華奢なつくりである。底部を欠失するが、口縁下12cmと26cmの位置に、下向きに付き、断面が「M」字形をなす2条のタガをめぐらす。兩タガ間には内径が5cm程の円形透かし孔を前後に一対穿っている。

器面調整は、外面が両タガの上下に細かい縦ハケメを施し、この後に口縁部・タガ裾の上下に強いヨコナデを加えている。また、内面は口縁部に横・斜め方向の細いハケメが良く残る。しかし、下部では接合部を消し去るための調整が不十分で、タガ内部の一部に指オサエが残る。器色は、外面の上段タガ以上が赤褐色～淡赤褐色で、以下は淡褐色である。また、口縁部下から残る下端部までは縦に長い黒斑がみられる。法量は、口径26cm、残存器高37cmを測る。胎土はやや粗で、焼成は堅緻である。

03057は、周溝内の東側から出土した円筒埴輪である。外面は器面の荒れが著しい。底部からそれぞれ14cm、23cm上がった位置に2条のタガをめぐらすが、これ以上の口縁部を欠失する。また、タガ間には径が5cm強の円形透かし孔を前後一対に穿っている。底部は、高さ3cm程度の粘土輪を使用し、この上に幅2.5～3cm程の粘土紐を積み重ねている。

器面調整は、外面で器面の磨滅が著しく、両タガ間の円形孔の周辺に痕跡的ではあるが、縦・斜めの細かいハケメが残る。また、タガ裾の上下や底部端にも強いヨコナデが認められる。また、内面は接合部に沿って規則的な指オサエが施され、上部にしたがって指によるナデ上げ調整が顯著である。

器色は、外面が淡黄褐～淡褐色で、タガ間に黒斑が認められる。また、外面は全面が丹塗である。内面は暗褐色を呈する。法量は、底部径19.3cm、タガ径21・26cmを測る。胎土はやや粗で、焼成は軟質である。

03058は、周溝内の東側で出土した円筒埴輪である。底部端から約14cm上がった位置に断面が「コ」字形のタガをめぐらせていている。そしてこの上部には径5～4.5cm程度の円形透かし孔を穿っている。底部は、高さ3cm強の粘土輪を使用し、この上に2～2.5cmを測る粘土紐を積み上げている。

器面調整は、外面がタガの上下にやや粗い縦ハケメを施しており、この後にタガ裾の上下・底部端についてヨコナデを加える。また、内面は底部に丁寧な指オサエを施し、これ以上は指オサエ後に斜め方向のナデ調整を行っている。器色は、外面が淡赤褐色～淡褐色で、タガ下の下半部に黒斑がみられる。また、内面は暗赤褐色を呈する。法量は、底部径18.8cm、タガ径19.5cm、残存器高17.6cmを測る。胎土はやや粗で、石英粗砂・赤色粒子を多量に混入する。また、焼成は堅緻である。

03059は、周溝の東側出土の円筒埴輪である。底部から15cm程上部に、下向きで断面「M」字形のタガをめぐらし、この上部に径5cm程度の円形透かし孔を穿つている。

器面調整は、外面でタガの上下に他のものに比較するとやや荒い縦ハケメを施し、この後にタガおよびタガ裾の上下にヨコナデを加える。また、底部端はヘラ状の工具を使用し、横方向にナデしており、面取り様となっている。また、内面は底部に丁寧な指オサエがみられる。

器色は、外面が淡褐色で、タガの上部および下部の上半部に亘って黒斑が認められる。また、内面は淡褐～褐色を呈する。外面が丹塗であるかは不詳である。法量は、底部径18.4cm、タガ径20.5cm、残存器高20.8cmを測る。胎土はやや粗で、石英細砂・粗砂、赤色粒子を多く混入する。

また、焼成は堅緻である。

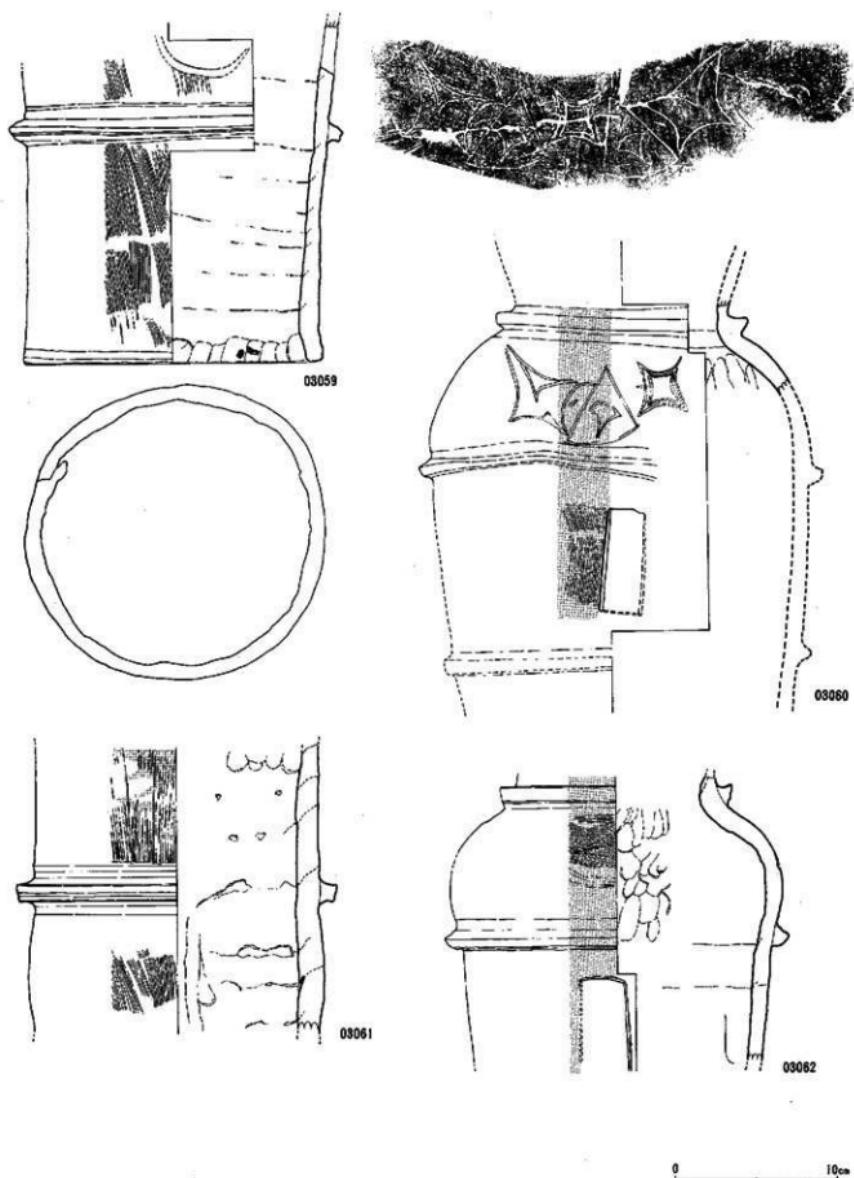


Fig.40 吉武 S 群 2 号墳周溝内出土円筒埴輪実測図(4)(1/3)

03060は、周溝内の東側で出土した朝顔形埴輪である。口縁部と底部を失っている。頸部と胴部には低いタガをめぐらしており、推定される肩部下段のタガは約13cm程下部にめぐらされたと考えられ、このタガ間に縦の長方形透かし孔を穿っている。透かし孔は、内法で短辺長2.2cm、長辺長が6.4cmを測る。また、器の肩部にはヘラ描きによって文様が描かれている。文様は縁辺が山線となる四辺形で内側にも同じ文様でなぞるもので橢形に似るもの、あるいは扇形の内側に銀杏葉に似た图形とこれの直線部分に半円をくっつけた直弧文風の3種の文様がパターンになり、2回連続するものである。

器面調整は、外面が胴部のタガ間の透かし孔近くに細かい縦ハケメが残る。また、頸部タガと胴部の上段タガとの間は非常に細かい横ハケメとなっている。頸部タガと胴部のタガ裾はいずれも強いヨコナデ調整が施されている。また、内面は頸部に指オサエ、口縁部に細かい斜めハケメが一部に残る。

器色は、外面が淡褐色で、胴部タガ以下は黒斑となっている。また、外面は全面が丹塗である。内面は、暗赤褐色を呈する。法量は、頸部径15.4cmを測る。胎土は密で、焼成は堅緻である。

03061は、周溝内の東側で出土した朝顔形埴輪の破片であろう。破片が3点あり、このうちには長径7cm以上、幅3cm以上の長方形透かし孔を残すものがあり、残存しているのは胴部の上段タガ付近と考えられる。全体に分厚く、稚拙なつくりと感じる。

器面調整は、タガの上下に細かい縦・斜めのハケメを施した後、タガ裾の上下にヨコナデを加えている。内面は、上端に指オサエを残し、他は指による縦方向のナデあるいはヨコナデである。

器色は、外面が淡褐～淡黄褐色を呈し、下半部に黒斑がみられる。また、タガから上部は丹塗である。法量は、タガ径15.6cm、残存器高18cmを測る。胎土はやや粗で、石英細砂・粗砂を多量に混入している。また、焼成はやや軟質である。

03062は、周溝内の西側で出土した朝顔形埴輪である。口縁部と胴部の下段タガ以下を欠失する。胴部タガの下部に上部幅2.5cm、残存長5.6cm縦長の長方形透かし孔を穿っている。肩部の膨らみは顕著で、器形を特徴づけている。頸部のタガは、低く、角張らず緩いつくりである。また、胴部上段のタガもド向きていびつなつくりである。

器面調整は、外面で胴部タガ以下に細かい縦ハケメ・肩部に細かい横ハケメ調整か。他はタガ裾の上下に強いヨコナデが認められる。また、内面は肩部から頸部にかけて指オサエ、不定方向のナデ調整が顕著である。

器色は、外面が暗赤褐～赤褐色で、胴部タガ以下には縦に長い黒斑がみられる。また、外面は全面が丹塗である。内面は暗褐色～暗赤褐色を呈する。法量は、頸部のタガ径14cm、胴部のタガ径21cm、残存器高18.1cmを測る。胎土は密で、石英細砂・粗砂を少量混入している。焼成は堅緻である。

S2号墳出土の埴輪は、原位置を残すものはみられなかったが、完器に近いものが多く、円筒・朝顔形埴輪の組み合わせが明らかとなった。前述のS1号墳出土の埴輪と器形や製作技法、法量などのうえでその違いを比較対照する事が必要となった。また、後述する、S1・S2号墳の北西側約200mの集落跡では同時期の廃棄用と考えられる土壤から出土した土師器・須恵器とともに円筒埴輪の小破片が伴って出土しており、当時の集落と墓地との関係を知る上で検討が出来る材料が若干ではあるが見つかっている。

第四章 おわりに

これまで吉武古墳群吉武S群の1号（帆立貝式前方後円墳－櫛渡古墳）・2号墳（方墳）について調査成果と出土遺物について説明を行ってきた。

両古墳は、前述の通り西区飯盛、吉武地区にまたがる過去の水田化による削平や上取り作業によって本来の墳丘を殆ど失っており、石室などの埋葬土体は全く残されていないことから各古墳の造営時期を計る各種の副葬遺物もまた皆無である。したがって古墳造営の時期を直接知ることの出来る材料は墳丘にめぐらされていた埴輪群と墳丘上の祭祀土器・周溝内で出土した土師器・須恵器類である。

ところで、両古墳を含む吉武遺跡群は標高25～30mを測り、南西から北東方向に傾斜する扇状地上に立地する複合遺跡である。1981年度から現在まで14次の緊急調査が行われ、第3次（1982年度、田・飯盛線第1次）、第4次（1983年度、園場整備第3次）、第5次（1984年度、田・飯盛線第2次）、第

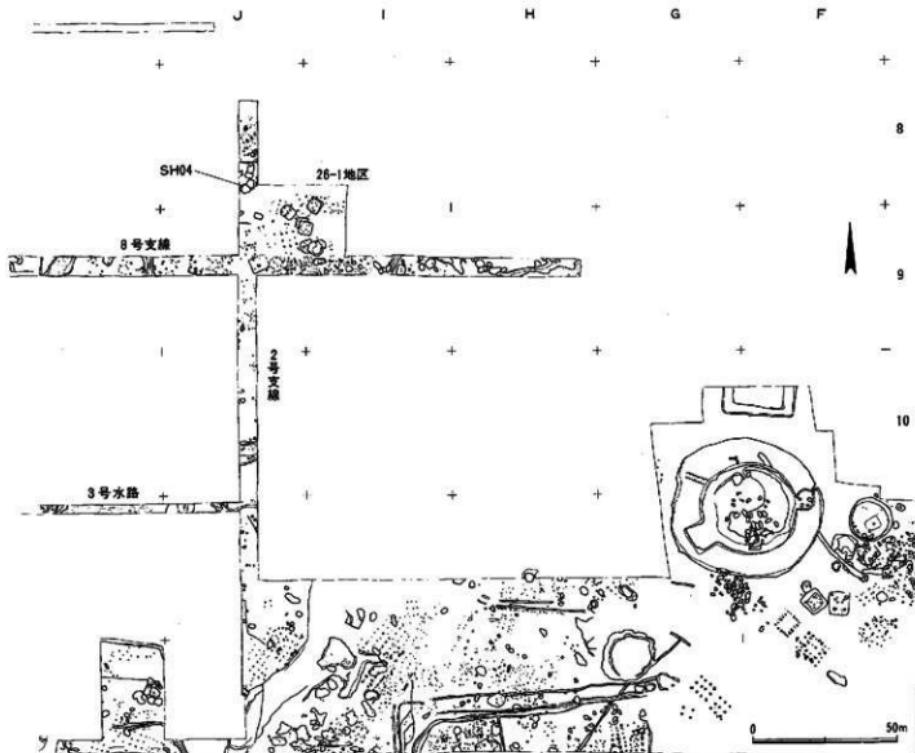


Fig.41 吉武S群1・2号墳と円筒埴輪出土のSH04土壙位置図

9次（1985年度、圃場整備6次）などの調査で、古墳時代中期の生活遺構を中心とした集落遺跡が古墳群の北西や南西側一帯に密度濃く分布していることが明らかである。

古墳時代中期の集落は、堅穴住居跡群、掘立柱建物群とこれに伴う廐棄土壙群などがあり、集落内には旧河川（自然流路）が数多く流れている。これらの遺構からは初期須恵器や陶質土器・上師器など該期の多量の土器類や木製鍬・鋤・エブリなどの農具、ネズミ返し・柱などの建築材、浮子などの漁具、木製軸や準構造船ミニチュアなどの木製品、玉類など石製祭祀具が数多く伴って出土しており、須恵器類では陶邑産の製品にとどまらない各地からの流入が窺える。

さて、今回報告した第4次調査（1983年度、圃場整備第3次）の古墳群以外の古墳時代集落跡についての調査報告は平成15年度に本報告を作成する予定であるが、集落遺構整理のために一部の遺構を点検していたところ、偶然にも円筒埴輪と土師器・須恵器の土器類を出土した土壙が見つかったため、整理の途中ではあるが概要の報告を行うことにする。土壙は、S1・2号墳の北西側約250mにあたる2号支線道路の調査区北端で検出されたSH04土壙である。

① 円筒埴輪を出土した土壙について (Fig.41~43、Pl.29 ~30)

第4次調査で検出したSH04土壙は、S1・2号墳北西側250mの2号支線道路調査区の北端に近い

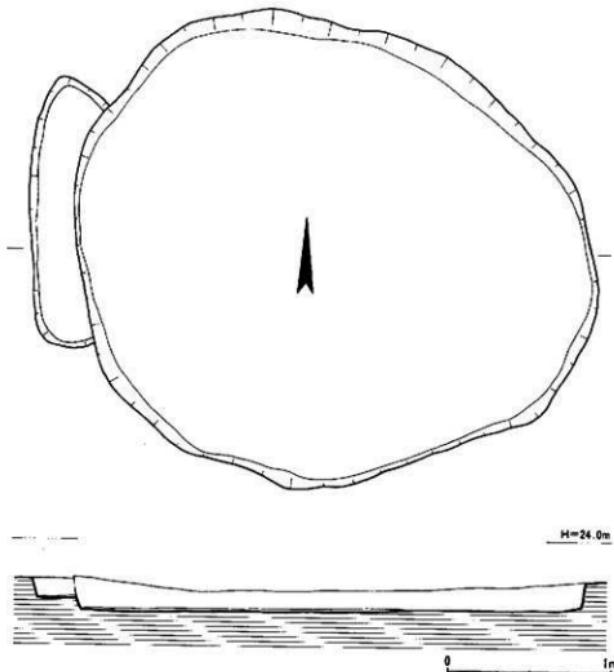


Fig.42 SH04土壙出土状況実測図(1/30)

調査区にあたり、周辺には廃棄用と考えられる大型の土壌やビット群とともに、掘立柱建物群や堅穴住居跡群・自然流路など（26-1地区・8号支線道路調査区）が多く分布する。

SH04土壌 (Fig.42, Pl.29・30)

上壤は、東西に長い不整な円形をなし、長径が3.2m、短径が2.8mを測る。また、深さは10~20cmを測るかなり浅いもので、SH03上壤と切り合っており、これより新しい時期の所産である。覆土は暗褐色を呈する。内部から円筒埴輪破片3点と須恵器杯身・高杯・マリ・小型丸底壺・甕などの同化が可能な土器類が出上した。

出土遺物 (Fig.43)

円筒埴輪 破片はタガを残すものを含めて3点が出上したが、個体数については不詳である。03099は、器壁が1.1~0.9cmを測る円筒埴輪の小破片である。

器面調整は、外面の下部にタガ幅に施される強いヨコナデがみられ、上部にはやや粗い継方向のハケメを施している。また、内面はヘラ状工具によるナデ上げがみられる。器色は、内外面ともに暗褐色を呈する。外面上部には透かし孔の痕跡が観察出来る。胎土はやや粗で、石英・長石を混入する。焼成はやや軟質である。

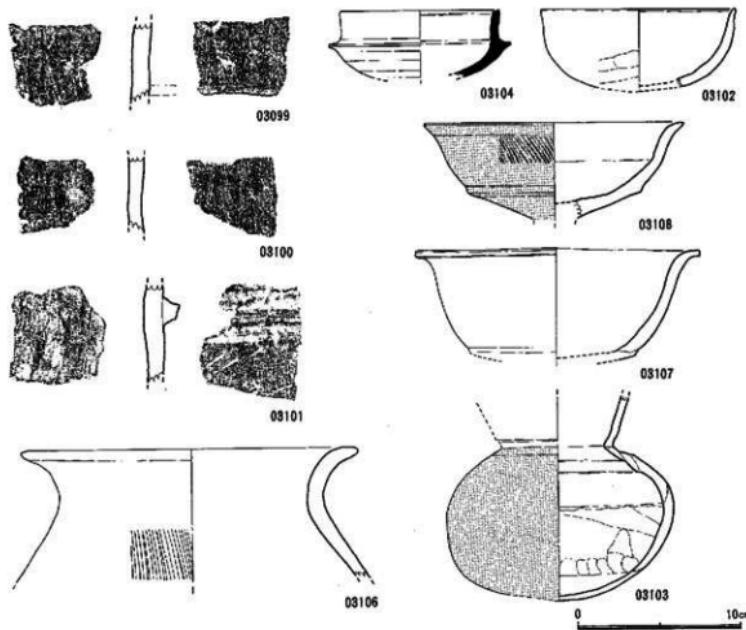
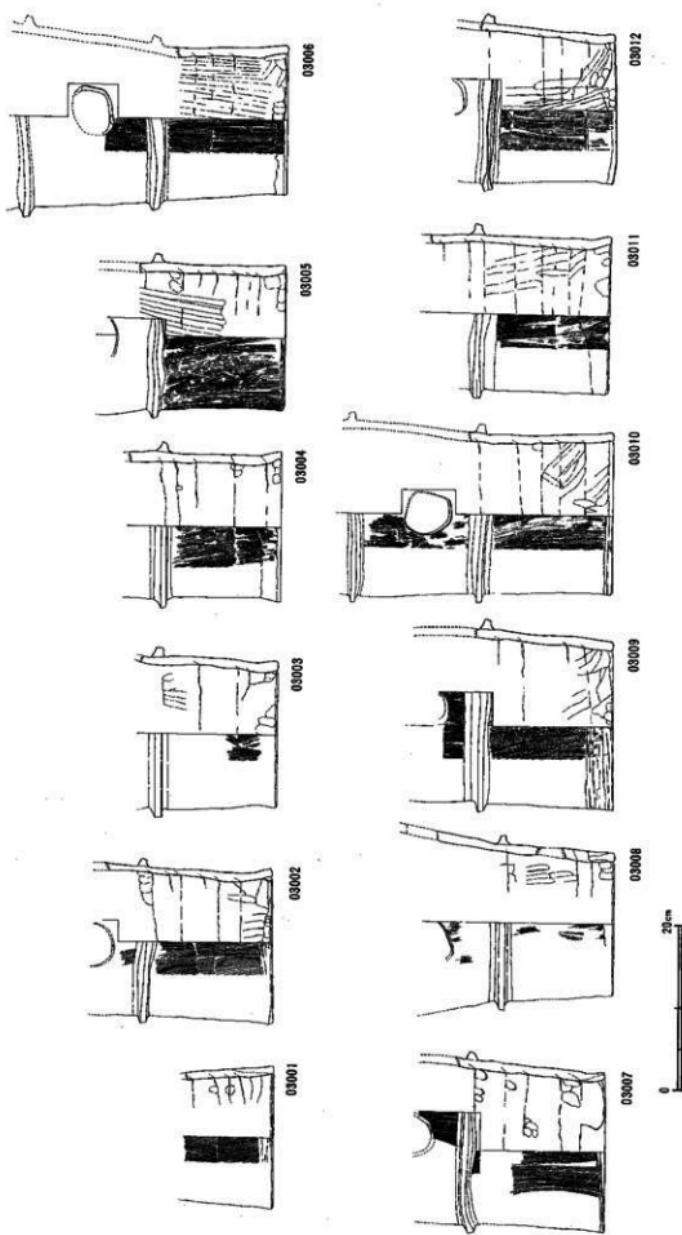


Fig.43 SH04出土円筒埴輪と共に伴土器類実測図(1/3)

Fig. 44 吉武 S 群 1 号坑出土埴輪集成圖(1)(1/6)



03100は、器壁が0.8~0.9cmを測る円筒埴輪の小破片である。

器面調整は、外面に粗い縦ハケメを施し、内面は指オサエ後にヘラ状工具による縦方向のナデ上げ調整を加える。器色は、外面が黒色で、黒斑の可能性が高い。また、内面は暗褐色を呈する。胎土はやや粗で、石英・長石の細砂を混入する。焼成はやや軟質である。

03101は、低く、断面が「コ」字形を呈するタガをめぐらす円筒埴輪の小破片である。

器面調整は、タガの下部にやや粗めの縦ハケメを施し、この後にタガの上端および裾部に強いヨコナデを加えている。また、内面は横方向のヘラナデ調整後に指ナデを加える。器色は、外面が暗赤褐色で、内面は暗褐色を呈する。胎土は密で、石英・長石砂を大量に混入する。また、焼成は堅緻である。

土 器 (Fig.43)

須 恵 器

03104は、杯身のやや小型の製品である。底部端を欠失する。受部は小型で、口縁部はしっかりとしつくりで、真っ直ぐに立ち上がる。内端は窪んで段をなしている。

器面調整は、体部の大半にロクロによるヘラ削りを施す。ロクロ回転は、時計回りである。受け部・口縁部および内面には丁寧なヨコナデを施す。器色は、外面がやや褐色をおびた灰色で、内面は暗灰色を呈する。法量は、復元口径9.8cm、受け部径11.3cmを測る。胎土は密で、焼成は堅緻である。

土 師 器

マ リ

03102は、底部を欠失するマリである。半円状の胴部から立ち上がり、口縁端部で小さく外側に引き出す。内外面ともに器面の荒れが著しい。

器面調整は、外面が胴部下半に横・斜めのヘラ削りを施した後、上半部ヨコナデか。器色は、外面と内面の口縁部付近が暗茶褐色～黒褐色で、内底付近は淡赤褐色、外底部淡褐色を呈する。法量は、口径12cm、復元器高5cmを測る。胎土はやや粗で、石英・長石・赤色粒子を混入する。焼成は軟質である。

高 杯

03108は、脚部を欠失する小型の高杯である。杯は脚部の付け根からやや上った位置で段をなし、口縁端近くで緩く外側に引き出される。

器面調整は、内外面ともに器面の磨滅が著しいが、外面の口縁下に粗い、斜め方向のハケメ様調整を施した後、口縁端部付近に横ヘラミガキを加える。器色は、内外面ともに淡赤褐色を呈し、外面には全面に丹塗を施す。法量は、復元口径16cmを測る。胎土は密で、非常に精良である。石英・長石・赤色粒子を混入する。焼成は軟質である。

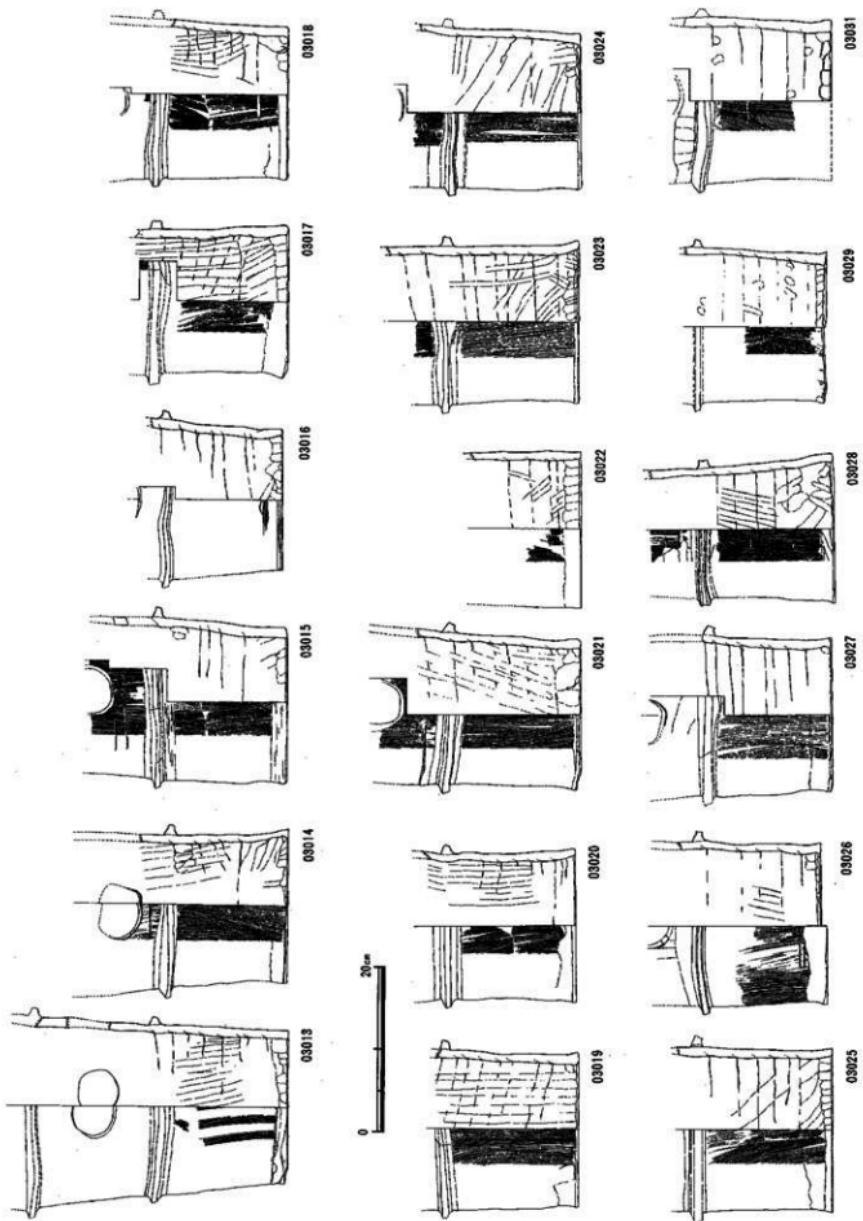
03107は、杯底部以下を欠失する高杯で、杯部はやや深い。杯底部に付く段は明瞭で、口縁端部は強く外側に引き出され、上端は平坦面をなす。

器面調整は、内外面ともに器面の磨滅が著しいが、内面で横方向のヘラナデ調整がみられる。器色は、内外面ともに淡赤褐色を呈する。法量は、口径17.6cm、残存器高6.8cmを測る。胎土は密で、非常に精良である。石英細砂を若干混入する。焼成は堅緻である。

小 型 丸 底 壺

03103は、口縁端部付近を欠失する丸底壺である。半球形の胴部は頸部でよくしまり、反転して急激に外方に開く。

Fig.46 吉武 S 群 1 号坑出土随葬图(2)(1/6)



器面調整は、外面で胴部はヘラミガキか。頸部付近は強いヨコナデでやや痩む。内面は胴部付近にヘラ削りがみえ、内底部は指オサエが顕著である。器色は、外面が淡赤褐色で、全面丹塗を施す。また、内面は淡褐色を呈する。法量は、胴部最大径14cm、残存器高10.24cmを測る。胎土は密で、非常に精良である。石英・長石・赤色粒子を多く混入する。焼成はやや軟質である。

整

03106は、よくしまった頸部から急激に外反する口縁部を有する壺口縁部の破片である。

器面調整は、口縁下に粗い斜めハケメが残り、口縁部付近はこの後にヨコナデを加える。また、内面は、器面の磨滅のため不詳である。器色は、内外面ともに淡灰褐～赤褐色を呈する。法量は、口径20.4cmを測る。胎土はやや粗で、石英・長石・赤色粒子を混入する。焼成もやや軟質である。

以上、第4次調査の第2号文線道路調査区のSH04で出土した円筒埴輪と土器類について概要を述べた。

このうち円筒埴輪は、小破片ながら3点の出土があった。これらは器壁の厚さが1cm前後と比較的薄い特徴をもっている。また、これは埴輪の製作技法上では通有の手法であるかも知れないが、タガの残る03101埴輪では、器面調整で外面のタガの上下にやや粗い縦ハケメを施した後に、タガ据部に強いヨコナデを加え、内面は粘土接合部に指オサエを行い、その後に横・縦方向のヘラ状工具によるナデ上げ調整を施す手法をとっている。また、03099はタガの上部に円形と思われる透かし孔の一部が残存し、距離的に約250m東南部に位置するS1・2号墳出土の円筒埴輪とも類似する形態の円筒埴輪と思われる。器色では全体に暗褐色を呈するものである。

一方、埴輪に伴った土器類では、上部器の高杯(03108)がS1号墳の西側周溝内で出土した高杯とも類似する形態を有する。また、この高杯とともに小型丸底甌(03103)には丹塗が施され、他にマリ、須恵器杯などの供獻具としての土器類の構成が認められることから、SH04土壤は単純な廃棄土壤としてではなく、祭祀行為を伴った土壤として認識することができるかも知れない。

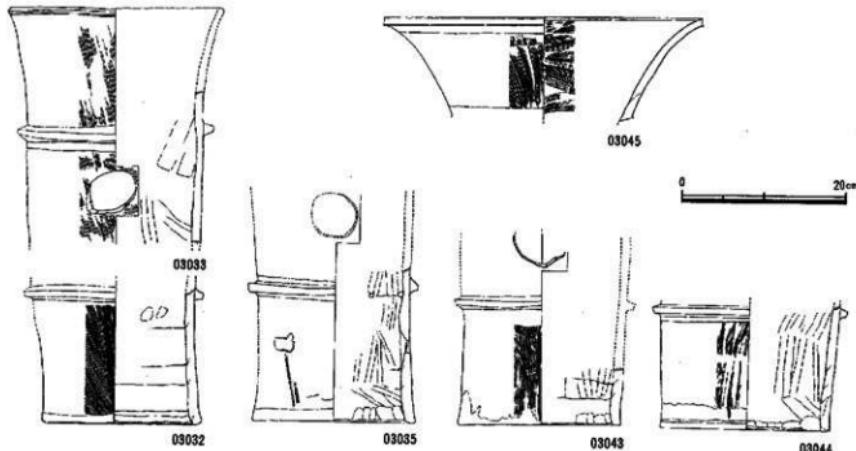


Fig.46 吉武S群1号墳出土埴輪集成図(3)(1/6)

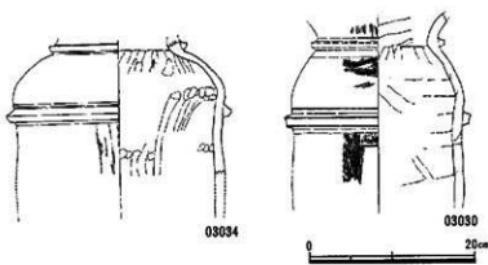


Fig.47 吉武S群1号墳出土埴輪集成図(4)(1/6)

むものの多い土壙群122基、これに溝2条、農具などの木製品を多く出土する旧河川（自然流路）9条、井戸跡3基、柵列などがあり、初期須恵器や陶質土器などが比較的まとまった数量で伴って出土しており、今回報告のS1・2号墳を中心とする吉武S古墳群と古墳時代集落との有機的関係を追究するうえで必要な材料となろう。

② S1・2号墳出土の円筒埴輪について (Fig.44~49, Pl.21~28)

S1・2号墳については、前記のように造営時期を考える上で必要な埋葬施設が全く残っていないために、時期決定にあたっては出土した円筒埴輪類が最も有効な遺物であると考えられる。

以下では、本古墳に葺かれた埴輪が全て同一の窯で焼かれたものであることを想定してS1・2号古墳出土の円筒埴輪類について観察し、その形態や製作手法の特徴について述べていくことにする。

S1号墳（樋渡古墳）出土の円筒埴輪類 (Fig.44~47)

S1号墳では、造営当時の埴丘東半部に残り、原位置を保った埴輪列のもの32点、埴丘や周溝内から遊離して見つかったもののうち6点を図示した。このうち埴輪列2点、周溝内のもの1点の朝顔形埴輪が含まれ、円筒に比較的して出土数が少ない。また、残りの円筒埴輪は、一段目タガ以上を失うものが多く、完器がすくないため全体的に部位の比較が困難な状態であるが、可能な限り観察をすすめたい。

法量 器の大きさを示す上で最もよく残っているのは、底部である。底部のうち30点が基部となる粘土輪のサイズを観察できる。その高さは最大で5~5.5cm、最小のものでも2.5cm以上を測り、全体では3~3.5cm前後のものが多い。そしてこの粘土輪の上部に幅2~3cmの粘土紐を積み上げている。

また、底部の直径は、復元値のものも含めると最大で径20.4cm、最小では17.0cmを測り、全体の平均は18.7cm強となっている。器高は、殆ど口縁部を失っているために、埴輪03006の残存高32.2cmが最高であるが、タガ2段目までの数値であり、これ以上であることは言うまでもない。

ところで、外面にめぐらされるタガは、殆どのものが1段目までしか残さないが、埴輪03006・03010・03013では2段目のタガまでを残しており、底部からのタガの位置が判る。

03006では1段目が16cm・2段目32cmで、03010でも同様の数値となっている。また、03013では1段目が16cm・2段目31cmを測り、3点の資料はほぼ同一の計画をもってタガの配置がなされたことが判る。これを比較的完器の多いS2号埴輪と比較すると、S2号のものはやや小型であるが、タガが器高

また、SH04土壙を含む第4次調査の古墳時代生活遺構については平成15年度に調査報告を行う予定である。また、土壙周辺に分布する古墳時代中期を中心とする集落遺構は、方形プランで主柱穴4本を備えた竪穴住居跡7軒、2×2或いは2×3間規模の倉庫と考えられる掘立柱建物群44棟と不整形で浅く、埋土に焼土や木灰などを多く含むものが多い。

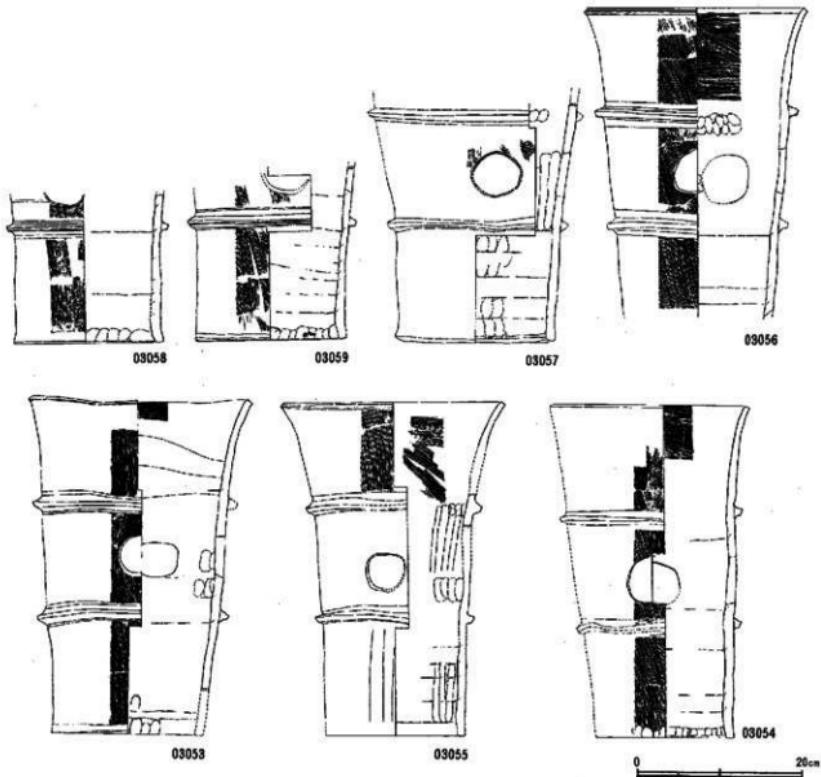


Fig.48 吉武S群2号墳出土埴輪集成図(1)(1/6)

を三分する位置にめぐらされていることが明らかである。つまり、1段目・2段目タガと口縁部までの間が同一の高さとなるようにタガ位置が決められているということである。

さて、S1号埴輪では2段タガまでを残す3点の資料で底部から2段目タガ間の高さが等分であり、他の埴輪の1段目タガの位置も殆どが底部から16cmに近い位置にめぐらされていることから、S1号出土の埴輪の器高は、完器の場合48cmを測るサイズとなると考えられる。

タガ 二段にめぐらされるタガは、断面が「M」字形をなし、中央部がやや壅み、ほぼ水平にめぐる。また、上下ともにやや下向きで、サイズもばらつきがあるが、高さ1cm前後、幅1.5~2.0cm前後を測る。

透かし孔 透かし孔は、1段目タガと2段目タガ間の縦ハケメ・ヨコナデなどの器面調整後に、両タガ間の中央正面の前後に2個、対向する位置に外側から穿たれている。その形状は、角張った不整な円形を呈し、孔の残る10点の資料では内径が4.5~5cm前後のものが多くみられる。

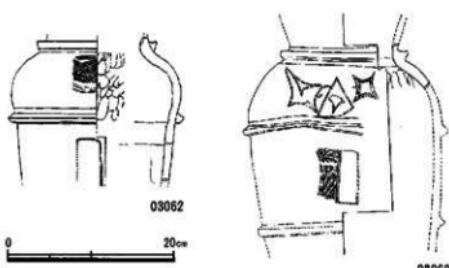


Fig.49 吉武S群2号墳出土埴輪集成図(2)(1/6)

は指による場合とヘラ状の工具を使用する場合とがあり、後者の場合には数回のナデで面取り状となる。次に内面では基部となる底部の粘土輪の張り合わせ部分を中心にして、上部の粘土接合部にわたって全体に指オサエがみられる。また、底部の基部ではこの後に指・ヘラ状工具による斜め方向のナデが顯著で、これ以上の胴部は指あるいは小口幅の狭いヘラ状工具や、やや幅広い工具を使って下部から上部に向かって、ナデ上げて器面調整を行う手法がとられており、この結果器厚は0.8~1.2cm前後に調整されている。

彩 色 墓輪のうち11点に丹塗が認められる。このうち03013・03015墓輪では底部を含む外腹全体に丹が塗られているが、他の殆どは1段目タガ以上の丹塗である。また、03054墓輪のように口縁部内面にまで丹塗がおよぶ例があり、他の墓輪も保存が良ければ同様の範囲に丹塗が施されていた可能性が高い。

黒 斑 焼成時に黒斑が認められる。底部から両タガ間にまたがる位置に、不整な円形あるいは長方形に認められる。全体の約半数にみられ、残りが良ければ他の殆どの墓輪にみられると考えられる。

胎 土 胎土は全体的に密度の高い粘土を使用している。この胎土には石英・長石の粗砂・細砂を多く混入するものも僅かにみられるが、混入は少量のものが多いと思われる。また、混入された砂の種類の観察は十分ではないが、特にこの他には朝顔形を含めた墓輪の約半数に赤色粒子が混入している。この赤色粒子は、通常の砂粒のように堅牢ではなく、取り出して指で摘むとすぐにつぶれて粉末となる脆弱なものであり、早良平野で出土する弥生時代墓棺の胎土にも混入していることが知られていてこれらの墓輪の生産地を知る上で示唆的な事実と考えられる。

焼 成 墓輪の焼きは、一部にやや軟質なものがみられるが、全体によく焼き絞まっている。

器 色 器色は、外腹が赤褐色～暗褐色で、内面が暗赤褐色を呈するが、全体に外腹がよく焼けて赤褐色をなしている。

S1号墳出土円筒埴輪の想定される形態 墓輪は、器高が高さ16cmで3つに等分され、二段タガをめぐらす小型のもので、器高は48cm、底部の直径19cm弱を測るサイズである。また、器面調整は、外腹が細かい継ハケメで口縁端・底部端およびタガの上下に強いヨコナデを施す。内面は指オサエ、ヘラあるいは指による斜め・継のナデである。丹塗は外腹の1段目タガ以上と口縁部内面に施される。また、器色は、外腹赤褐色、内面はやや暗い褐～赤褐色を呈し、焼成時の黒斑は殆どの製品にみられる。胎土は精良なものが多く、石英・長石砂粒の他に赤色粒子が混入される。焼成は全体に良好である。

器面調整 器面の調整は、製作の工程にしたがって行われている。外腹は、細かい継・斜め方向のハケメ調整が主体である。工具は、小口幅が1~1.5cm程度の比較的小型のものを使用して丁寧に行う。

また、ハケメ調整後には、底部端・口縁部上端およびタガ端の上下部分に強いヨコナデを施している。このヨコナデのうち底部端で

S 2 号墳（方墳）出土の円筒埴輪類 (Fig.48・49)

S 2 号墳出土の円筒埴輪は、全て周溝内で出土したもので、朝顔形を含めて10点が図示できた。また、完器を含んでおり、全体に残りの良好なものが多い。

法量 円筒埴輪には03053～03055の3個の完器があり、口縁部径×器高×底部径のそれぞれの数値が03053-27×40.7×18.3cm、03054-23.3×40.1×40.2×16.6cm、03055-26.2×40.2×16.9cmを測る。また、破片では口径が26cmを測るものや底部径18.4～19.3cmのものがあるが、完器のサイズを平均して考えると、S 1 号墳のものよりも底部径や器高等がやや小さく、より小型であることが判る。

そして、このことは底部から1段目タガまでが約13.5cm前後、さらに2段目タガまでが13.5cm前後、そしてこれから口縁部までがさらに13.5cm前後の数値となり、さきの S 1 号墳の円筒埴輪の器高を推定したときに参考にしたように、器の高さを三つに等分するように2条のタガを等位置にめぐらしており、これは製品の若干のサイズの違いをこえて割合は変わっていない。底部は、高さ3cm程度の粘土輪を基部として、上部に2～3cm前後の粘土紐を積み上げている。

透かし孔 透かし孔は、両タガの中間に円形のものを正面に前後して2個対峙する位置に穿っている。孔は、角張ったいびつな円形を呈し、径が4.5～6cmを測るものである。

彩色 全体の半数に丹塗が認められる。03054埴輪では、外面が1段目タガ以上で、内面口縁部内におよぶ。

黒斑 全ての製品に黒斑はみられ、底部付近や両タガ間におよぶ細長い黒斑が観察される。

胎土 一部に粗い胎土のものがみられるが、全体的には精良な粘土を使用し、石英・長石砂を混入するものが多く、他には赤色粒子も混入する製品がある。

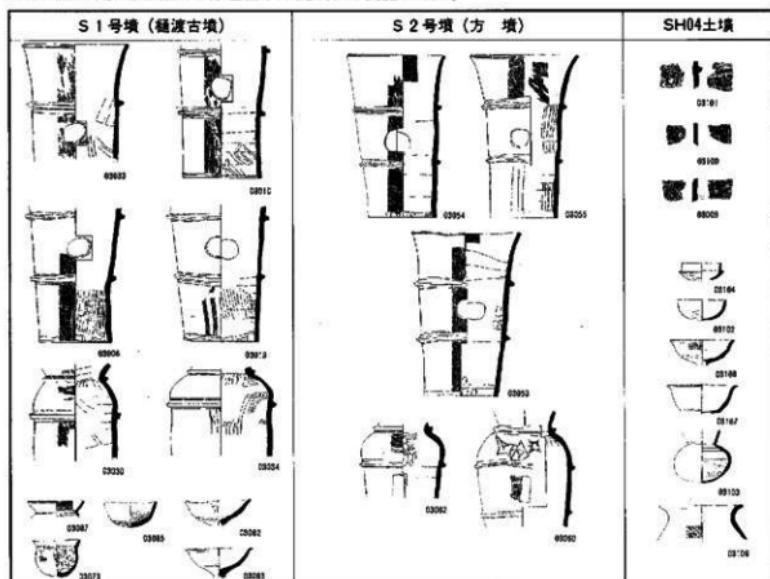


Fig.50 S 1・2 号墳・SH04土壙出土遺物集成図

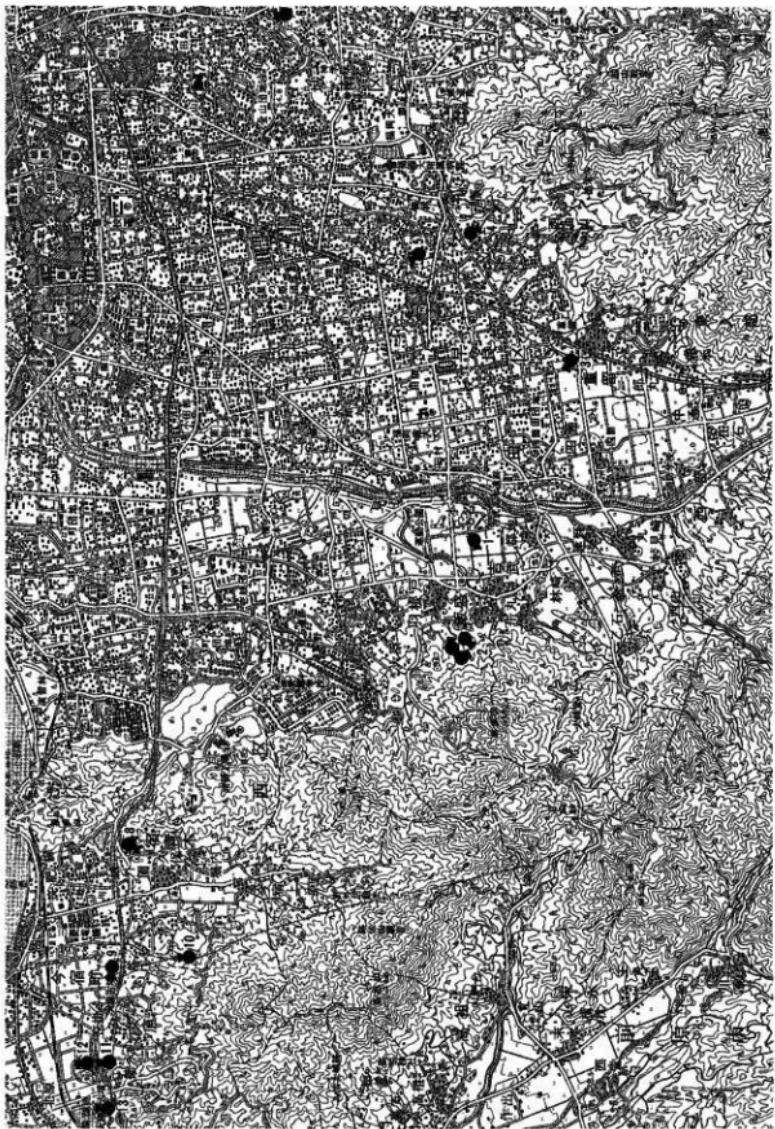


Fig.51 早良平野と周辺の前方後円墳分布図(1/50,000)
1. 西武 5号
2. 小原 1号古墳群
3. 井原古墳群
4. テンソノ引塚
5. 鶴形古墳
6. 猿石古墳
7. 宮ノ原古墳
8. 鷹崎古墳
9. 今宿大塚古墳
10. 谷上古墳
11. 若木山古墳
12. 大瀬古墳
13. 木暮1号古墳
14. 山ノ下古墳

焼成 全体に堅く焼け絞った製品が多い。

器色 外面は、淡褐色から淡赤褐色を呈し、部位によって変化に富んだものが多く、内面は暗褐色や暗赤褐色とやや暗い色調である場合が殆どである。

以上、吉武 S1・2号墳出土の円筒埴輪について観察を行ってきたが、両古墳間の埴輪には若干のサイズの違いはあるものの製品としての齊一性が窺える。

すなはち外面の器面調整には継ハケメのみを使用し、内面は指・工具によるナデ調整を丁寧に行う。

また、断面の中央がやや深む「M」字形のタガ2条をめぐらし、器高を3等分するように配置する。これは製品の人気さが変わっても3等分の割合は変化しない。

さらに、円筒の場合、両タガ間に配置される透かし孔は全て円形である。そして殆どの製品の底部を中心とした部位に焼成時の焦斑が認められ、いわゆる野焼き焼成によると考えられる。

また、丹塗による彩色も基本的に外面の1段目タガ以上からはじめて、内面の口縁内部までおよぶ手法も共通するものである。

一方、製品のサイズの平均値は、1号のものが口縁部径不明、推定器高48cm、底部径18.7cmであるのに対して2号は口縁部径25.5cm、器高40cm強、底部径17.2cmを測り、若干ではあるが1号墳のものがやや大型と考えられる。この小型化は時期的により後出の要素であろうか。

いずれにしてもこのような埴輪の製作技法上の様相は、円筒埴輪編年Ⅲ期の特徴を有すると考えられ、古墳造営時期が五世紀前葉を中心とする時期に特定されよう。

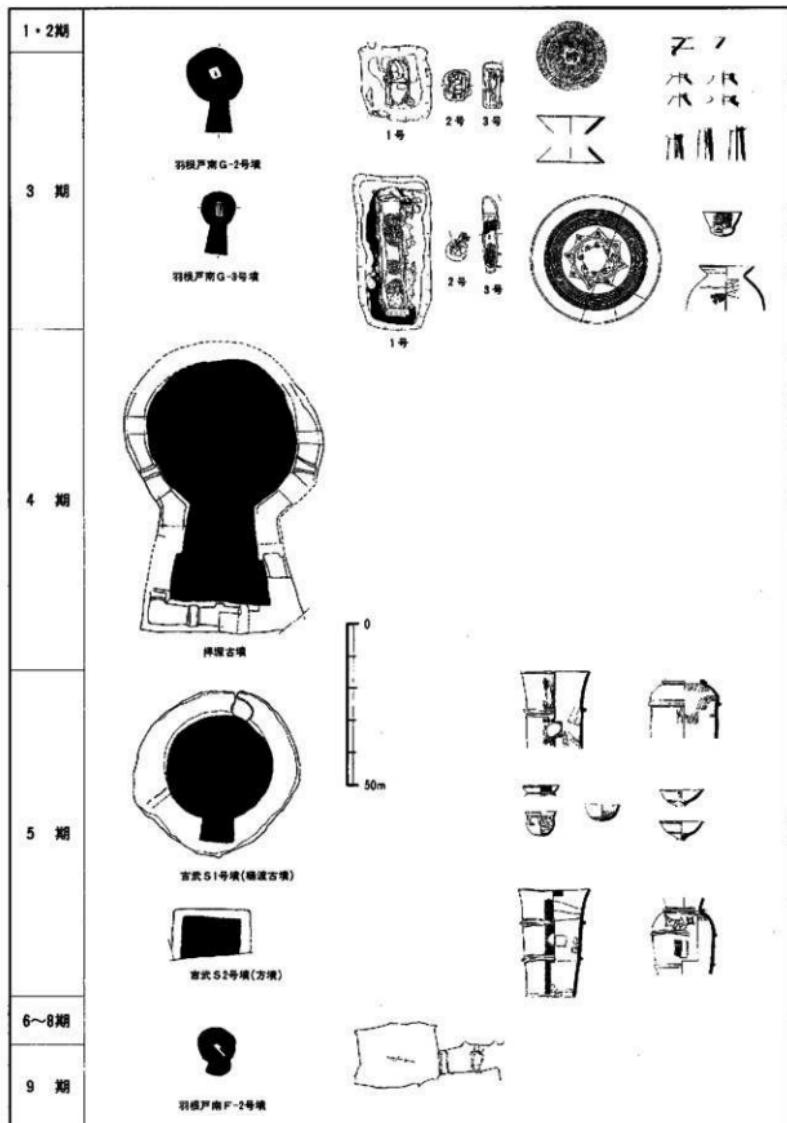


Fig.52 早良平野における吉武S群1・2号墳の編年的位置図

図 版

P L A T E S



1. 吉武S群1号墳全景（調査前）（東から）



2. 吉武S群1号墳全景(検出時)
(東から)



1. 吉武S群1・2号墳全景（検出時）（南から）



2. 吉武S群1・2号墳全景（検出時）（東から）



1. 吉武 S群 1号墳全景 (東から)



2. 吉武 S群 1号墳 墓塚検出状況 (南から)



1. 吉武S群1・2号墳検出状況全景（航空写真）（南西から）



2. 吉武S群1号墳検出状況全景（西から）



1. 吉武S群1号墳埴丘全景（北東から）



2. 吉武S群1号墳前方部及び後内部葺石検出状況（西から）



1. 吉武 S 群 1 号墳後円部埴丘遺存状況（南から）



2. 吉武 S 群 1 号墳前方部及び後円部葺石構築状況（西から）



1. 吉武 S 群 1 号墳前方部葺石遺存状況（西から）



2. 吉武 S 群 1 号墳後円部葺石遺存状況（北から）



1. 吉武S群1号墳後円部東側北半部円筒埴輪列出土状況（北東から）



2. 吉武S群1号墳後円部東側南半部円筒埴輪列出土状況（北東から）



1. 吉武 S 群 1 号墳後円部東側埴輪列及び葺石出土状況（北東から）



2. 吉武 S 群 1 号墳後円部東側埴輪列及び葺石出土状況（北東から）



1. 吉武S群1号墳後円部東側埴輪列及び葺石出土状況（東から）



2. 吉武S群1号墳後円部東側埴輪列及び葺石出土状況（東から）



1. 吉武S群1号墳後円部東側埴輪列及び葺石出土状況（東から）



2. 吉武S群1号墳後円部東側埴輪列及び葺石出土状況（東から）



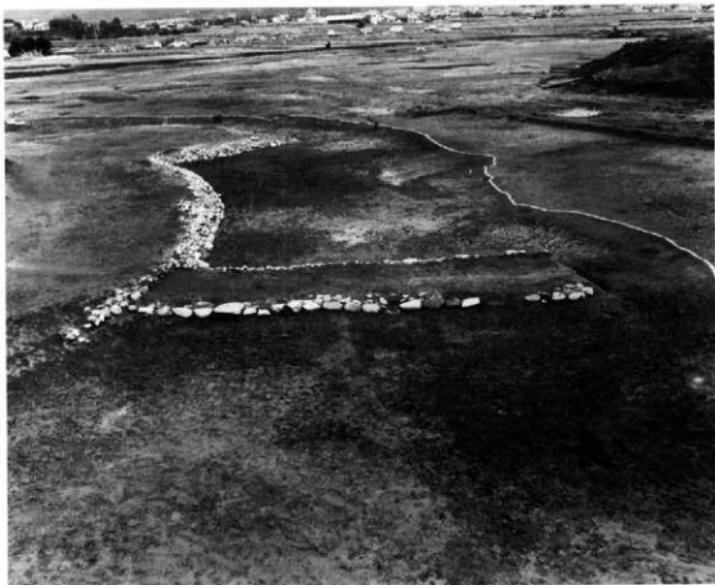
1. 吉武S群1号墳後円部南側円筒埴輪列及び葺石出土状況（北東から）



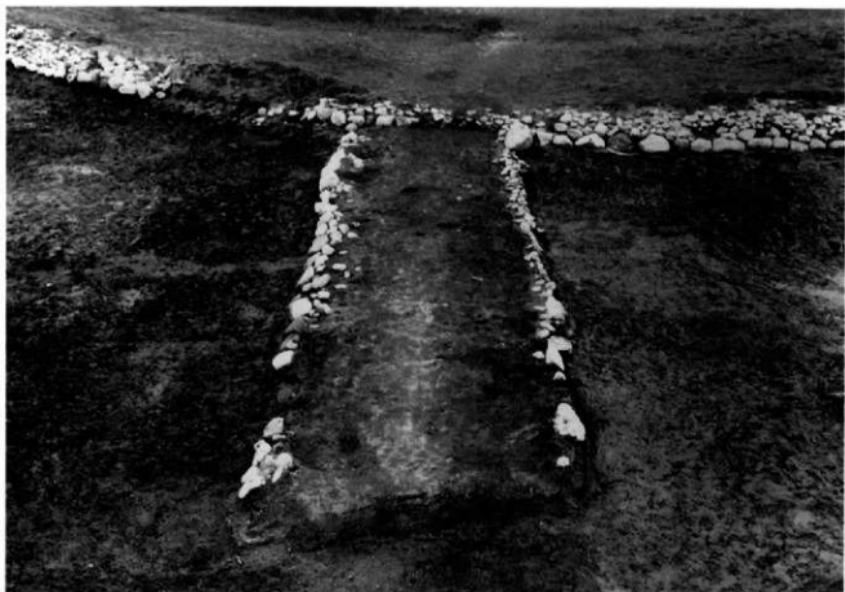
2. 吉武S群1号墳後円部南側円筒埴輪列近影（東から）



1. 吉武 S 群 1号墳前方部周溝付近遺物出土状況（南から）



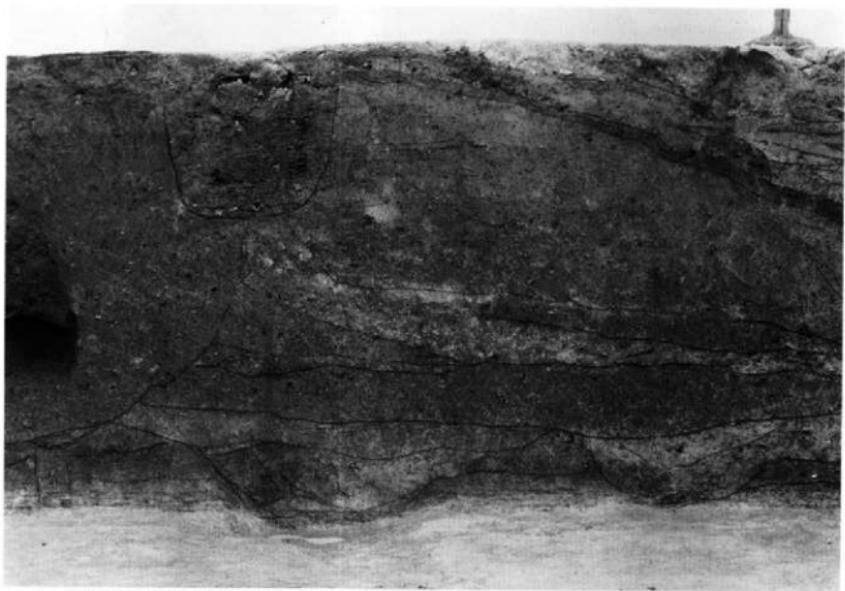
2. 吉武 S 群 1号墳後円部周溝内に付設された陸橋状施設検出状況（北東から）



1. 吉武S群1号墳後円部周溝内に付設された陸橋状施設検出状況近影（西から）



2. 吉武S群1号墳後円部周溝内土師器出土状況近影（南から）



1. 吉武 S 群 1 号墳後円部埴丘西側土層断面（北から）



2. 吉武 S 群 1 号墳後円部埴丘西側土層断面（北から）



1. 吉武S群1号墳後円部埴丘東側土層断面（北から）



2. 吉武S群1号墳後円部埴丘東側土層断面（北から）



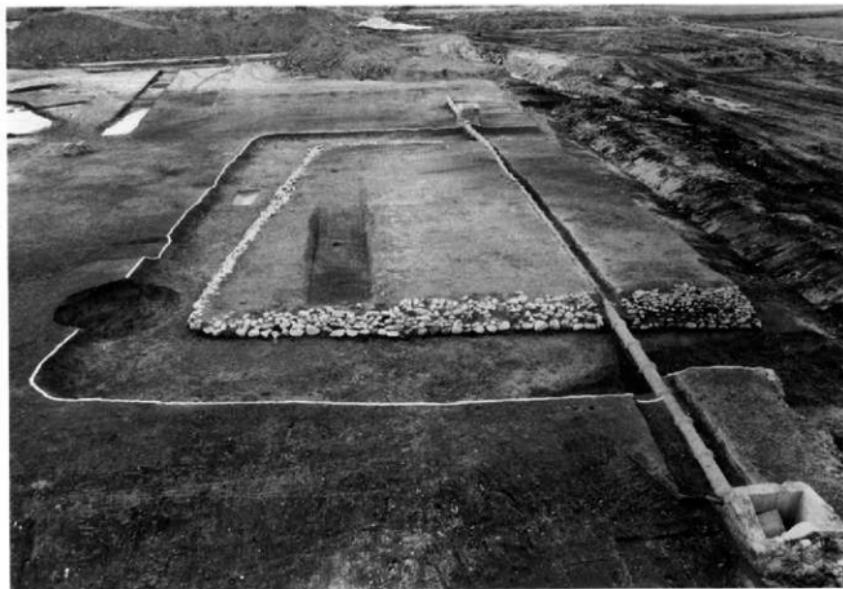
1. 吉武S群1号墳墳丘断面遠影（北から）



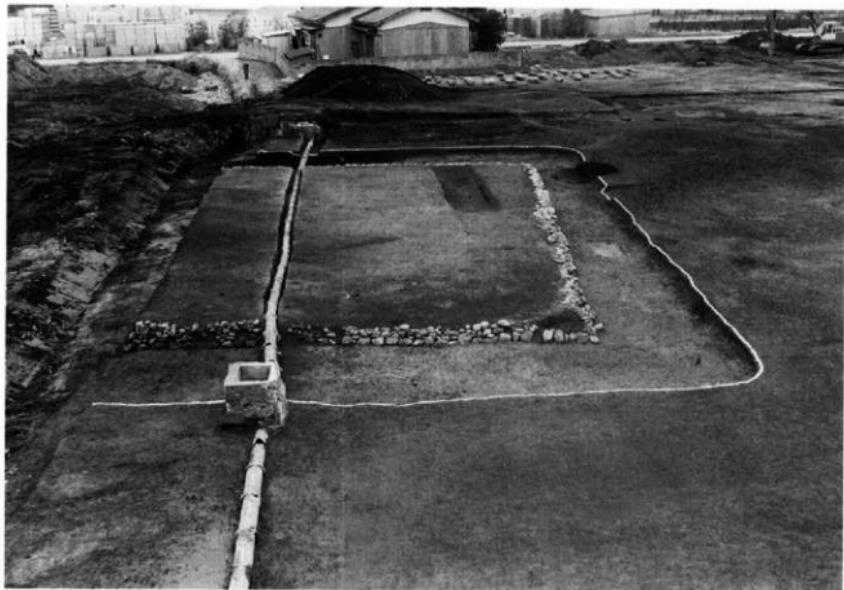
2. 吉武S群1号墳後円部西側裾部墳丘断面（北から）



1. 吉武 S 群 2 号 墳 全景 (南から)



2. 吉武 S 群 2 号 墳 検出状況 (東から)



1. 吉武S群2号墳検出状況（西から）



2. 吉武S群2号墳葺石西侧構築状況（西から）



1. 吉武S群2号墳南東隅部葺石構築状況（東から）



2. 吉武S群2号墳南西隅部葺石構築状況（西から）



03001



03002



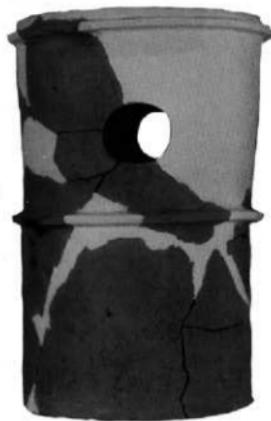
03003



03006



03007



03010



03011



03012



03013



03014



03015



03016



03017



03018



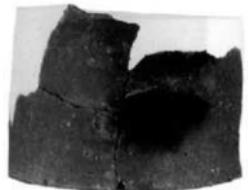
03019



03020



03021



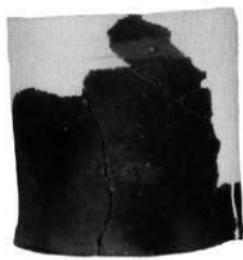
03022



03023



03024



03025



03026



03027



03028



03029



03030



03031



03032



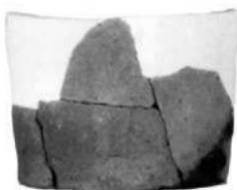
03033



03034



03035



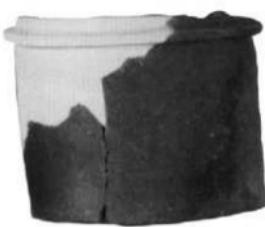
03036



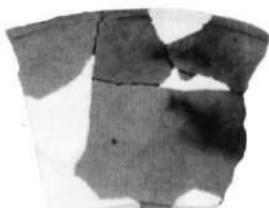
03042



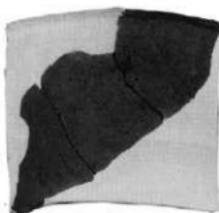
03043



03044



03045



03047



03053



03054



03055



03056



03057



03059



03058



03060



03061



03062



03087



03085



03082



03073



03083



03095



03070



03086



03052



03064



03038



03039



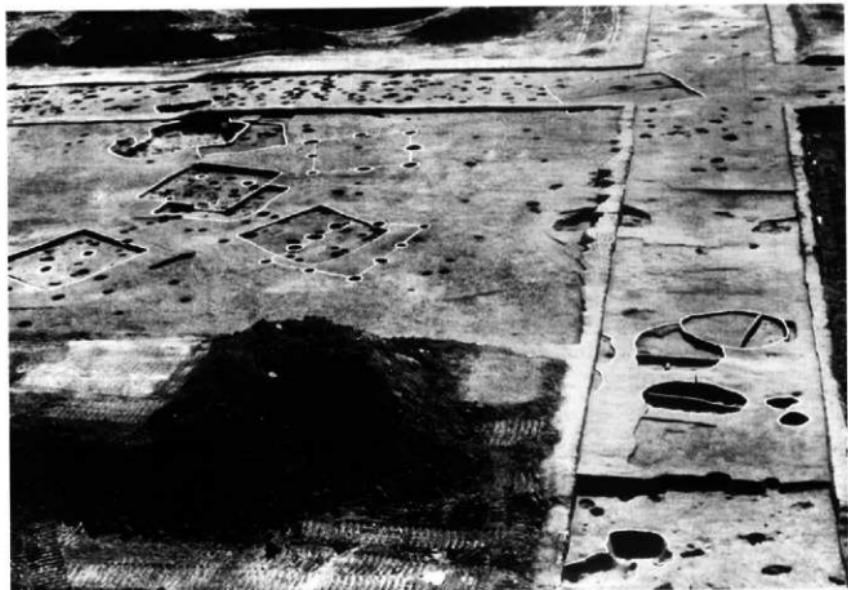
03066



03046



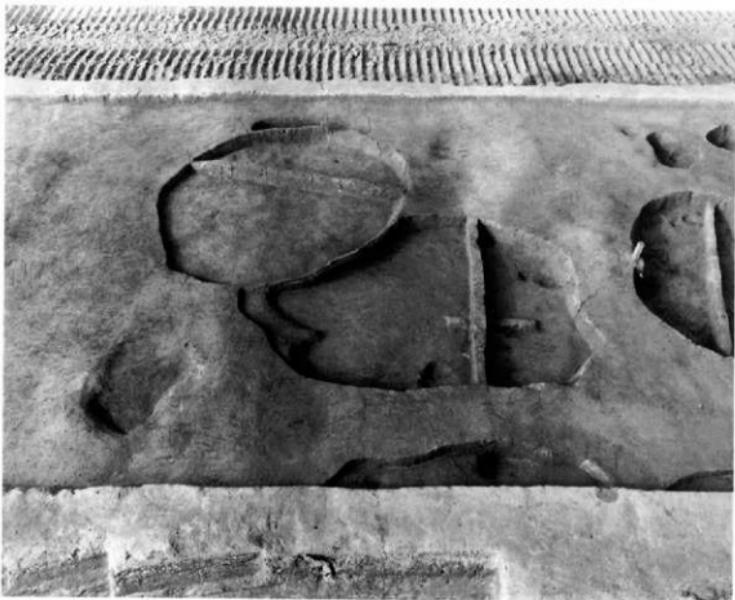
1. 2号支線道路調査区全景（南から）



2. 2号支線道路調査区全景（北から）



1. SH04土壤出土状況（北から）



2. SH04土壤出土状況（東から）

吉武遺跡群 XIV

福岡市埋蔵文化財調査報告書第731集

下巻

—金武古墳群吉武S群1・2号墳の調査—

2002年3月29日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 金丸印刷株式会社

福岡市東区箱崎ふ頭6丁目6番46号1

吉武遺跡群

XIV

下
卷

福岡市埋蔵文化財調査報告書第731集

2002

福岡市教育委員会